
もしもあたしが***だったら

織り紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしもあたしが***だったら

【Nコード】

N3751B

【作者名】

織り紙

【あらすじ】

恋がしたい、熱く煮えたぎるような恋がしてみたいと意気込んで李子は元旦、よく叶うと評判の神社へ。次の日、鏡の前の自身を見ると……。*女↓男への性転換物ですが、BL物ではありません。

（プロローグ）男、男、いい男ー！

――元旦。

あたしの家の近くにある稲荷大黒神社、通称お稲荷さんと呼ばれる場所はこの時期、特に大勢の人が訪れる。

『元旦なのだから当然じゃないか』

そう思うだろうけど、お稲荷さんの混み具合は異常と言ってもいいぐらいで日本中の人々がここに集まっているんじゃないかと思うほど。

一歩足を踏み入れただけで、歩きづらい、臭い、疲れる、の三拍子。

人々が塵のようだ、とはこのことを言うんだろう。周辺住民はそういう事情をよく知っているため敬遠して二駅先のそれなりに有名な神社まで通っている。そう、去年まであたしもそうしてきた。

けれど意に反して、今現在あたし、平西李子ひらにしりこがどうしてもしてこんな学校の購買のような所にいるのか。それはひとえに人気の秘密である、神社の恩恵を得るためだった。

……恋がしたい、熱く煮えたぎるような恋がしてみたい！！

「りいっこっ。ほらほら、言われたとおりこおんなに」

「おー。ありがと、光」

人ごみの中、少し人だから離れた場所でさらさらしたセミロングの綺麗な黒髪がよく似合う可愛らしい女の子、本条光ほんじょう ひかりから四つの赤く長方形の品物を受け取った。

「ほんとお守り買うだけでも苦勞するねえ、ここ。人気あるだけ困りものだよ」

「うん。けどこれだけ買えばあたしにもきつと……」

うふふ、とあたしはにやけながらお守りを肩から下げたシルバーのポシェットに入れる。

「まあ恋愛成就のお守り九個も買えば成就しないほうがおかしいん

だろうね。お稲荷さんのお守りってすぐ当たるって評判だし」

きよろきよろと光は周りを見渡してから、

「……だからこんな人も集まるんだよね」

そう、このお守りはよく叶うのだ。学業、就職、出産、健康、そして恋愛成就のお守りが売られておりその全てがなんと成就率八十%を超えるという。毎年全国テレビの特集でも神社に行くとしたらここ、と放送されているくらいよく叶うのだ。

それこそ人気過ぎて数量限定さえもされているほどで、一人五つまでとなっており、連れとして来てもらった光にも自分の分一つとあたしの分四つ多めに買ってもらった。

光の買った分五つとで合計九つ。

これできっと寂しい寂しい青春を送ってきたあたしにも春が訪れる！

「けどさあ……好きな人もいなくせにそんなにお守り買うなんて、どうかと思うよ？」

光があたしを呆れ顔で見つめる。

「光だって」

「私は本当に恋したいわけじゃないし、いーんだよ。どうせ来たんだから周りに興じて1つくらい買わないと」

むっかー。自分がもてるからって。ちょっとじえらしい感じちゃう。

そう、光はもてる。とどのつまり可愛いんだこの子は。背がちっちゃくて、そのくせ大きくてパツチリとした目で。顔もとっても整ってて……しかも性格だっていいしー。それでいて全然気取っていないからいくらもても本気で憎めないし、高校じゃクラス、ううん、学年のマスコットキャラクター的存在になってるんだよね。

それに対してあたしは……ブスだしがさつだし背高いしいところない。スポーツ出来るくらい？ あ、それもマイナスか、やっぱり女の子はおしとやかな方がいいよね。

どうしてこんないい子があたしなんかと親友なんだろう。

……ああ、幼稚園からずっと同じ学校、同じクラスだったからだ。すごい奇跡、運命だよなこういうのって、ある意味さ。

そんなことを伝えると。

「私、リコと幼馴染ですごく良かったよ？ 私が一番の親友は李子だけだよ」

「ああなんて可愛いんだろーね、この子はっ」

つい抱きしめてぎゅうってしてしまった。人ごみの中なのにね。

こら、そのオジサン、見世物じゃないよーっ。

——がらんがらん。

境内に付いている鐘を鳴らす。お決まりの音が鳴った。

……嘘です、はい。鐘なんか鳴らせるわけないって、こんな前に進むのも困難な場所で。替わりにおっきーな賽銭箱が置いてあって、そこに入れろってことになってる。

それでもこんな交通渋滞警笛なりっぱなし状態じゃ賽銭箱に近づくも困難なわけで、小柄な光にはちよっとお賽銭投げてても届きそうにないので替わりに投げてあげる。十五円十五円で合計三十円。こういうのはいっぱい投げててもあんまり価値ないんだよね。……って前にクラスの子に聞いたことがあった。で、あたしたちも今からそれを実践しようとしている、というわけだ。

十五円なら以後縁がありますように、って意味で縁起がいいらしいからね。

「えいやっ」

そう掛け声をあげて思いっきりお賽銭を投げる。

うわ、掛け声まで可愛くないよー、自己嫌悪。えいつ、とかのほぅが良かったかも、なんて思うけど、とりあえずそんなことは置いといて、光と並んで、なんまいだーなんまいだー。ってお経じゃないんだから。

えーと、

『神様っ、恋愛がしたいです。男、男、いい男ー！！！』

——ぴかーん。

『その……が……う』

……。

……？

……ん？

えー！？ 今なんだか声が聞こえたような、気のせい……？

……うん、気のせいじゃないよ。しっかと今この頭に響き渡りましたよ。……うな気がする。

「光、ひいかりー！ 聞いて聞いて、お願いしたときにね、神様がいろいろうってー！！」

「え」

小躍りで光のあたしよりも格段に華奢で小さな手をひっぱって人ごみから逃れたとき、開口一番にそう言うと思議そうな表情で小首を傾げられた。

……まあそりゃ当然だよね、でもあたしにはちゃんと聞こえたんだ。渋めのおじ様の声で『その願承ろう』って。

「気のせいかもしれないと聞こえたんだよー？」

「ん、そうなんだー。それより何祈ったの？ やっぱり恋人お？？」

普通に流して話題転換されちゃったよ。あははーちよい切ない。

「そうだよ、いい男をつて。光はなんて？」

「え？」

光はちよつと俯いてから頬を赤くしてごによごによって口ごもった。

「お、想いが伝わります、ようにつて……」

そういう光が可愛すぎてもう一度抱きしめそうになったんだけど、その言葉をよく考えてかなり驚いた。

「え、まさか光って好きなやついたの！？ 知らなかった……水臭いなあ。もお！ で、どこの男よ？ クラスのやつ？」

「ひ、秘密っ、どうせ叶わないもの」

「はあ？ 叶わないって告ってみなきゃ分かんないじゃん」

そういうと消え入りそうな声で、叶わなくていいのよ……と光が

眩くのが聞こえた。光がこんなこと言うなんて……そんなにソイツってもてるんだろーか。すごい聞き出したくなった。けど正直者な光が口ごもるってことは今までの経験から絶対言いたくないって証拠だって分かる。

あたしは自然と別の話題を話し始めていた。

「ぷっはーっ」

あたしは家に帰るなりベッドにダイブして顔を枕に擦り付けている。あたしの右手には束にしてアクセサリーみたいな形にした恋愛成就のお守り。

んー、行きは疲れたけど楽しかった。

神社から結構離れた場所にいっぱいある屋台巡り、焼き蕎麦、たこ焼き、クレープ、その他もろもろ。美味しかったなあ。それから金魚掬いとかの当てもした。楽しかったよお。

来年は彼氏を作って行きたい。そう思うけど光いつもみたいに二人で行くのも捨てがたい。あ、そだ。二回行けばいいんじゃない。あたしってば超天才！

そう思うなり眠気が襲ってきて……。

「まだ夕方なのに眠う……夜ご飯も食べてないし、お母さんがきつと起こしてくれる、よ……ね」

あたしはそのままベッドに突伏したまま電気も消さず、眠気の安らかな流れにのってスヤスヤと寝入ってしまった……。

（ブローグ）男、男、いい男ー！（後書き）

初投稿です。読みにくい文章や稚拙な所もありますが、感想や批評頂けたら光栄です。これから宜しくお願いします。

(1) まさか、幽霊……!?

あたしの朝は騒音から始まった。

ぴるる、ぴぴぴぴぴぴ——部屋中に無機質な携帯のアラーム音が響き渡ったからだ。

「ん、ん……」

……んあ？ ……アラームなんて設定、したっけ？

「つかしいなあ……」

あたしは寝たままの体勢でござとベッドの下に置いてある携帯を探る。……ん、あったあった。女の子にしてはあまり飾り気のない、クマのキーホルダーだけついた携帯を開くと、

……はあ？ 六時半って学校用のアラームじゃん。まだ冬休みだつての。あたし昨日こんな設定したっけ、もしかして今日何か用事が……。うーん……。だめだ、小さいおつむで考えちゃったけど全然覚えてない。きっと間違えたよね、うん。昨日は初詣でテンションが上がってたし。まだちょい眠いし、二度寝するかな……。……って、

「あー……」

そういや昨日お風呂入ってない、じゃん……。起こしてくれなかったな、お母さん。もお、夕飯も食べてないしー。その割にはあんまりお腹は空いてないけど……。昨日屋台で食べ過ぎたせい？ 太らなきゃいいけど……。兎に角早く起きてシャワー浴びなきゃなあ。

のそり、とあたしは立ち上がって背伸びをする。

……あれ？

その時、身体がふわりと持ち上がったときに気付いた。

何だかすっごく体が軽い……。昨日はだいたいぶ歩き回ったからてつきり筋肉痛にでもなってるかと思ったんだけど。……。んー！ 絶好調だあ、部活でいつも鍛えてるからかな。

あたしは鏡台に毎朝使っている基礎化粧品を取りに行こうと、ゆったりとした足取りで人口毛の絨毯を踏みしめる。その時、ふいに

視界の隅に何かが眼に止まった。

……パンツ。

「もうっ、お母さんったらまた祐次ゆうじのパンツ置いて行って……たく。しかも制服まで……めんどくさいなあ」

壁にかけられた男物の制服を一瞥すると床下に置いてあった一つ年下の弟のパンツをつまみあげる。すると、ふと目に入ったものがあつた。

——男。

「え」

鏡に映った姿はパンツを左手に下げた、男の姿。

は？ どうしてあたしの部屋に男の人が？

きよろきよると部屋全体を見渡すけど誰もいない。何かの見間違いかと何度か目を擦って再度鏡を凝視した。

……まだ、いる！

まさか、幽霊……！？

背筋が薄ら寒くなってパンツをそのまま右手から離したら彼も同時に左手からパンツを離した。ぱさりと足元に迷彩色のパンツが落ちる——彼の足元にも。

「なっ……！」

あたしが恐る恐る近づいて顔を近づけたら彼も近づいてきて……。ペチペチ。頬を叩いてみる。向こうの彼も、頬を叩いている。

……。

……。

……は！？

「な、な、なななな何これーっ！！？」
ガチャっ——後ろのドアが急に開いた。

びくつとあたしの体が震える。そして背後から低い男の声が響いた。

「っせえなあ……何叫んでるんだよ？」

ドアを開けて進入してきたのは平西さんちの祐次君、……じゃあ

なくてえ！

「お、おまつ……ここここ、これ」

震えた声であたしは祐次に見えるように自らの顔を指差した。

「はぁ？ 兄ちゃんっ……自分の顔指差して……ついには我が家にもナルシ誕生か？」

「えええ？ 違っ、これ、これ、おかしく、おかしくない？」

「何が？ ……それより俺学校行くの2回目道あんまり分かんないかもだから一緒に連れてって昨日いったっしょ？ だからさ、もちっと早めに起きといてよ。飯食ってたらギリギリじゃん」

に、兄ちゃん？ てかあんたはまだ中学生なはずじゃ……。それに今日はまだ冬休みなはずじゃー！。

「ね、今日って……何日？」

「痴呆か、兄ちゃん。今日は四月十日！ 入学式……！」

……は？

兎に角早く着替えてくれよ、と祐次は部屋を出て行ったけどあたしの脳裏には何故という2文字が渦巻いていた。

あたしの空白の四ヶ月は？ あたしって局所的記憶喪失だったの？ っていうかあたし……。

「んな馬鹿な……」

もう一度鏡を見て眩暈がした。

——男だ。

「お、おお男だー……」

あたしは顔の筋肉を引くつかせて笑みを作る。もう、笑うしかなかった。

何が楽しくて男にならなくちゃいけないのか。あたしの心はれっきとした乙女ですよ？

起きたときは分からなかったけど低い声、それに角ばった身体、それは完全に男のものだった。

「あたしの体なんだよね……？ これ」

ちよっと、待ってよ……。よく見ると顔の造形はそんなに変わって

ない気がするけれど：元から小さかったけどあるにはあった胸も存在しないし、身長も高くなっている。

……そういえば下半身にある違和感。

「え。……………ぎゃーっ！！！！？」

あたしの絶叫は部屋中に激しく木霊した。

人間開き直れば、いや、普通の女の子だったら発狂するかもしれないけどあたしの場合ちょっと違って、普通に開き直っちゃったのだ。だって……いつ戻れるか分かんないし。それまで男でいようじゃないか。楽しんでやろうじゃないか、あっははは……なんて気にもなるはずもないわけで、あたしも普通の女の子だ。ひとしきりネガティブになったらちよっと回復しただけです、はい。こんな状況になってひとっかけらも涙がでなく、何となく現状を受け入れているのはあたしの神経が図太いだけ。

あたしはとりあえずかけてあった制服をとまどいながらも着て――制服はよくよく見るとうちの学校のもので、ネクタイが赤色、二年生のものだった――、二階にある洗面所で顔を洗い適当に整髪もしてリビングまで降りた。

「おはよ……」

「おはよー、李緒」

「ったく遅いよ兄ちゃん！」

祐次はバタートーストに齧り付きながら不機嫌そうに、お母さんはいいつも通りあたしに挨拶してくる。ちなみにお父さんは6時くらいにもう仕事に行ってしまうのでこの時間帯はいない。あたしはトーストに苺ジャムをたっぷり塗りつけて少し齧った。

やっぱりお母さんもあたしのことを男の子だと……………ちよっと待て李緒って誰だ、李緒って。

「お母さん、李緒って……もしかしてあたしのこと？」

「は？ あんた以外に李緒なんてどこにいのよ？ それにあたしって……気いでも触れた？」

「母さん、言ってやってよ。兄ちゃんさつきから変なことばっか言ってるさあ」

「……なんでもない」

祐次にぶつぶつ言われながらもあたしは黙って、というより考えながら黙々とパンを口に運んでいく。

と、いうかお母さん、そのいい方ひどくないですか？ 男になっただけで気づいたときよりもショック激しいんですけど。

……こっちの世界ではあたしは李緒らしい。ていうかもしかしてこの世界はファンタジー小説とかでよくあるパラレルワールドってやつだろうか？

いや、でも……ちよつと違うよなあ。全然世界が違うってわけじゃないし、あたしだけが呆けちゃったみたいな。

やっぱり例え信じられなくてもお母さんに相談したほうがいいかな……。これであんた寝ぼけてるの、とか言われたらさすがに泣いちゃうかもだけど……。

トーストを全て頬張り、温かい牛乳で一気に流し込むと意を決して尋ねようとあたしは口を開いた。

「ね、お母さ——」
ピンポン。

「あ、ほらっ、李緒、光ちゃん来てくれたじゃない！ 待たさないように早く学校行ってらっしゃい！ あ、今日から祐次もだったわね、いつてらっしゃい。2人とも気をつけなさいね」

「……はい」

言おうとしたことを突然の訪問によってうやむやなまま飲み込んで祐次と玄関まで向かった。

……こっちでも光は毎日迎えに来てくれるんだ。けど、憂鬱……光にまであたしが昔から男だっと思われてるんだろな……。

「おっはよお」

ガチャッと、とってを回してドアを開けると光が立っている。あたしは内心の陰気を隠し、いつものように挨拶した。

「おはようございます、先輩」

「え……」

呆然とした顔で立っている光。

「ゆうくん……?」

「はい?」

「あの……この人どなた?」

「この人は平西家の長男、平西李緒様……って先輩、もしかして昨日にでも兄ちゃんと合わせました? 兄ちゃんもちょっとぼっかおかしなこと言ってるしー」

「李……緒さん?」

あたしの姿を見てすごく怪訝な表情をする光。ま、まさか……。あたしは1つの推論にいきついた。

……光は、あたしのことを知っている?

「光、ちよつとつ。ごめん、祐次、ちよつと離れてついてきて!」

「あ、あの」

小走りであたしは光を連れて、早足で前を歩いて行った。

後ろから祐次の、やっぱ兄ちゃんと先輩ってそういう関係だったのか……、へーへー、2人の愛の時間なんて邪魔しませんよー、と何やら冷やかす声が聞こえるがこの際気にしてられない。

「あのっ、いったい何なんです」

「あたしっ、李子!」

切羽詰ったような嫌悪の含まれる光の声を掻き消すように小声で叫ぶ。

「え、え?」

「信じられないかもしれないけど、信じてくれるともあんまり思っていないけど、あたし、李子なの! 昨日初詣があつて、起きたら今日がいきなり、『今日』になってて、それで鏡見たらいつの間にかこんなものになってて……」

「李子……?」

「周りの人は昔からあたしが男だったみたいなのうに接すし、わけ

分かんないよ……」

あたしは一気に全部話し終わると肩を落として光を見る。光は初め目を丸くして聞いていたがすぐにあたしの手を握って、

「うん、信じる」

「ほんと……？」

「だって私もだもの。起きたら今日がもう四月十日でびっくり。よく見たら李子の面影もちゃんとあるし、言葉のイントネーションとかもすっかり李子だし」

「そ、そう……良かったあ。……こんな姿になっちゃって嫌われたらどうしようかと思っちゃって……」

心底安堵してあたしは光の手をきゅっと強く握った。

ほんと、良かった……。

「それにね、私、良かったよ？ 大好きな李子も同じ境遇になってくれて」

「ひかりいっ」

そんな何気ない言葉に感動してあたしは光を正面から抱きしめた。あたしも、あたしもちょー大好きだよ、光……！

「り、李子、ちょっとん？」

少し体から光を離すといやに光が顔を赤くして口をパクパクさせていた。

どうしたんだろう？ いつものことなのに……。

「お二人さあん、何話してたのか知らないけど実の弟の前でいちやつの止めてくれませんかねえ？」

「祐次！？」

いつの間にかすぐ後ろに近づいてきていた祐次がいた。気づかなかったけどあたし達は立ち止まってたらしい。

……ああ、光が驚くのも無理ないよね、あたし今男じゃなか。誤解されちゃ嫌だよ……。ちよつと、あたしはいじけた。

「別にさあ、隠れてやってくれるんらいいけど……で兄ちゃん、いつからなんだ？ 弟に隠してるなんてさあ」

「や、これは……ち、違うんだって？ ね、光？」

「さあ？ どうだろうね」

光は意地悪に微笑む。

「ひ、光？」

「どうなんだよ、吐きやがれっ」

戸惑いながらあたしは光を見るけど微笑みながら知らんぷりをして少しだけ先に歩いて行ってしまった。

（ちよ、ちよっとおー！？ 光のバカあ！！）

それから祐次に何度も聞かれながらも適当にはぐらしつつ、気づくといつの間にか学校の近くまで来ていたのだった。

(2) ほんと相良さまさまだね

(……つまらない)

あたしは男の格好で過ごすことがこまでつまらないもののだとは知りもしなかった。教室についてから、女の子に挨拶をすればどうしてか顔を赤らめて小さな声で、お、おはよう、ってどもりながら返されるし、今日元気ないじゃん、なんて言うのと、これまた小さい声で、そ、そうかな、なんて返されるし。誰に話しかけてもそんな感じで話なんて続けられない。なんなのよ、みんな前まであれだけフレンドリーだったのに……最後には何故か光にまでほかの子に話しかけようとしたら止められたし。

(なんなの、もう……)

「それでさー、新入生に可愛い子がいてー」

変わりにあんまり知らない男の子ばかりに話しかけられたけど、これまたつまらない。

お前ら今日が入学式だからって女の子にしか興味ないのか!?

ああ、男がこんな発情野郎ばっかだとは思ってなかったよ……。男同士の会話って猥談まがいばかりじゃない……。男が女に話す話と男が男に話す話ってやっぱり違うんだな、なんて実感。やばい、知らなかったら良かったかも。

(ああ、もう、つまんなーいっ!)

「ごめん、昨日あんまり寝てないんだわ。ちよい……寝る」

あたしは男っぽくそう言って寝そべろうとしたら、

「おいおい、夜遊びもたいがいにしろよー」

なんて言って去って行くしまつ。

……夜遊びってなんだよ。ああもう、いやあー! ……女に戻りたいよお。

「それでね、駅前の近くにあるお菓子屋さんすっごい美味しいんだよー。今度いこうっ」

「うん、じゃあ今日の帰りどお？」

すぐ近くであたしがよく話してるグループの声が聞こえた。もちろん光も今はそこに。

……あたしもみんなと一緒に菓子屋さん行きたい。ほんとは今頃会話に入っていつてるはずなのに。まあどうせ部活で行けないんだろうけどね。そーいや部活はどうなってるんだろ……。

……ああ、もうどうでもいいーや！ もう、本当に寝ちゃおう……。

そんな感じでずうっとつまらない時間、そしてその後入学式まであったせいでもう死にそうになりながらも現在、3時間目終了。うつ伏せのなりながら小さく背伸びをしていると軽く肩をさすられて視界を上に向ける。すると可愛い光の顔が見えた。

「ね、李……李子」

「ん……何？ 光」

こっそり小さな声で光が話しかけてきたのでこちらも自然に声が小さくなる。

「次、体育だけど。どうするの？」

「どうするって……体操服ならちゃんと持ってきたし、もちろんやるけ……あ」

忘れてた……。

今あたしが女だって知ってるのは光だけ。けど光は女子更衣室にいくわけで。一人じゃ、体を隠せない。回りは気にしないんだろうけど、あたし、これでも前は女なんですよ、嫁入り前の体は初めての殿方にしか見せられないのですよ。

「心は女の子なんだから裸見られるの嫌でしょう？」

「……しょうがないし、トイレで着替えるよ」

はあ、と盛大にため息つくとき光が言った。

「李子、元気だしてね？」

「うん……」

ああ、光は優しいね……。

「整列ー！ きょうつけ！ 礼！」

「お願いします！……！」

「出席確認すっぞー、青田あ、……石井、石井い？ ……いないのか。次、榎本お、………」

「初めはペアを組んでパスしてもらう。あの時計が五分になったらゲームをしてもらうから、ここに集まってくれな。それじゃあ、開始っ」

今日の体育はサッカー。それで男子全員グラウンドの右端に集合させられてるんだけど……左端では女子がソフトボールを初めている。ちなみにあたしはソフトボール部だったから混ざりたいのだけど……はあ、無理だろうなあ。やっぱり男の生活は嫌だあ。

今まで女で、しかも男の子に対してはかなり引っ込み事案だったあたしは、誰と組もうかなあ、なんてふわふわと視線を動かしながら思案していると、

「李緒、一緒にやろうぜ」

ななめ向かいの男の子があたしを誘ってきてくれた。

この結構な男前は確か……相良宗司^{さからそうじ}くん、だっけ？ わりと気さくな人で女子にも人気があって、あたしも幾度か話したことあるから名前まで覚えてた。

「ん、ああ、いいよ」

ふたつ返事で返すと相良くんは爽やかに笑って、じゃあ李緒なんか今日はしんどそうだし俺がボールとってくるな。先行つといてと、籠まで走っていった。

ふうん……男同士でもあんまり態度を変えてないんだね。女の子たちと話するときよりも少し馴れ馴れしくなっただけで、なかなかいい人っぽい。人気があるのも頷ける。

「行くぞーっ！」

結構遠くからブンブンと手を振ってあたしにボールを蹴りだす。ボールは相良クンの足から吸い込まれるようにあたしの足元までち

ようどの場所に届いた。

「とっとと……」

それをあたしが不器用にとってあたしも同じように蹴りだし……
ってあれ、あたしってサッカー……？

——ぼふっつ。

ボールは変な音を出して変な方向に飛んで行く。

か、……完全に忘れてた。あたし、サッカーなんてしたことない
じゃん。

「ご、ごめんっ」

ボールの距離だけは届いたことは届いたんだけど、あきらか斜め
右の方向に大ジャンプ。

相良クンが慌ててとりに行ってくれて、あたしにパス。あたしは
気を取り直して相良クンにパーー。

——ぼふんっ。

……それは見事に宙に浮き上がって、真ん中あたりに落ちた。
は、初めてなんですよ、初めて。小学生のときはやったことない
しね、中学生のときも男子だけサッカー、女子はバレーだったし。
……はあ。

相良クンがボールをとりに行くついでにあたしのほうにやってき
た。

「李緒」

「はい……」

近づいてきた相良クンの表情はよく見えない。見ようによっては
怒ってるようにも取れる。

ま、まさか、怒られる？ ……そんなあ。

あたしは情けない顔で相良クンを見つめた。

「もしかして……」

相良クンは急に、柔らかい表情になる。

「もしかしてさ、李緒ってサッカーするのは初めて？」

「え？ そ、そうだけど？」

「そっか、やっぱり。見た目李緒は運動できそうだし。たまにあるんだよな、授業で野球とかやってサッカーやってない学校って。加えて今日はこの高校でも初めてだしな」

そういった途端相良クンは爽やかに微笑んで、教えてやるよ、と言ってきた。

「ええと、つま先で蹴りだすんじゃなくてこの足の甲、そう、その部分にボールを当てるんだよ」

その後手とり足とり教えてくれる相良クン。自然とあたしと彼の距離は近づいて……すいません、ちょっと近すぎじゃあないですかー!?!?

いや、まあ相良クンはあたしのことから男だと思ってるわけでおかしくは全くないんだけどさあ……。そんな近づかれたら心臓ドキドキバクバク手術物……。

……あれ? ドキドキしない。

あたしは自分が全く相良クンを意識してないことに気づいた。

「軸足は蹴りだす方向に垂直に――」

説明は十分くらい続いていた。相良クンの説明はとても分かりやすいもので、あたしは感心しっぱなし。パスのほかにもドリブルの仕方や軽いフェイントの仕方など色々な技術も教えてもらった。

「うん、李緒はやっぱ覚えがいいな。俺ちょっと離れるからさっき教えたようにパスしろよ」

「分かった、ありがと。……相良」

相良クンが小走りで向こうまで行ったのを見届けて、あたしは足を振り上げた。

(えっと……確かこうやって……)

「えいやっ」

小さく声を上げてボールを蹴り上げた。ボールは無事相良クンの足元に届いて難なくトラップされた。

(やったーっ!)

心の中でガッツポーズして、表面上でも相良クンにピースすると、

「ナイスパスっ！」

と、声と一緒に手を握って親指をあげてくれた。それがなんとも嬉しくてあたしは笑顔のままその後、ゲームまで相良クンと休みなくパスの練習をしていたのだった。

ひかり。

ヒカリいゝ。

「光ってばっ」

ばしっと軽く背中を叩かれる。

「え、な、何？ 千代ちゃん」

「次、打順だよ？ 早く行かなきゃ、センサー睨んでる、睨んでるっ」

「あ、あ、ごめんなさいっ」

はあ……。

李子が相良クンと仲良さそうにしてる。相良クンは女子にも受けが良くて、誰にでも優しいところが人気で、甘いマスクで……そんな相良クンが李子と一緒にいる。

……いいなあ。羨ましい。

ストライイク。

「光、光っ。振らなきゃあたらないよっ」

「あ、あ……」

ブンッ。ずてっ。ストライイク、三振、アウト。

我ながら見事に大ハズレ、そのままこけてしまった。私、運動は苦手なんだよね……李子とは大違い。得意だったら一緒に李子とソフト部に入れたのになあ……。

「ったあ……」

「大丈夫？ ひいちゃん？」

「うん、大丈夫……」

そのままキャッチャーをやってた子に私は手を引かれ立ち上がった

て、砂を払いながら後ろに下がった。

あたし、何やってるんだろ……、バカみたいだ。

「光い？」

「な、何？ 千代ちゃん」

ボーイッシュな髪形の、可愛いというより綺麗という言葉の似合う女の子が私を見つめる。私は考えてることを読まれてる気がしてすぐに目を逸らした。

彼女は岬千代子ちゃん。面倒見がいい私の友達で、クラスでも同じグループだ。

「あーた、まーた何か悩んでるんでしょ」

「わ、分かる？」

やっぱり読まれてたか。油断も隙もないね、千代ちゃん……。

「で、今度はなんなの？」

「……もちろん秘密です」

引きつった笑顔でそう私は返す。

言えるわけじゃないじゃない、そんなこと。李子にだって言えないんだから。

「李緒クンに相良クンいいわね、あの二人が二トップで、絵になるわぁ」

「えっ」

グラウンドを見つめると李子がボールを持って端っこから相良クンにパスしてる様子が見えた。

「今の反応で確信に変わったわ。校内でも特に人気ある二人だもんねー、ふふふう」

「どうして……？」

どうして分かったの？

心臓が早くなるのが分かった。

「分かるわよ。光ったらずっと彼ら見てるもの。で？ どっちが本命よ？ そういえば李緒クンとはもう仲いいよね？ それでもそんな悩んでるんだから相良クンか」

「ち、違うよ……そんなんじゃ」

「わーお、相良クン、ナイツシュー。……ま、彼なら任せときなさい」

「……だから違うのにい」

ボールは李子の足から直接ゴール前に飛んでいき、それを相良クンが頭で拾って上手くゴールに入る。その様子を周りの子たちも見ていたのか、黄色い歓声が私の耳に木霊していた。

「相良あ、ナイツシューっ！」

あたしは相良クン、ううん、相良に走りよってハイタッチ。ここ
で終了のホイッスルが鳴り響いた。あたし達のチームの大勝利！

正直サッカーがこんなに楽しい球技だと思わなくって、なんでも
やれば面白いものだ、としみじみあたしは実感させられる。あたし
が蹴ったボールを何度も相良が決めてくれて、自分で決めたんじや
ない癖になんともすがすがしくていい気分。聞いた話では相良はサ
ッカー部のエースらしくて、あたしの下手くそなパスも全部取っ
てくれてすっごく嬉しかった。ほんと相良さまさまだね。

「……………それじゃ、解散っ」

先生の号令のもと次々と生徒が帰っていく。けど先ほどあたしは
相良にちよつと話しが、って声をかけられていた。

「何？ 話って」

「あの、さ……」

相良の表情は真剣そのもの……もしかして愛の告白！？

……んなわけないか、この体だし。

「サッカー部に入らないか……？」

へ？

「お前の今日のプレー見てて思ったんだ。初めてであそこまで出来
るなんて才能あるよっ」

相良の手が、がしつとあたしの肩を捕えて視線を合わせられた。

「いや、あれは相良が上手かったからで……」

「俺だけじゃあんなに得点取れないんだ。視界が広いっていうのかな、欲しいと思うところにお前がパス回してくれるんだよ。パスもすごく正確だし……お前たしか帰宅部だったろう？」

あたしが今帰宅部だってことも驚きだけど、あたしは相良の熱心さに驚いていた。

涼しいイメージのあった相良だけど、こんな熱いやつだったんだ……。

……けど、やっぱり。

「……ごめん、サッカー部には入れない」

「そう、か」

「あた……俺、ソフトボール部に入りたいんだ」

そう、あたしは部活をやるなら中学生からやってたソフトがやりたい。サッカーも楽しかったけど、あたしの中じゃ小さいときからやってきたソフトの楽しさには比べ物にならないからだった。

けど、そう言った瞬間相良の表情が怪訝なものに変わる。

「ソフトは女子の部しかうちにはないぞ……？」

「え」

えー！？

「ってなわけなんだけど、どうしよう、光っ」

「どうしようって言われても……その後相良クンにはなんて言ったの……？」

今はもう下校時間。あたしは帰宅部の光と一緒に帰路についていて、昼間のことを報告中である。

「それがさあ、……考えとくって」

「そっか……でも李緒がサッカーかあ、……結構、いいかもね」

「……何言い出すのさ、いきなり」

どうしてあたしがサッカーしたら結構いいんだろう。

「だって、李緒がサッカーしてるの見てたけどすごくカッコよく

ってね。他の女の子だってみんな声援送ってたんだよー？」

「へ、へー……」

女になんかもてたくないって……変な趣味ないんだから、男にもてたい。やっぱ断ろうかなあ……いや、でもこの姿でそんなことが理由だって言ったらまんまボーイズラブなのか……。

「けど、私はやってほしくないけど……ね」
「え？」

そう言っただけで光はふいと目を逸らす。もうその話は終わり、という感じで光は話を切り出した。

「それより、これからお菓子屋さん行かない？」

「それって朝話してたやつ？」

「うんっ、聞いてたんだ？ どう？ どうっ？ 話によるとチョコレートクッキーがすごく美味しいらしいんだよねー」

「うん、もちろんっ。楽しみだねっ！」

それからあたしと光は学校であまり話せなかったぶん、お菓子屋さんに行っているいろいろなお菓子をつつきながら、談笑しあったのであった。その時にはあたしの中のもう悩み事なんて全部吹き飛んで、やっぱり女は心配事より甘い物だよねー、と光と一緒に笑いあったのは次の日の朝のこと。

(3) やっぱりセクハラ疑惑かな

唯一事情の知っている光を相談相手にしながら、少しでも男生活に慣れたあたしは、今日から朝早く起きてお弁当を作ってもつてきていた。

「うわっ……。おい、誰に作ってもらったんだそれ？」

突然変異が起って数日。もしかしたら寝たら直ってるかもしれない、なんて思っていたけれど現在全く変化なし。この数日で何となく、本当に何となくだけど自分の交友関係ってものが分かってきた気がする。最近クラス分けしたはずなのに、クラスの誰ともそれなりに仲がいい。でも光から聞いた情報では、女の子とはほとんど交友関係が皆無といってもいいタイプだったらしくてこっちのあたしは本当に男版あたしって感じだったようだ。それからお昼休みのお弁当グループで分かったけれど、特に仲がいいのが隣で焼き蕎麦パンに嚙り付いている相良。それと目の前に座って、おにぎり片手にあたしのお弁当箱を呆けたように覗き込む、茶髪で左右対称の前髪をした童顔の可愛い男の子みたいだった。

「……へ？ あた、いや、俺だけど？」

まだ俺、というのには慣れない。今までの習慣ですぐにあたしって言うてしまうのが難点だ。

「いや、それはねえーだろ……。これは」

「えっ、へ、変かな。本当に俺なんだけど……」

え、マジでお前なのとケンちゃんよもぎ けんいちが驚く。

ケンちゃんとはあたしが蓬健一よもぎ けんいちを呼ぶときの呼称。男になって初めて話したときに、これはちゃん付けしなくては、と思ってつけたあだ名だ。だって男の癖に背がちっちゃいし、女の子みたいな可愛いらしい顔してるから女装させたら似合いそうだし。それでいて今時のちよい悪を気取りたがっているけど、全然悪くなりきれてない所がまた可愛らしかった。

「変ッつうか……なあ？ 相良」

「んん。……ああ、何ていうか可愛いな」

相良は話しを振られ、急いでもごもごと口を動かしてパンを飲み込んだ後返事した。

「うん、けどお前が作ってンならキモイ」

「き、キモイ……」

ガンッとあたしはうな垂れる。

今まで女だったからこういう風に直接的に言われたことなかったけど、こんな正直な言葉が結構傷ついた。やっぱり女と男は思考回路が若干異なってるようだ、とあたしは思う。

「変かなあ……？」

もう一度そう呟いてお弁当を覗く。入ってるものは若鶏のから揚げとタコさんウインナと玉子焼き、それとキンピラ、ジャガイモのサラダ、デザートに林檎と蜜柑。最後にいっぱい敷き詰めたご飯にウサギさんとクマさんを海苔やピーマンとかでかたどったもの。久しぶりだったからちよつと張り切っただけで、別にフツーなんだけど……なあ。

まあ、確かにちよつと変かもな、と相良も言う。

価値観が違うつてやっぱり困る。けど、それに慣れないといけななんだよなあ、なんて思いだした近頃だった。

「李緒李緒っ。また微妙に内股で歩いているよ……！」

「へ？ マジ？」

今は移動教室。隣で一緒に歩いていた光がこっそり助言してくれる。この数日で少し慣れてきたけれど、やっぱり気が緩むと地が出ちゃうみたいだ。

「そういえば、さ……お風呂とかには慣れてきた？ その、あのう……」

そこまで言って顔を真っ赤にする光。いいねえ初心だねえ、可愛いよお、なんて感じるのはあたしが男になったからだろうか。いや、

これは前から思ってたか。

あたしはちよつと考えて、言葉を選びながら、

「んーと、お風呂は余裕ーっ、っていうかあんま変わらんというか」

「そういえば李緒もともと髪短かったし……胸もあんまり、だったもんね」

ぐさっ。

おまつ、人が気にしていたことを！

「どうせーまな板ですよーでももう関係ないもーんだ」

「あはは、冗談だよ」

あたしがぶーたれていると光が可笑しそうに笑った。

何ですか、その余裕の笑みは、あああれですか、何なのよー、自分だって胸……あるし。

じー、とあたしはそれを危険な目つきで見つめる。

「それ、頂戴」

「え？」

あたしは両手を広げて無言で手を近づけた。

「ちよ、ちよつと、李緒……？ 洒落になんないよ、それえーっ」

「うるさいっ。あた……いや、俺を深くふかーく傷つけた罰——いったあ！？」

ガツと後ろから頭を何か硬いもので叩かれる。何なに！？ 悪い頭がさらに悪くなったらどうしてくれ……！

「つて千代、おまつ何すんのさ！？」

「何ってあーたこんな公共の場で光にセクハラしといてよく言うわよ！」

叩いた本人は千代だった。岬千代子みさきちよこって言って姉御肌でいつもあたし達の面倒を見てくれたりしてた子だ。

その千代の手にはアルミ製の筆箱が握られている。あ、あれの角で殴ったのかこの子は……どうりで痛いわけだ。

「セクハラってこんなの普通——っだっ！？」

ぐり、と赤い顔をした光に足を思いつきり踏まれる。上履きが茶

色のサンダルだから守られていない部分を踏まれてさらに痛い。

そういえばそうだった……これはセクハラになるのか。

しかも千代の後ろには女子の軍団が据わった目つきであたしを見つめている。初めにいったかもしれないけど光はクラスの女子達からマスコットキャラ的に可愛がられてるのだ。

よーするに、ヤバイ。狩られるかも。

「い、いや、なあ、これは……スキンシップ？」

「変態！ ちょっと光、こんなセクハラ人間ほっというて先行こう！」

「あ、李緒……」

光は申し訳なさそうにあたしを呼ぶけれど、もう無理。しょぼんとあたし一人残されたわけでした。

さ、さびし……。

「おーおーどうしたア李緒、そんなしけた面して」

「ん？ ケンちゃん。あ、相良も……」

よう、と相良が手をあげる。彼らも移動教室の途中だったみたいだ。

「で、どーしたんだ？ 李緒って本条と一緒に先に行くって言ってなかったっけ」

いいねえ、と横でケンちゃんが冷やかした。

それがねえ……。

「人生って……大変だね」

「は？」

そう言うと、二人にすっごく怪訝な顔をされた。

「後ろにプリント回してってください」

修学旅行。二年生になって初めてある学校行事で、旅行先はなんと北海道！

乳牛、ジンギスカン、ポロトコタン！

……って普通か。むしろ外国に行く高校もあるみたいだからしょぼいほうかも。

微妙にテンションを上げたり下げたりしつつあたしは後ろの席にプリントを回す――あ。

「えーと千代？」

そういえば後ろは千代だった。

「……どうぞ」

「……」

ぷい。

無言でプリントを受け取ってそっぽを向かれた。

「あ、あのさーさっきのは誤解で」

やっぱまずいよね。例え男になっても、女だったころは千代とは特に親しかったから嫌われたくはない。

なんて言おう誤解で……誤解？ いや、誤解じゃないんだけど。

この際全部話してしまおうか。いや、でもな―あれからいちおう祐次やお母さんとかには話したけど信じてくれなかったし……。

ぐるぐるとあたしがそこで言い途惑っていると、先に口を開いたのは意外にも千代だった。

「先生」

「へ？」

「センセあーたのことさっきから呼んでるわよ」

――「平西李緒――！」

「うえっ!？」

教室中に響き渡るくらい大きな怒声。

ぐりん、と首を捻ると担任教師の怒りの形相が見えた。

「は、は、は、は……ごめんなさい」

散々だ……。

クスクスと回りの女子の抑えた笑い声とバカだな―、とはやしたてる男子達の声が聞こえる。

「んんっ、全員こちらを向いたところで」

そう言ってあたしをじろりと睨む担任教師。またここで失笑が入る。

「班決めを行う。男子三人、女子三人で六人。二十分くらいあったら充分だろ、それじゃあ自由に班を作っていつていきなさい」

ざわざわ、ざわざわ、と声が広がっていく。

三人か……それなら、とあたしは立ち上がると、

「李緒、組もうぜ」

やっぱり斜め右どなりに座るケンちゃんに誘われた。

うん、と即座に頷いてからケンちゃんと一緒に、前のほうの席でこちらを振り向き、軽く片手を上げている相良の所へ行くと、もちろんオッケー。

「女子誰と組む？」

「本条とかの班でいいんじゃない？ 李緒もそうしたそーだし。お前ら付き合っただろ？」

「へ……うん、そだね。って違うってば！ 友達なの！」

けど……光と一緒にグループってことは千代とも一緒にすることに……なんでだろう、あたしって男になってから分かったけど千代にすごい嫌われてる気がするんだよね。光に誘われる害虫みたいに……うう、害虫。害虫。せめて害虫は害虫でもバッタあたりがいいな。

「ね、ねえ」

そんな馬鹿なことを考えながらも、あたしは光達の集まっているところに組まないかって言いに行こうとしたら、

びくっ。

隣に立っていた千代に思いっきり睨まれてしまった。

「さ、相良は誰とがいい？ うん」

びくびくしながらあたしは相良に問う。相良はあたしに哀れみの視線を向けてから口を開きかけたとき、

「相良クーン、蓬クーン！ あたしらと組まない？」

突然さつき睨んでいた張本人に相良とケンちゃんが声をかけられた。そしてあたしには侮蔑っぽい視線。

……そこまで嫌いですか、あたしが。ふーん、そうですか。やっぱり悲しい。

あたしはとってもいじけた。

「ね……俺って千代になんかしたかなあ」

よよよ、と心中で滝のように涙を流し二人に問う。

「前まではそうでもなかったろ、むしろ友好的な感じだったしな。

李緒、何かした覚えはないか？」

……やっぱりセクハラ疑惑かな。

あたし達は先生の説明も終わって、六人で二つの机を囲んで座っていた。教室には人があたし達みたいに囲いを作っている。今はもう放課後。けど今日までにコースを決めて提出しなきゃなんないのだ。

「……ええと……それじゃあ私達はポロトコタン・グルメコースを選びます……いいかな……？」

そう、小さな声で腰まで長髪を伸ばした小柄な女の子が言った。

「うん、いいよ」

あたしはうんうんと頷いた。光や相良たちもいいよ、と答える。

彼女は樹美沙ちゃん。みいちゃんみいちゃんと周りから呼ばれている子で、あたしと同じで男とはかなり疎遠なタイプ。内気でしゃべったりするのもしどろもどろなんだけど、いつもこういう時仕切ってくれるのはこの子だった。それでみいちゃんの言葉に相槌うつのがいつもあたし。

「……それじゃあ、これで決めることは終わり……なんだけど……？」

「うん、オッケー！ やっぱみいちゃんがいると違うねー、話が早く決まる！」

「……え、へへ……そうかな……？」

「うん！」

そう答えるとみいちゃんは男と話している緊張からか顔を若干赤くしてはにかんだ。

「じゃな、また明日」

「じゃあなッ」

「それじゃ私も……」

部活のある三人がそれぞれ帰っていく。みいちゃんは手芸部、ケンちゃんは見掛けに似合わず空手部だ。

「それじゃ、帰ろっか？ 光」

あたしといえばあれからソフト以外の部活に入りたいとも思わず、未だ帰宅部。あたしは今日も光と一緒に帰る予定だった。

「千代、またあし」

た、と言う前に何か神妙な表情をしていた千代が口を開けた。

「李緒クンちよっという？ 二人っきりで話したいんだけどさ」

そう、千代に呼びだされるまでは。

光は図書室で待っていると行ってしまった。

千代もテニス部行かなくてもいいのかな、どうして二人っきりなんだろう、あ、でもこれでもしかしたら千代とまた普通に話せるかも、なんて思いつつあたしは千代の後についていく。千代は教室から少し歩いていきローカの途中で回りを一度見渡してから、ここならいいわね、と言って止まった。

そして千代の口から出た言葉は結構衝撃的なものだった。

「あのね、あんまり光に近づかないでほしいんだけど」

——え……？

(4) ああ、今日は絶好の買い物日和……!

目の前には可愛らしくおめかしした光。今日もあたしはすつごく体調良かった。生理とかこないしこの点ではビバ男。最近では一人称を上辺だけは俺にすることにも慣れてきた。

ここは有名某商店街。

そして、頭上には晴天の青空。

ああ、今日は絶好の買い物日和……!

……なんて思ってたんだけど。

「……俺はね、光と2人っきりだと思ってたんだけどね? どうして……」

どうして二人がいるのさっ!

光がどことなく戸惑いながら答えた。

「だ、だって緊張するから……初めに千代ちゃん誘ったの」

「はあ?」

緊張ってね、女のとくに何度も2人きりで外出くらいしたでしょうが。ショッピング然り、カラオケ然り、初詣然り。

それで、相良は? あたしの目にはすっかり千代子の隣で微笑んでる爽やか好青年の姿が見えるんですけど。

「相良クンわあ、私が誘ったの。女の子2人なんだから男も2人いなきゃダメでしょー?」

そこまで言って、千代は私の傍まで近づいてくる。そして、

「(ちよっと、前に言ったこともう忘れたの?)」

前言ったこと……ああ、あれね。

「(いや、でもあれは相良の前ではってことでしょー? いいじゃん二人っきりなら)」

「(そういう軟派な態度が迷惑だっていつてんのよー!)」

「何話してるの?」

小声で喋っていると光に怪訝な顔で問われた。千代はすまし顔、あ

たしは無理やり顔に笑みを作る。

「い、いやー、今日はいい天気だねって」

……いちおう光にも内緒らしいからね。

放課後、千代から言われたことはこうだった。初め光に近づくなんてのはさすがにびびったけど、それも全部光のためらしい。千代がいうには光は相良のことが好きで、あたしがいたら邪魔なわけで……まあそりゃ恋愛対象外でも男になっちゃったあたしが傍にいたら相良もあたしが彼氏だと思っちゃったりして、光も困っちゃうよね。あ、でもあたしにとって光はとってもとても大事な親友なわけで、そこだけは譲れないって言ったら、話すのはいいけど絶対変なことしない、変な気にならないでって言われた。

……んなこと言われてもあたし元女なんです。変な趣向はたぶらないんですが。女と喋っててもドキドキしないしなあ……最近では男と喋ってても全くだキドキなんて皆無なんだけど。まさか、男になったせいで人を愛せなくなった？ あたし。それじゃあ神社で買ったお守り、全然意味ないじゃん……あたしの少ないお小遣いを返せーっ！

あたしがちょっとブスとした顔で考え込んでいると、自分たちが来たせいであたしの機嫌が悪くなったと思ったんだろう、相良が苦笑した。

「まあまあ、俺らがいたら何か不具合があるってわけじゃないだろう？ 岬にその話しされたときデートじゃないからって聞いたよ」

だったらいいじゃないか、と相良。

んー……そだね。

「よく考えれば相良いたほうがいいか」

今日の買い物の目的は洋服を買うこと、だ。ざっとクローゼットの中を見たんだけど、もちろん女物の服はなくて（あっても用途に困るんだけど）、その代わりに入っていた男物の洋服も、驚くほどその数は少なかったから、今日は修学旅行にも持って行くだろうしってことで学校の近くの商店街まで買いに来たのだ。けど、よく考

えればあたしには男物の洋服なんて正直全く分からないし、光にとってもそれは同じことだろう。そう考えたら長年男やってきた相良がいたほうが何かと好都合だろうね。

そもそも……千代はともかく相良にはせっかく休日になんか出向いてくれたんだからあたしのほうが逆に感謝しなきゃなのかも。

「うんうん、そうと決まれば行きましょっ。で……あんた達今日はどこに行く予定だったの？」

元氣いっぱいに岬がそう言う。

「おまつ、行き先も知らずにいつてきたの！？ ……あいかかわらずだね」

最後の部分は小さく言ったのだけど、千代は持ち前の地獄耳で聞き取った。

「あいかわらずって私、李緒クンとどこか遊びにいったことあったっけ？」

「えーと……」

しまった、と思ったがもう遅い。何て答えようか悩んでいると、「私が千代ちゃんのこと話したことあったんだよ。この前こんなことあった、とかで」

「そうそう、そういうこと！」

光、ナイスフォロー！

あたしは視線で感謝を告げて、話を続けた。光が小さく苦笑する。「行き場所は最近出来たあの大型デパートなんだけど」

そう言って遠くに見える新装開店と書いた看板を掲げた大きな建物を指差した。すると相良が言う。

「洋服なら後で買ったほうが良くないか？ 荷物になるし」

「うん。だから先にお昼食べてから行こうかなって話しになったんだ」

時計台に視線を移す。もうすぐお昼だ。身体がぽかぽか温かくて気持ち良かった。

「そっか。じゃあみんなは何が食べたいの？ 私は何でもいいわっ。

甘いもの、苦いもの、辛いもの、どんと来い！」

微妙にテンションが高いのは気のせいかな。

千代は大食漢。好き嫌いのないことはいいいことだね。

「ん……俺は甘いものと辛いものはいけるけど苦いものはちょっとな」

私も、と相良に続いて光が言った。千代の視線があたしを捉える。
……ん？　じゃああたしが決めてもいいってこと？

「ええと、それじゃあ……」

今時の綺麗な飾りつけ。中には可愛らしいウェイトレスの格好をした女の子たち。店内は明るくいい雰囲気。

お洒落なカフェテリアの中には甘くて美味しそうな香りが全体を包んでいた。

「えっと、俺はこの宇治金時パフェと手作りパンってやつとコーヒー」

「私はー、抹茶ウエハースパフェとオレンジジュースお願い」

「私は…チョコクッキーパフェとオレンジジュース。李緒、一人でいける？」

「うん、いけるいける。じゃあ行ってくんね」

李子が代表してみんなの注文を集めてお金を受け取り、ウェイターさんに言いに行ってくれた。やっぱ千代ちゃん達が来てくれて良かったと思う。今のあたしじゃきつと彼を意識してしまうと思うから……。

「にしても、あいつがまさかこういう店行きたいって言うとは思わなかったな」

「うんうん、すごい意外！　甘い物なんて嫌いな男の子って多いのね。あ、もしかしたら私達（女の子）に合わせてくれたのかも？」

「んー、まああいつならやりそうなことだわな」

李子に好印象を持ったような千代ちゃんと相良クン。

けど二人ともそれは違うよ、絶対……。

注文所を見るとウェイターさんと笑顔で話しあっている李子の姿が見てとれた。今はお客さんも少ないみたいだし、たぶんパフェが出来るまでの暇つぶしに話しているんだろうと思う。李子は昔から女の子誰とでも仲良くなれる才能みたいなものがあるからなあ……。ぱっと見て口説いてるように見えるけど、それはありえなくて、きつとまたあの話しでもしてるんだろうな。そんな風に思っ、私は千代ちゃん達との雑談に戻った。

「それですね、このブルーベリーとイチゴの産地だとすっごい美味しいケーキが出来るんですよ。あ、この産地もおススメかもです」

「へえ、じゃあ今度ケーキ作るときにでも中入れて見ようかな。3層にして一番上にバナナクリームで、2番目にイチゴ、それで最後にブルーベリーっ」

「わあ、それ美味しそうです！ 上にラズベリーなんかも乗せて！ あっ、出来たみたいですよっ」

ありゃ、残念とあたしが名残惜しそうに言うと、トレイを2つ渡しながらまた次も絶対来てくださいねっ、と笑顔の可愛いウェイトレスさんが言ってくれた。

「うん、このパフェが美味しかったらね」

「絶対美味しいですからー」

くすくすと笑いながらウェイトレスさんが小さく手を振った。

お菓子作りはあたしの趣味。作っては家族と食べたり光の家に持ち込んでお裾分けしたり。祐次って男の癖にわりと甘い物好きなんだよねー。

あ、今頃気付いたけどこれって女の子っぽい趣味なんだよね。あたしにも女の子っぽいところがあったんだ、なんて思っ、あたし

はちよつと嬉しげに光達のところまでパフェののった盆を両手にバ
ランスを保ちながら戻った。

「よいしょっ……」

ゆっくり慎重に片方のお盆をテーブルに置いた。パフェはまず見
た目で味わう。だから形をくずしちやいけないのだ。

ありがとう、李緒、と光の優しげな声が聞こえた。

それからもう一方のお盆を自分の席のところに置いて、席につく
とあたしはフォークを掴む。

「さて、いったきまーっ」

「ちよつと待て李緒」

「え」

相良が静止の合図をだした。あたしはあえなくフルーツの刺さっ
たフォークを止める。

「李緒クンそのでっかいの……何？」

呆けたような千代の声。

何だよう、せっかくの至福のときをつ。

「何って……」

ちらっと手元にあるパフェを見る。

「ジャンボロイヤルマキシマムビッグ季節フルーツ盛りだくさんパ
フェだけど」

その名の通り季節別にいろんなフルーツをたんまり詰め込んだパ
フェだ。

……何の変哲もないすっごい美味しそうなパフェだけど。

「あ、食べたいの？ ゴメン気付かなくてさあ。はい、あーん」

「違っっ」

「違っわよっ」

う、ほとんどハモって否定された。一体何なんだよう。

「そのデカさ……」

「普通のパフェの5倍はありそうじゃない？」

うん、とっても食べがいがありそう。

それに千代は間違ってる。実際には5倍じゃなく6倍はあるね、これは。だからこのパフェ屋さんは雑誌に乗るほど有名なんだよねー。

「この前雑誌でお菓子の有名なところ見てたらちようどこころへんにあってさ。食べてみたいな、って思ってた」

「……あたし、李緒クンのイメージ変わったわ」

俺も、とげんなりした顔で呟く相良。

「え、え？」

光があたしを苦笑いしながら見つめていた。

「それでさあ、これ食ったら何すんだ？ これ食ってもまだ時間しばらく余るだろうし」

しゃくしゃくと中のコーンをかき混ぜている相良が言った。

「そういえばまだ決めてなかったね、それ」

あたしはバニラアイスの上についているパイナップルの断片をひよいと口に入れた。

「それじゃ映画でも見てみる？ 定番に」

「カラオケでもいいーかもね。この人数だし」

そう順に光と千代が言った。

あたしはチョコレートバナラの山にスプーンを入れようとしてふと気付く。

あれ？

……あー、もうしょーがないなー。

「千代。ホッペにクリームついてるよ？」

千代のホッペには茶色の混じった白いバニラアイスの欠片がついていた。

「え、本当？」

「うん、ほら」

あたしは、まったく昔から食べ方荒っぽいんだからー、と心中で呟

きながらいつものように頬からクリームを取ってあげた。

「あ、ありがとう」
ぱくり。

「ん、おいし」
んまーい。

あたしの口に抹茶のいい香りとバニラの甘い味がマッチしたものが広がる。

今度来た時はこれも頼もうかなあ。あ、それとも店員さんオススメのデラックスプリンパフェ？

んゝ……やっぱり後悔しないようにどっちも食べようっと。

「……っ」

味を堪能してからふと顔をあげると、光の呆れたような顔と相良の驚いたような顔。そして何故か顔をすっごく赤くした千代の綺麗なお顔。

……何？

「おい、李緒……それはさすがに」

「……バカ」

光が小さくため息をつく。

「へ……どうかしたの？ あ、俺映画がーと思う。見たいやつもあるし」

たぶんあたしの意見でも聞きたいのかな、なんて思ってあたしはそう答えた。

確かあたしの大好きな俳優が出てるんだよねー。

「あー！ もうそれでいいわよ！！」

すると突然大声で千代にそう言われた。ぼとりとフォークに付いていた白桃がバニラの上に落ちる。

「ど、どうしたの。そんな急に大声だして……」

回りの人たち見てるよー。ただでさえお前とか相良とか光いるから目立つのに。

しよぼーん、何かあたし場違いじゃない？

「ししし、知らないっ！」

そう言ってそっぽを向いてしまう千代。

何故……あたし、何かしたっけ？

(5) 恋人つなぎ

千代の態度がさっきからおかしい。余所余所しいというか、あたしを見たら視線を逸らすとか。あたしなんかまた癪に障ることまたしたっけな……いや、でもあたし相良いるから必要以上に光と喋ってないはずだけど？ ついさっきもさり気なく2人が話せるような雰囲気作りもしてたし。もう、何がなんだか分からない。

ここはこの辺りで一番大きな映画館。中は薄暗くて、待ち受けのところには人だかりが出来ている。目の前のでっかい薄型テレビでは今巷で有名な恋愛ドラマチック映画の宣伝が放映されていた。

ああ、ポップコーンのいい香り！

そして現在、あたしはバター味にするか、塩味にするか迷っている。

「しおーばたーしおーばたー……」

「李緒、今度は何迷ってるの？」

あたしがむうっと悩んでいると、隣で今やっている映画の時刻表を見ていた光が問いかけてきた。

「いやあ、ポップコーンどっちがいいかなあって思ってさ。光はどっちがいいと思う？」

「あははー……私そんな食べれないからなあ……」
光が苦笑する。

「千代は？」

「え……私？ あーうん、そーね」

や、返事になってないし。

千代は未だ上の空。

……ま、いっかポップコーンは。前来たときはバターだったし今回は塩にしよう。

「で、李緒の見たいやつってどれなんだ？」

「えー？ えっと名前なんだっけなあ……」

あたし、その俳優が好きなだけで映画じたいに興味はなかったからなあ。

ずらっと並ぶ今日やっている映画のあらすじを見ると、主演の所によく知る俳優の名前を見つけた。

あ、これって。

「フランス人形の血沼。……ホラーみたいだね」

「えええっ……」

あたしが言った瞬間酷く怖がった声が光の口から漏れた。

「あー、やっぱいいや俺。別に他ので。これなんかいーんじゃないかな？」

そういつて正面の薄型テレビで宣伝している映画を指差した。ちようど有名女優が有名俳優に抱きしめられ、愛を囁かれている。

あたし、こっちもわりと見たかったしね。

「あ、それなら俺もみたいと思ってたんだよな」

「私もそっちのほうが……」

うんうんと2人が頷き、ラブロマンスに決まろうとする中。

「いいえ。これにしましょ！」

突然千代はそう言ってフランス人形の血沼を指した。

「へ？　でも光怖いのが苦手だし……」

小学校の時の修学旅行の夜、先生が怪談話をしたせいで光が怖がってあたしの布団の中に入ってきた思い出がある。ふるふる小鹿みたいに震えながらあたしのことぎゅうって抱きしめてきたんだよね。光が自分からあたしを抱きしめてきたのは後にも先にもその時だけだった。

ま、あれはあれで新鮮で可愛かったけどさー。

「わ、私あんなの見れないよ……」

やっぱり昔と一緒に怖がりな直っていないみたいだ。

「ダメ！　あれにするの！」

いつになく千代は強情に話を進めようとする。

「お、おい、岬。んな強引に……」

「相良クン、嫌なの？ 相良クンはホラーよりラブロマンスのほうがいいなの？」

「あ、ああ……」

そう言われて頷く相良。

「千代ちよっ」

「李緒クンはホラーのほうがいいのよねー？」

あたしが千代の暴走を止めようと口を出そうとしたら、ふいに視線があったと思うとにやりと微笑まれた。

そこではたと千代の言いたいことに気付く。

光は相良クンのことが好きなのよ、か…。

「それじゃあ決定っ！ あたし与李緒クンはホラー、光と相良クンはラブロマンスねっ」

「んなっ……4人で来たんだからみんなで同じの見ようぜ？」

千代の強引な態度に驚きつつ相良は千代を宥めようとした、が。

「あたしは断然ホラー。っていうかホラー以外やだ。と、いうわけっ、みんなで見るとならホラーにしなきゃなんないわね」

どんな理屈だ。

「ええっ、それは……」

よっぽど嫌なのだろう、すごく不安そうな声。薄暗いからよく見えないがきつと光は泣きそうな顔をしていると思えた。

二人つきりだと抱きしめて慰めてたかもしれない。

「そ、れ、と、も、相良クンはそんな嫌がる光を怖がらせたいのかしら？」

「いや、それはないけど……さ」

最終的にかなり苦い表情で相良は分かったと言った。

何ていうか……光、相良ごめんね？

あたしは千代に代わって二人に心の中でだけ謝罪した。

そんなこんなで今は劇場内。あれからすっかり普通の態度に戻った千代と待ち時間の間談笑していた。

「祐次がさ、それ俺の分のプリンだ！　なんて叫んじゃってさ。もうそこから大喧嘩。お母さんに止められるまでずっとね。もう二人とも高校生なのに大人げないったらありやしないよ」

あたしは数週間前にあった出来事を話す。

「あはは、いいわね、そーいうの。うち姉妹とかいないからなあ。弟とか欲しいわ」

「あげよーか？　うちの」

「どうやってもらうのよそんなのー」

顔を綻ばせて屈託なく千代が笑った。

「んー……養子？　あ、結婚とか」

「――ビィー」。

そこまで言ったところで放映の音が鳴った。

「お、始まった始まった。このねー、主演俳優がサイコーなんだよ」

「……」

返事が返ってこない。

千代はじいっと目がオープニングの映像を見つめ続けていた。

なかなか面白そうな感じだ。これならB級映画とかじゃないだろうね。

「にしても考えたね。俺らと光たち分けるなんてさ」

「……」

「暗い場所で二人っきりだと盛り上がっちゃうものだよねー」

空中にフランス人形が1つ浮かんでいる。

「……」

フランス人形が画面全体にぎっしり。主人公の背後に浮かぶと呪いの言葉を吐いた。

「……どったの？　急に黙っちゃって。……千代さーん？」

ぽん、と軽く背中を叩くと、

「ひうつ」

「……は？」

「どどどど、どうしたのかしらあ？」

何だろうこれじゃあもしかして。

「おまっもしかして……ホラー系にが」

「ち、違うわよ？ そんなこと全く、全然ありゃーしませんことよ？」

千代の声は狙ってるのか、と思うほど震えに震えあがっている。

「……」

みえみえだっつーのに。

そこまでして……そんなにあの二人くっつけさせたいのか？

千代の手をふるふると震えていて、それを押さえるためかぎゅつと服を掴んでいた。

「ほら」

あたしは手をだして千代の手を握る。こんな座ったままの体勢なので恋人つなぎ。じかに千代の柔らかな手のぬくもりが伝わってきた。

ああー女の子の手だ。前まであたしもこんな感じに柔らかかったんだよねー。

ちよつと感慨深くなって千代の女の子を味わってしまう。

「え？」

「握っててもいいから。服、くしゃくしゃになっちゃってもしらないよ？ それにこーしてたら楽でしょ」

見るともう結構くしゃくしゃみたいだったけど。

「あ、ありがと……ひゃっ」

人が一人血液だけでできた沼に飲み込まれた所で、ぎゅうつと強くあたしの手が絞まった。

普段強気だけど……たまにはこんなしおらしい千代もいーかもね。

じいっと私は目の前に映る映像を見つめている。隣に座っていた相良クンは、ついさっきトイレとジュースを買ってくると私に小声で告げて、行ってしまった。

愛してる、と定番の台詞を主人公が言う。

内容は数年前に別れた恋人同士が、後々であってまた惹かれあうというお話し。いいお話だけど、ちょっと味気ない。

「はい、ジュース」

「え？ うんありがと」

いつの間にか帰って来ていたらしい。相良クンの手から飲み物が渡された。

こくりと渡された紙コップからジュースを飲み込む。レモンスカッシュの酸味が口いっぱいに広がった。

今頃李子達、どうしてるのかなあ？

どうしてあんなに千代ちゃんはホラー映画を見たがったのだろうか。もしかして李子と二人っきりになりたかったとか。いや、まさか。けれど、前放課後の帰りのときも……いや——まさか。

主人公の元恋人役の男性が俺には妻子がいるんだ、と主人公に打ち明けた。

最後の最後で主人公がフランス人形に殺され、少し後日談があり映画は終わった。そろそろと人が出口から出て行く。あたしと千代もその人の波に流れていった。

「おお面白かったわね」

「……そーだね」

いい加減認めればいいのに……。

ちなみに、まだ千代は恐怖に震えている。

「グッズ、買う？」

「いらない！」

意地悪くグッズ売りコーナーを指差したけど、断固として拒否された。

ちえー、とあたしはわざと拗ねたようにいうと、腰が立たなくなったのかふらふらとした足つきの千代を引っ張りながら光たちの待

つであろう場所へ向かった。

あたし達がホールにつくと、もうすでに光と相良は赤い長イスに座って何か話していた。

「ただいまー」

ここであたいまって発言ちよっとおかしくないか、なんて思いつあたしはそう言う。

「おかえり、二人とも」

にこっと光は笑う。

けど、突然その笑みが驚いたような顔に変わった。そして相良も同じような顔をして、

「お前ら仲良く手なんかつないでどーしたんだ？」

そう訝しげな声をだした。

「こ、これはっ！」

そう叫んで千代が顔を上気させてあたしの手を払った。

「いや、これはさー……いたっ」

ぎゅうっと腕を抓られる。そして睨まれた。

ったいなー……あたしに本気で恨みがあるんだろーか、この子は。それと、どうしてか光の顔が無表情なのが気になった。映画、つまらなかったのかな？

「今日はありがとー」

「じゃ、また明日ガッコで」

「ばいばーいっ」

「またね！」

あれから買い物を買ったあたしたちは、待ち合わせた場所に分かれた。もう夕方だ。薄暗くなった路地をあたしと光は二人歩いていた。

相良と千代が見えなくなったあたりであたしは何か話そうと口を開こうとすると、光が何か物欲しそうにあたしを見つめている。

……何？

「ねえ、李子」

「……？」

珍しい。

最近二人っきりのときも李緒だったのに、久しぶりに李子って呼ばれた気がする。

何だろう、と小首を傾げると、手に手が触れた。

「手、つなご」

そう言って光はぎゅうっとあたしの手を握った。

「いいよー？」

どうしたんだろう？

光は笑っていたけれど、その澄んだ瞳からは何も読み取ることは出来ない。

あたし達は結局、そのまま手をつないだまま家まで帰った。

(6) パンケーキは軽い

太陽がさんさんと降り注いでいる。日光がまんべんなく部屋中に降り注ぎ、もう春真っ盛りという感じ。

こんな天気の良い日は好きだ。たいした理由は特にないけれど、兎に角良い。ぽかぽかしてて、気持ちよくて、今すぐに外に出て日光浴してみたい気分。けど、女と違って男の姿じゃ日光は浴びすぎると少し身体に毒みたい。けどけど、陰鬱な雨の日と違ってやっぱり気分も明るくなるものだ。心が晴れるってやつだろう。ああ、本当に今日はいいい日になりそう……うん、なったらいいな。

……どうしてガサツでお馬鹿なあたしがこんなのにのんびり視線を宙に扇がせて黄昏ているか、というと、それは――。

――ばふっ。

「あっつーッ!!?」

「り、李緒ッ!!」

「李緒クン、大丈夫!？」

目の前に巨大未確認生命体出現、じゃない。こんな状況でぼけてどうする、あたし。

……ふかふかもっふりパンケーキが顔面に激突したからです。

――――――

「だから、どうして生地焦がすのさっ」

あたしはケンちゃんこと蓬健一に軽く叱責する。甘くていい香りの中に香ばしいとは言い難いパンの焦げた匂いが広がっていた。

あたし達の目の前の机には色んな器材が置いてある。計量器、スプーン、ヘラ、その他もろもろ。この部屋には同じような光景がいくつも広がっていた。置くには食器の入った棚がいくつもある――そう、ここは家庭科室。

「しょうがないだろッ。お前と違ってこっちは初めてなんだからさ

！」

「でもついさっきそのオーブンの使い方間違ってるっていったばっかじゃん！」

そう、ついさっき間違いを正したばかりなのだ。わざわざ設定まですした。それを変えたのは目の前でとぼけた顔をしている茶髪で中世的な顔をした少年。

「えーと不器用ですか？」

「んなお決まりの台詞吐いてないで早くこの残骸の処理しなさいっ！」

この残骸、もとい真っ黒の物体を指差して叫んだ。隣でホイップクリームをかき混ぜていた相良は目にかかった髪をかき上げてうっとうしそうに言う。

「お前らなあ……うるさいぞ。もう少し周りの迷惑ってもんを考えろ、と言い終わらないうちにあたしとケンちゃんは叫んだ。」

「だってケンちゃんが！」

「李緒が！」

「あー、お前ら」

相良は急に呆れ顔をゾクリとするような笑顔に変えて、

「ちよっと黙れ」

はい、とあたしとケンちゃんの声がハモった。こんな時、あたし達はとっても気が合うみたいだ。

むうっとあたしは唸りながら別のテーブルを見に行っていた。

結局焦げたパンケーキもどきを処理して、オーブンの中の煤を払って新しく作り直した。今度はちゃんとケンちゃんに触らせないように注意しといたから大丈夫だろう、……たぶん。

あれはケンちゃんが悪い。いやでも、……元女としてはおおらかにたしなめるだけにするべきか。

どうすれば良かっただろう、と葛藤していると、ふいにクラス女の子から声をかけられた。

「平西クン、平西クーン。これ、どーするの？　上手く膨らまないんだけど」

「ああ、それはね」

もう男になってから1ヶ月半くらいたつ。このころにはほとんど女子の誰とでも滞りなく喋れるようになっていた。さすがに相手は男女のしこりがあるようで、前と同じようには、って訳ではないみたいだけれど。男になった影響か、男子とはもちろん話せるし……クラス皆友達。一つの大きな夢が達成できるかもしれない。

「ん？　ていうか髪切ったんだ？　可愛いー」

やり方を問われたグループの1人である女の子の髪型が前はロングだったのに、ちょっとだけセミロングに変わっている。やだーと照れたようにばしばしと背中を叩かれた。ちょっち痛い。

「李緒クンのたらし」

「たら……っ」

そんな風にあたしが女の子の輪に入って話していると、背後から聞き捨てならない言葉が吐かれて、後ろを振り向くと岬千代子が腕を前に組んで立っていた。

「おまつ、誰がたらしだ。誰が」

「あーたに決まってるでしょ。ほんの1ヶ月くらい前までほとんど女の子としゃべったこともなかった癖して。どういう心境の変化よ」

え、そーなの、と去年別のクラスだった子達が驚く。そんな彼女たちはあたしのことを顔と名前くらいしか知らなかった、らしい。あたしは知ってたし話したこともあったけどね……軽い喪失感かも。まあまた友人関係になれた今となっては全然気にしていないけれど。

「あー、それ思う思う。……誰かで慣れた、としか思えないよね」

言ったその子はキラんと目を光らせて、その場にいる一人のボーイッシュな髪型の綺麗な少女を見据えた――千代だ。

「ちっよちゃーん。そういえばこのクラスで平西クンと初めに仲良くなったのってあんたよねえ？　あんた達まさか……？」

「なっ、ち、違うわよ!」

強く両手を横に振って誤解を訂正する千代。

「苗字じゃなくって名前で呼んでるし」

ねー、とそう言ったピンクメガネの少女は隣にいた子と声を合わす。

千代、ちよっぴり顔赤いよ。……なんかあたふたしててすごい可愛いけど。

「ねえねえ、李緒クン。この子とどこまでいったのー? A? B? それとも…」

そんな千代を見て悦んでいたあたしはやりと口を曲げて、

「えー、それはねー。人によってA B Cの基準違うからちよっと分かんないな」

適当に答えてやると、きゃー、と周りの女子達がざわめきだす。

思い通り千代の顔が耳まで真っ赤になった。

……ほんと、初心だねえ。あたしなんかでそんな反応してくれるとは。

「ばっ。んなこと私が李緒クンとするわけないでしょ!」

そういえば、千代の恋話って聞いたことないなあ、なんてことにふと気付く。けど、これ以上からかうのは可哀想だから今聞くのは止めておこう。面白いけど、あとが怖い。

……てか今でもちよい怖い。こら、睨むな睨むな。

「あはは、冗談冗談。それに初めっから話してたっていうとまず光でしょ」

——「え、私が何?」

少し遠くのテーブルから、みいちゃん、もとい樹美沙と一緒に、出来たパンケーキの表面にホイップクリームを熱心に塗っていた光が、自分の名前に反応してこちらに顔を向け、声を上げた。

「あ、ううん、なんでもないない」

あたしが手をふって言うのと、そう? と光は一瞬頭の上に疑問符を浮かべてからまた作業に戻った。

話しに入ってきてもらってもいいけど作業をやりながらっていうのは彼女にとっては不可能だろう。光ってお料理とか不器用なんだよね、実は。ま、そこも新妻っぽくてかわいいーんだけど。ん？ 新妻？

「あー……じゃあ千代子はないか。ひいちゃんかな、本命は」
周りがほうっと息を吐く。クラスでも学年でも学校でも、とびきり可愛い光だから、きっと釣り合わない、とても思われたのだろうか。

「んー、いや、それは絶対ないない」
だからきっちり否定しておく。それに、光は相良が好きなようなのだ。ここで冗談でも肯定してしまったら相良の耳に歪曲して届きかねない。だから、きっちり否定しておかないと。

「えー？ でも2人とも仲いいでしょー？」

「そりゃー幼馴染だし？」

まさに当然、とでもいうようにあたしが答える。

「あ、そういうえば物覚えつくかつかないかの頃からなんだよね。じやあ兄妹みたいなもの？」

何を思ったのか、今度は興味深そうに千代が聞いてくる。だから正直に。

「大しんゆーだよ。あの子とは」

やっぱりその単語がしっくりくる。姉妹というほどプライベートには干渉していないし、けどそれでいて一番心を許せるから。

そういうと千代は怪訝な表情をして、

「男と女で……親友ってなれるものなの？」

「……え？」

そりゃあなれる……？ そう言おうとして、詰まった。1つ疑問に思ってしまう。

あたしは今男で、光は女。

大親友。あたしは今でもそう思っているけれど、彼女もそう思っているくらいだろうか。

考えて、ちくり、と胸が痛む。何か答えようとして顔を上げると、――「李緒、李緒――ッ。出来たぞー！」

突然の大声でそんな僅かな不安は一瞬で吹き飛ばされることになった。先ほどのトラブルメーカーが小さなお盆にパンケーキを乗せて走りよって来る。

……なんか、犬みたいで可愛い。わんわん。

「おー、いい感じー？」

盆に乗せたパンケーキが揺れる揺れる揺れる。落ちないかな、なんてちよつと心配に思っていると、気付いた。

「……へ？　ちょ、おま、まっつ」

今思うとそれがまずかったのだと思う。

「え？」

どうした、という感じで立ち止まるケンちゃん。

そう、パンケーキは軽いのだ。急スピードの状態で止まると、慣性の法則が働いて盆からパンケーキが宙を飛ぶほどに。そう、飛ぶ。飛ぶ。飛ぶ。

あ、飛んだ。

「あ」

ふわふわふわふわ。

避けれる。何とか避けれるけど後ろにはたしか……。

あたしは一度後ろを見て、前を向きなおす。

そしてケンちゃんの驚いたようなお顔。

ドジッ娘。いや、この場合はなんて言うんだろう。ドジ、ドジド

ジ……け、ケンちゃんのバカーッ！！

……で、初めにモドル。

――ばふっ。

「あっつーっ！！？」

「り、李緒ッ！！」

「李緒クン、大丈夫！？」

初めは、ぼん、って当たって落ちるだけだと思ってた。けど、ま

だほんのり、いや結構ペースト状。

……ケンちゃん、タイマー止まる前にオープンからだしたな。べちゃり、と熱いものが顔にかかる。

「つつつつつつ！！！！？」

熱い、熱い熱いー！？

あたしの身体は間抜けにもよろめいて、よろめいて……。

ーがんっ。

あたしは後頭部からテーブルの端へぶつかった。

「李子っ！！」

光の駆け寄る声が聞こえる。

あたしの意識は暗雲の向こうへと引きずりこまれていった。

け、ケンちゃんの……バ、カあ……。

困ったー。

今は終わりのSHRの真っ最中。担任のセンセが修学旅行はもう3日後なんだから用意は早めにしとくように、と告げている。今日は欠席者もいなく、この教室中の席は全て埋まっている、はずなのだったのだけれど、あたしの前の席だけがぼっかりと空いていた。

私ははあ、と1つため息をつくとき先ほど、つい一時間ほど前に起った事故について考えている。

ーホント、困った。

まあ……李緒クンが結果的に気絶したのはこの際気にしないことにする。いや、全然気にしていないわけではないんだけど、彼、あの後すぐに寝息たて始めたし。保険のセンセもタンコブ出来てるから病院行くほどでもないって言ってたし。火傷もそんなに、らしいし。だから、たぶん大丈夫だろうってことで気にしない。

問題は、2つ。

1つ目は……。

私は教壇から2つ後ろの席へと目をやる。席主はぼうつと上の空。

1つ目は光が相良クンではなく李緒クンのことが好きなのかもしれないってこと。李緒クンが頭をぶつけたとき、あの焦り方は尋常じゃなかった気がする。倒れた李緒クンに寄り添って何度も何度もリコ、リコ、って。

……ちよつと待って、リコって誰よ？ 聞き覚えのあるような、ないような。けど、周りの子はそのことに關しては全く話題に出さなかったし、きっと私の聞き間違いなんだろうな。

まあ、とにかく光がどちらを好きなのかは保留しておいたほうがいいのだと思う。そう、しておいたほうがいいのだ。実はというと私は李緒クンのことがちよつと氣になる。けど決して好きなのではない、たぶん。たんにカッコいいなってくらいだ、……たぶん。だって昔から、私が彼を初めてみた中学校の入学式のときから彼の傍にはいつも光がいたんだから。光は可愛い。女の私から見ても本当に可愛い子だと思う。女としての機能だけなら勝てるはずもない、なんて思ってしまうほどだ。

……じゃあ光がいなかったら？ そして、光が相良クンが好きなら、彼はフリー？

「……っ」

……な、なに考えてんのよあたしは。おかしい、絶対おかしい。うん、これは氣のせい、氣の迷いよ、と首を振ったところで室長が席を立つように号令を言った。

——ガタッ、ガララッ。

光が私たちに一言の別れも告げずに、教室を足早に出て行く。これは、とても珍しいことだ。

「やっ！！」

今はテニス部で乱打のメニューをこなしている。私は力を込めて相手のコートに打たれてきたボールを強く打ち返す。

——ガシャンッ。

が、ボールはラインより大きく奥に落ちて、ネットに大きな音を

立ててぶつかった。ごめん、と手だけで相手の子に謝ると、後ろで順番待ちしていた子にコートを譲る。

はぁ、とため息。すると突然背後から肩を軽く叩かれた。

「きゃっ」

「わっ、何て声出すのよ、あんた……」

驚いた顔をする体育会系の背の高い少女を睨みつけると、逆に目をのぞきこまれて、怯む。

「荒れてんね、千代」

「……もうっ、分かっているわよ。そんなこと」

そう。分かっている、分かっているのよ、そんなこと。

もう1つの問題。……彼がパンケーキにぶつかる直前に私のほうを振り向いたことくらい。彼の運動神経ならきつと避けることが出来たんだろう、ということくらい。少し反応の遅れていたあたしをかばったのだろう、ってことくらい。

……そして、そのお礼をまだ言っていなかったことくらい。

「……そっか。そうよ、そうなのよ!」

「は?」

「ごめん、それからありがと。私、ちょっとお腹痛くなったから保健室いってくるねっ」

私がそう言っていると、彼女はすごく不思議そうな顔をして、

「うん……? 分かった。じゃ、キャップに伝えとく」

「うん、お願い!」

そのままの微妙な表情で立ちつくす彼女を残して、私は足早にテニス場を立ち去った。

そうよ、お礼が言いたかったのよ、私は!

今のこの彼に対するおかしい思いは、きっとこれが原因だと信じながら。

ガラリと無機質な音をたてて保健室に繋がるドアを開けると、保健室特有の消毒液の強い香りが鼻腔を刺激させた。真っ白なカーテ

ンは少しだけ開かれていて、近づいてみると、

「あれ……？ 岬じゃん」

どうやら先客がいたようだ。その声はちょっと高く、可愛らしい顔つき。李緒くんといつも一緒にいて、今回の事故の立役者。

「蓬クン、来てたんだ。お見舞い？」

そう言って私が歩き進んでいくと、ベッドで寝付く少年の姿が見てとれた。

「い、いやな。ちょっと怪我しちゃってさ。……ほらっ！」

蓬クンは私に見えるように腕に出来た本当に小さな引っ掻き傷を見せる。

「そのついでにコイツでも見に来てやろー……なんて。アハハ」

……素直じゃないなあ。

笑っているが声は乾いているし、既にその顔は引きつっている。

きつと、罪悪感と心配で堪えられなくもなったんだろう。現にもうさっき見た引っ掻き傷はもう血の塊が出来ていた。

「み、岬は？」

「……私もそんな感じ」

あたしも、素直じゃない。

無然とした態度で答えたけど、もしかしたら、いやきつと気付かれただろう。

そこでちょっとした沈黙がはしって、少々気まづくなったのか彼は言った。

「俺さ、もう戻るな。部活の途中で抜け出してきたからさ、先輩に何言われるかわかんねえ」

私はうん、と答えると彼を見送る。そこで、あれ？ と思う。

「ね、光は？」

「光？ ……ああ、本条のことか。わかんね。もう帰ったんじゃないか？ 見てないぜ」

……そっか、もう帰っちゃったのか、光。

「そう……。ありがとう」

私が少し微笑んでお礼を言うと、蓬クンはそれじゃッ、と片手をあげて保健室を出て行った。パタンと小さな音をたてて保健室のドアが閉まる。しん、と静寂が訪れた。

あたしはベッドに横たわる李緒クンの寝顔を覗いた。

……きれいな顔。周りの子たちがきゃーきゃーいうのも分かる気がする。

少し茶色がかったきめ細かい頭髮。染み一つない肌。大きく切れ長の目元と長い睫。ほどよく高い鼻。そして、キスすれば気持ちよさそうなふっくらとした唇。

キス……。キスって気持ちいいのかな。

興味はあるけれど経験はない。そもそも元来のおせっかいな性格のせいか、他人の色恋沙汰には何度も関係しているが自分の恋愛事には全くと言っていいほど疎かった。今までに告白された経験は数度かだがある。けど、心の深層部分が強く邪魔をしてとても付き合おうなどと思えなくて、全部断ってきたのだ。そういえば寂しい青春送ってきたんだなー、なんて今更ながら思ってしまう。人並みに恋愛したいとは思っているが男性として意識し、尚且つ気に入る相手が皆無に等しかったのだ。

でも、今日の前で無防備にも寝顔をさらしていらっしやるのは皆無に等しいといった、ただ一人の例外。ちょっとだけ気になっている人。うん、ちょっとだけ。

じいっと李緒クンを見ていると、なんだか顔が火照るのが分かった。

……何、まじまじと男の子の顔なんて見ているんだ私は。

「ん……」

私の体がビクリと震える。李緒クンが寝返りをうったのだ。そして、何やら布団の中でもぞもぞと動く。起きたのかな、と思って顔を覗きこんだけれど、それは杞憂で、幸せそうな顔で寝息をたてていた。

私はくすりと笑って立ち上がり、少しずれた掛け布団を直してあ

げようと前かがみになる。

……なんだか、子供みたい。

手のかかる子供。私は人一倍おせっかいだ。それに比例して母性本能も人一倍高いと思っっている。だから、こういう無防備であどけない姿をさらけだされると、すぐどこきどきして、愛しく思ってしまうのだろう。そう、この心臓の鼓動は母性本能からくるものだ。きっと、そうに違いはない。

そんなことを考えていると、突然李緒クンの顔が歪んだと思うと彼の手が伸びてきて左腕を掴み、引っ張った。

「きゃっ、ちょ、ちよつと……！」

引っ張られて、私が李緒クンを傍目押し倒しているような構図が出来上がる。私は顔を真っ赤に染めあげて、どきまぎしながらも急いで立ち上がろうと試みた。けど、

「……か……ないで」

「……え？」

寝言だろうか。李緒クンの口からそんな言葉が出てきた。と、言ってもよく聞き取れなかったのだけど。でも、なんだか行かないでって言っている気がして、私の体はそのまま固まる。すると、彼の悲しみに歪んだ表情がぱっと初めの幸せそうな表情へとかわった。私は、なんだか嬉しくなって微笑んで李緒クンの髪をなでる。もっと、もっと、幸せそうな表情へと変化した気がした。

そして、また、愛しくなる。

思わず、求愛行動を実行したくなるほどに。

……キス、したい、かも。

どうしてこんなことを思ったのかは分からない。ただ、欲求がそれを訴えてきたのだ。

私は、少しずつ、顔を近づけさせる。

その時、急に理性が訴えた。

ダメ、止まって。李緒クンは光の想い人かもしれないのよ？ 裏切るなんて、そんなこと。

欲求が訴えかける。

どうして？ そんな確証はない。光が李緒クンのことが好きだったのなら元々仲のいい2人のことだ。恋愛にも発展する可能性も十分ある。そんな状況で光があそこまで思いつめるなんてあまり考えられない。それに、光が相良クンを好きだと予想していたのは私自身じゃないか。

そして……現に、現に光は眠る李緒クンを置いて、帰ってしまったじゃないか。

徐々に、徐々に、顔が近づいていく。あと一歩。あと一歩だ。もう少して――。

――「ちよっと、何、してるの？ ……千代ちゃん」
え？

即座に身体を反転させて声の主を見る。

身長が低く、ぽつちりと大きな目とセミロングの髪の可愛らしい最も親しい友人の一人――本条光だった。

「……今、何、しようとしてたの？」

驚いたような顔がずっと引き、光は人形のように冷たく、機械的な笑みを浮かべた。

先ほどまで透き通るように晴れていた空には、ぽつり、ぽつりと雨雲がまばらに広がっている。もうすぐ、雨が降ってきそうだ。

(7) ぴちぴちやぶちやぶらんらん

冷たい。高揚していた心がずっと冷めていった。

先ほどまで晴天だった空には、雲がまだらに広がっている。

太陽が雲に隠れて気温が下がってきたからだろうか。いや、違う。これはそんなんじゃない。

「私はね、今まで保険の先生に頼まれてゆうくんに電話してたんだ。あ、ゆうくんっていうのは李緒の弟くんだよ?」

私の隣にあるベッドには李緒クンが横たわっている。私は今、立ったまま光と向き合っているけれど、ついさっきまで李緒クンと顔が触れてしまうほど近づいていた。

私、……今何しようとしてたんだろう。ここで光が私に声をかけたのは幸運なのか、はたまた不幸なのか。

……不幸? そんなはずない。そんなはず、ないのに……この苛立ちはなんなの?

「普段はぶっきらぼうなんだけどあれでなかなか兄思いなんだよね。頭ぶつけたって言ったときのゆうくんの声ったら」

あはは、と何事もなかったように光は顔を綻ばせて花のように笑った。けど、何かが違う。花は花でも……それは造花。

そして、ピタリと笑いが止まる。光はまた、先ほどと同じような、私が凍りつくには十分なほどの効力をみせる微笑を浮かべた。

「ねえ? それで……それでもう一度聞くけど、さっき、何してたの?」

それは言えない。自分でも把握出来ていないから、決して彼女には言ってはならない。けど……けど。

「わ、私は――」

何が言いたいのか、何が言ってはならないのか。

私が何か、取り返しのつかない、自分でも把握しきれていないことを口に出そうとしていたとき、

——「ん……んあゝ？」

救いのような、彼の間延びた声が無機質で機能的な作りの、この真っ白な部屋中に響き渡った。

夢を見た。

あたしの家の近くにある幼稚園で4人が仲良く遊んでいる、夢。あたしと、光と、祐次と……もう一人。

誰だったろう。あまり覚えてないけれど、とても仲が良かったことだけは分かる。

4人でいつも一緒におママゴトして、一緒にお昼寝して、一緒にいたずらもした。

とつても幸せな夢。記憶がぐるぐる、ぐるぐる回って。……けど、もうすぐ行っちゃう。彼は、行っちゃうんだ。

誰だったろう。この顔、愛くるしいこの笑顔。……彼の名前は確か——。

ぷつり。

そこで、夢が途切れた。

「ん……んあゝ？」

あたしは間拔けな声をあげて目を開けた……ら、何故かそこは白い、雪のような場所だった。

遭難？ そうなんですか。いやいや違うって。

「……どこ、ここ」

むうっと唸りながらあたしは呟く。ぼやけていた視界が戻ってきて、ここがどこかの部屋だということが分かった。

んで、そこにあたしが寝てる。もち部屋じゃない。あたしの部屋の天井ってお母さんの趣味でピンク色だし。

あたしの視界がとらえるのは真っ白の汚れ一つない天井。

……いや、どこよ、ここ。

まさか、誘拐？　誘拐なのですか。いやでもうち、そんな裕福な家庭でもないし。

んー……。むうー……。か、身体狙い？

い、いいいいやあああ！

……って、んな訳ないじゃん。バカかあたしは。男の身体狙って何が楽しい。

意味不明なことを考える頭に渴を入れつつ、左へ寝返りをうつと、
「……？」

どうしてか光と千代があたしを見つめていた。とりあえず、

「おっはよー？」

言ってから彼女達の背景を見て気付く。

たまーに先生と談笑するためだけに来る馴染みの部屋。見慣れている場所だった。

……ここ、保健室？

「おはよ、李緒。……大丈夫？」

あたしが挨拶すると、どうしてか呆然とあたしを見詰め続ける千代の横を光がするりと通り抜けて、中腰になって顔を覗きこんでくる。

そりゃ大丈夫ですよ、寝起きからこんな間近で光の顔なんて見られたら！　ご飯三杯はいける！

ぐっとあたしは寝たまんまの格好で強く手を握り締めた。

……まあ、口には出していないけどね。変態じゃん。うん、進歩。最近人前で変なことはいわなくなった……と、思うし。

「んー、何が大丈夫かはどうかは知らないんだけど、なんで……俺、こんなところで寝てるの？」

ふと、疑問に思ったので問う。

すると光のやんわり微笑んだ表情が急に心配気に変わった。

「え……李緒、覚えてないの？」

「覚えてないも何も、何がなん——」

言いかけたところで、止まる。

違和感を感じ、無言のままあたしの上にかぶせられた布団を外し、そのまま身体を上げて腕を抜き後頭部に手をやると、こんもりと膨らむ物体が手に取れた。

ナンダコレ。

……あ。

「あー！ー！！ いだっ！？」

「り、李緒！ ……大丈夫？」

叫んだ衝撃で激痛が後頭部から走って、涙目になってうずくまる。よしよしと光が頭を撫でてくれた。ちよつと落ち着ついて半泣きのまま顔をあげる。そして、あたしはぼんやりと呟いた。

「あー。うー。思い出した……」

そうだった……。

今考えるとすごい恥ずかしい気がする。

顔にパンケーキがぶつかって、こけて、気絶した。それだけ。それが授業中、クラスみんなが見てる中で起こった。

……ま、間抜けすぎる！

衝動的に掛け布団を思いっきりあげたくなって、ついあたしは頭を抱えた。

「……ね、今って何時？」

少し気になったので尋ねてみる。

「5時くらいだよ、たぶん。もうっ……ずっと起きないから心配したんだからね」

「……へ？ 5時!？」

じろりと微妙に潤んだ目で睨む光はひっじょーに可愛かったけど、まあそれは置いて。5時？

家庭科は確か6時間目にあったはず。今日は7限授業だったから……あ、あたし2時間も寝てたのか。

……あれ？

「じゃあさ、光はともかく何で千代までここにいるの？ 部活はどしたの?？」

千代は確かテニス部に所属していたはずだ。今、この時間帯は部活中のはず。部活抜け出して見舞いにきてくれたんだろうか。

けど、言葉を待っているのに返事が返ってこなかった。千代は焦点の合わない目線であたしを見つめたまんまだ。そして、何故か光は千代のほうを振り向かなかった。

……どうしたんだろう？

「千代……？」

「……えっ？」

あたしがもう一度声をかけると、驚いたようにあたしを凝視した。……な、なんなんだ。なんなんだ、一体。

もしかしてあたしの顔、家庭科の時間つまみ食いした生クリームでもついてるとか……！？

ぺたぺたぺた、頬っぺたや唇を触ってみるけど何も手にはついていなかった。けど、何故かその動作を見て千代が顔を赤くする。

いや、そんな反応されても、って感じなんですが。

「ち、千代さん千代さん。さっきから一体全体どうしたんですかー……」

あたしがそう丁寧に声をかけると千代は、

「えっと、その、あたしは……」

もごもごと口の中で何かを言いながら不安げに顔をきよろきよろと別の場所に向けたり、戻ってきさせたりしている。

なんだか、変な雰囲気だ。千代は何でか動揺しているし、光はいつもとより何となく――ホントに何となく何だけど、表情が硬い気がする。

まあ、ただの……勘だけど。あたしが眠ってる間に何か、あったのかな……。

そんな事を考えつつ、いつまでたっても千代があんな様子なので、助けを求めるようにあたしは光に視線を移した。するとひかりは全く微笑みを崩さず、

「千代ちゃん」

「な、何……？」

光が詠うように、穏やかな声で呼びかけたにもかかわらず、どうしてか千代の頬は引きつられた。

「千代ちゃんは李緒のこと、心配してお見舞いに来てくれたんだよね。……もう李緒、元気みたいだから部活、戻ってもらってもいいよ？ あとは、私が見てるから」

「……え、あ、うん。そう……」

素っ気なく、光は千代を部活へ送り出そうとする。

今まで看ててくれたんだから、もうちょっと話していたいな、なんて思ったけれど……部活ならしょうがないかあ。

とぼとぼと肩の力が抜けたように歩く千代を不思議にも思いつつ、あたしは、

「千代、ホントありがとうね。部活、頑張って」

あたしがそれだけ声をかけると、千代は振り返って、

「あ……あたしこそ、ありがとっ！」

「――はい？」

「そ、それじゃっ」

それだけ言うと、千代は早歩きで保健室を出て行ってしまった。

……あたし、お礼なんて言われることしたっけ？

あ、家庭科の時間、ちょっとだけ手伝ったからそのことのありがとう、かな？ と、いうかそれ以外思いつかないし。別にいいのになあ。千代って律儀。

あたしは心中で千代に向けて尊敬のまなざしを送った。

千代が立ち去ったあと。

「ね、光。俺が寝てる間、何かあったの？」

「んーん。何にも、なかったよ？ ……あ、でもついさっき廊下で蓬クンに出会って、謝っというって頼まれたことなら」

そう、光はにっこり、満面の笑みで答えた。

——ザアアア。

……今の状況を語るには、その擬音がぴったりだとあたしは思う。ここは下駄箱のある玄関を出て、真上に職員室がある、いわゆるピロティだ。

「よく、降ってるねー」

「……んだね」

「李緒、傘持ってきてる？」

「……この表情見れば、分かるでしょ？」

——ザアアア。

意気消沈とあたしは肩を落とす。これだから雨は嫌いなんだ。ソフトをすれば泥まみれになるし、携帯を触れば水滴が画面につくし、……傘、忘れたし。

うう……今日は降水確率10%だったのに！ 美人ニュースキャスターの涼子ちゃんも今日はとてもいい洗濯日和だって言ってたのに！ あの綺麗な微笑みに騙されたー！？

「ふふふー」

光は小さくて可愛い水色の傘をくると回してぱさりと開いた。

どうやら光は、置き傘してあったみたいだ。

「しょうがないなあー」

ころころと何やら嬉しそうに笑うと、光はあたしに傘を突き出してくる。どうやら持って、という意味らしい。あたしは光が何をしたいのかに気付き、自然と傘を受け取り——そして、また気付く。

「……や、これって」

「え？」

分かってやっているんだろうか。

「どうしたの？」

そう言って、可愛らしく光は小首を傾けた。

分かって、ないんだろうなあ……。

別に、あたしが傘を持つことに疑問はない。むしろあたしが傘を

持つのは当然だ。光って背、私の肩よりも低いし。けど、同姓がこの同じ傘で仲良く家に帰るのは意味合いが全く違ってくると思う。女の子だったときならありがたく入れさせて貰っていただろうけど……。

ちらりと周りを見渡すと、ちらほらとまだ学校に残っていた生徒が帰り支度を始めている。まだ最終下校時間じゃないから数は少なくて知り合いもいなさそうだけど……これ、相合傘ってやつ、だよな。「李緒、李緒。どしたの？ 早く帰ないと雨強くなっちゃうよ」じれったそうに光がもう一度聞く。

……一緒に帰ってるだけでも関係疑われてるのに、相合傘なんてしてるとこ見られたらまた何か言われるんじゃないだろうか。

「……しょ、職員室行って傘借りてくるよ。その傘じゃ、お互い濡れちゃうだろうし」

「え！ そんなこと気にしてたんだ」

驚き顔であたしを見つめる光。

我ながら、いい逃げ口実を付けられたと思う。これなら一緒に傘で帰りたくないって思われないだろうし、やんわり断れ、

「これなら、……大丈夫でしょ？」

なかった。

ふわりとあたしの腕に柔らかな光の肩がもたれかかってくる。

「きつと傘、残ってないよ。急に降り始めたから、みんな貸し出し中だと思う」

バカ、あたしのバカ。これじゃあすごい断りにくくなったじゃないか。

「け、けど」

噂になったら困るのは、光のほうじゃ？ そう、言おうとしたら、

——「だめ？」

ああ……。

光の顔、超急接近、上目遣い、……のつくだあーうん。

……まあ、いっか。

あたしが光に甘えられたらどんな事でも断りきれはるはずもなく、
あえなく撃沈することになってしまった。

誰も知り合いないみたいだし…少しくらいなら、いいよね。

ぴちぴちちやぷちやぷらんらん。

李子は雨の日が好きじゃないと言っているけれど、私は大好き。
それには色んな理由があって、紫陽花がとても綺麗に見えるだとか、雨が落ちるたびに鳴る音を聞いていると心が落ち着いてくるだとか。そんな些細なことはもちろん、小さい頃家の中でおママゴトするのが好きだったあたしは自然と雨が降ることを心待ちにしていたことだとか、中学校のときの部活は雨が降ると中止になったので李子が一緒に帰ってくれただとか、あたしの中ではとっても大きなもので。

それに、いい思い出がつまっている。

大部分は李子との思い出で、初めて彼女と出会ったのも、初めて家にお呼ばれたのも、初めて手を繋いだのも雨の日だった。

そして——忌々しい、彼が私の前から消えてくれたのもこんな雨の日だった。

「ぴちちぴちちやっぷちやっぷらんらんーんっ」

「くすっ……機嫌いいねー」

「そりゃあもっちゃん！」

……調子いいなあ。

そう思ってたたくすりと私は笑う。私は李子の傘の柄を持つ手をきゅっと握った。

李子の手は、冷たくて温かい。

先ほど突然、そういえばケーキ食べてない！ ってショックを受けていたから私のカバンの中に李緒の分のケーキも入ってるよ、と言うと急に元気になったのだ。

「それじゃあ、今から李緒の家言ってもいい？」

カバンの中に入っているパンケーキは2つ。1つは私の手作り、もう一つは相良クンの手作りだ。私が李子の分までもう一つ作ってもよかったんだけど、あの時は少し取り乱していて――そんな風に考えることも出来なかった。

けど、相良クン、私よりも上手だったから、きっと李子も満足するだろう。少し複雑だけれど。

「うん、オッケー。けど、時間大丈夫？　もう結構たちちゃってるけど」

そう言って李子は私に向かって屈託なく笑いかけた。私は一度だけ頷いて、制服から携帯電話を取り出してお母さんにメールを送っておく。

「李緒の家に行ってきます……っと。うん、大丈夫だよ」

送信ボタンを押すと私は携帯電話をまたポケットにしまった。

私のその動作を黙って見届けると、李子はりょーかい、と言って今日の出来事、主に男の子達との話を喋りはじめる。

(……やっぱり、勘違い、かなあ)

なんだか李子に避けられている、と思ったのはつい一週間前だった。それは英語の授業のときで、私たちのクラスは男の子と女の子、半々だから男女混ざってペアを組もうということになったんだけど……李子はすぐに私の所へ来てくれると思っていたのに、私と千代ちゃんを交互に見て、1度苦笑すると、困ったように周りを見渡してからみいちゃんの所へ行ってしまった。確かにみいちゃんはこのうう男の子との交流が苦手だから組んであげたくなるっていうのは分かるんだけど……。どう考えてもみいちゃんよりは私のほうが親しいはず、だし。席もずっと近かったのに……。

それからそのことについて悩みながら李子を観察していると、他にも色んな所でそういうことがあることに気付いてしまった。特に、考えすぎかもしれないけれど、李子から私に話しかけに来てくれる回数がずっと減ったとか……。

でも――。

「それでね、相良ったらすごい怖い笑顔見せるんだよー、もうっ」
私は苦笑して相槌をうつ。

でも、今の李子を見ているとそんな様子はなさそうだった。少なくとも今だけは。……今だけは私がいつも楽しくなる笑顔を向けてくれている。きっと、やっぱり、勘違いだったんだろう。

――そして、やっぱり、先ほどの勘違いだったんだろう、きっと。……そう、きっと。

私はこの肩から伝わる心地よい体温を感じながら、そう信じていた。

「たっだいまー」

「こ……んにちわ」

李子は陽気に大きな声で、私は少し緊張しながら玄関に入った。リビングのほうから、おかえりー、とおばさんの間延びした声が聞こえる。私が少しだけ緊張している理由なんて些細なこと。李子が李緒になって、初めてのお呼ばれだったからだった。

「光、どしたの？」

「え……んーん？ 何でも、ないよ」

ふるふると首を振ると、そう？ っと言って靴を脱いで玄関へ上がった。

李子は普段鈍感な癖して、妙なところですごく鋭い。すぐに私の表情の変化を読み取ったりするのだ。長年の付き合いからか、天性のものなのか。

……前者だと、嬉しいなあ。

「お邪魔します」

私は靴を脱ぎ、揃えたと李子の後についていく。おばさんからの出迎えは滅多にない。それは失礼だということではなく、私がよく李子の家に行っていたからきつともう一人娘が出来たと考えてくれているのだと思う。

それは、とっても嬉しいこと。

「ただいま、もー急に降ってきちゃってさあ」

「ふうん、それなのにあんたよく濡れないで帰れたわね。置き傘でもしてあった？ ……あ！ そういえばあんた頭打ったって祐次から聞いたけど、大丈夫なの？」

「だいじょぶだいじょぶ。ほら、こんなぴんぴん」

「あらまあ。……ま、あんたが頭打った程度でどうにかなると思っ
ていなかったけど」

「それ、どういう意味——!?」

「そのまんまの意味よ」

少し前でそんな会話をする親子に微笑みつつ、1歩、1歩、リビングへの開かれたドア、李子の傍へ歩いていった。

「お邪魔してます、おばさん」

私はおばさんから見える場所に立つと、もう一度挨拶してからぺこりと頭を下げた。

おばさんはしばしポカンとした後、

「あら、あらあらあら？ 李緒、あんたまさか——」

「違うって！」

「え、え？」

私は急な展開についていけずに、首を傾けながらやけに嬉しそうなおばさんとあたふたしている李子を見た。

「どうしたんですか？」

「どうしたも何も、最近光ちゃんうちに来てくれなかったじゃない？ だから李緒、振られちゃったのかと」

そう言っておばさんはやにやと李子と私を交互に見つめた。

振られたって、まさか…。

私は少しでも苦笑をすると、違いますよ、と肯定とも否定ともとれる言い方を、わざとした。

「だあかあらあ！ そーいうんじゃないって！ ……光。ちよつと上がってて。何か、飲み物入れたら上がるから」

「あ、うん……」

少し不機嫌そうな顔で言う李子。きつと、この1ヶ月よくそう言われてからかわれていたのかもしれない。

「お邪魔、しますね？ おばさん」

「ええ、どーぞー。汚いけど我慢してあげてねー？」

「汚くないー！」

あはは、と笑いつつ、頭を下げて先に階段を上がっていく。綺麗な好きなおばさんだから、床にはひとつのゴミも落ちていない。

とんとん、と小さく音がなり、12段ある階段の真ん中――だいたい6段か7段目の所で私は途中で上の階の壁からこちらに曲がって来る、ゆうくんを見つけた。

「こんばんは、ゆうくん」

「あ、先輩……」

今まで気付かなかったのだろうか、ぽかんと私を見るゆうくん。ぽりぽり、とゆうくんは頬を掻くと、

「どーも今日は愚兄がお世話になりました」

そう言って小さく頭を下げて苦笑した。

「愚兄って……自慢できるお兄ちゃんでしょー」

階段の途中、すれ違いつつ、あたしはくすりと笑う。

ゆうくんが李子を尊敬しているのは話していて分かる。彼が口を開けば1時間の間に5回は兄ちゃんというほどだから。小さい頃、よく李子の後ろを私と一緒に金魚のふんみたいについていったんだっけ。

「あ、先輩」

ゆうくんは私のことを先輩と呼ぶ。それは彼が中学生になったときについた習慣だ。昔は光ちゃんだった。別にいいのに、と思うけれど、同級生によくからかわれることからそうしたらしい。

「なあに？」

振り返って、いやに真剣な表情をしたゆうくと目が合った。

「先輩」

「……？」

何を言われるんだろう。首を傾けると、ゆうくんは急ににたりとした顔をして手で小さなスピーカーを作りながら小声で、言った。

「簡単に許しちゃ、だめですよ」

「え？ ……あ」

意味が分かってとたんに私の頬が朱に染まる。

……な、なな何を言ってるんだろう、ゆうくんは。

「じゃあ、ごゆるりと」

まるで紳士のように手を胸の位置まで持っていった頭を下げると、ゆうくんは口に手を当てて笑いをこらえながら下の階へと降りていく。

ゆうくん、やっぱりまだ誤解してるんだろうな……。

私は赤面しながらも、小さく李子とゆうくんとお婆さんの喧騒が聞こえる中、動揺を押さえて李子の部屋へと向かった。

「ふう……」

ぱたりとドアを閉めてへたり込む。

久しぶりの李子の部屋は、あいも変わらず桃色だった。別に乙女チックなのではないし、置いてあるものはそれほど女の子っぽくもないのだけれど。

とにかく桃色。お婆さんの趣味でピンク色に染まった壁だった。

李子は目がチカチカするって言うけど、私は好きなんだよね……。

なんだか、落ち着く……。やっぱり、女の子だからかな。それとも、李子の部屋だから？

私は赤ん坊のように這いつくばって李子のベッドへと移動する。

ベッドの上に移動して、枕を胸に抱いてすうっと息を吸うと、フローラルのいい香りがした。小さい頃から全く変わっていない、私の大好きな香り。

枕を鼻元に移動させて、くんくんと匂いをかぐ。それだけで私は――。

「……さて、どうしたんもんだろう」

あたしの目の前にはあたしの枕をぎゅっと握り締めて眠りこけているお姫様がいます。オレンジジュースをテーブルに置いてから、あたしは某名探偵のように手を顎に当てて考えた。

……どうやってこの眠り姫を起こそうかなー。

やっぱり定番は王子様のキスだよなー。こうぶっちゅーつと。

頭の中で白雪姫の話が展開されている。あたしはじいっと光のさくらんぼのような可愛らしい唇を見つめた。

……無理、あたしそんな度胸ない。ていうかそんなことしたら絶対絶交される……！

ってことは。

手を顎から外して、大きく横に広げる。

やっぱり、これだよなー？

あたしはわきわきと手を開いたり閉じたりして、

「ひ、か、りいー。起、き、てっ」

思いつきり、両脇をくすぐった。くすぐった。くすぐった。いっぱいくすぐった。

「……！？ きゃあー！ ……あ、あははっ！？」

くすぐって、くすぐって……。

「おはよー、光？」

「あ、は……はあ……。も、も……う、李子お？？」

起きたばかりの光は、散々笑ったあと、ぽけーと半開きの目で睨んでるようで、そうではない熱っぽい視線を送ってくる。

寝ぼけているのだろうか。

……って、いうか、……い、色っぽい。

頬は上気しているし、目には涙が浮かんでいる。

「お、お持ち帰りしてもいいですかー？」

「……どうぞー？」

ふやけた表情で光は答える。意味がわかってないみたいだ、しめ

しめ。

「じゃあ、遠慮なく」

そう言って背中から抱きしめる。きゅうつと光の感触が正面から私に伝わってきた。

あー……柔らかいー。いい香りー。

そう言えばこうやって抱きしめるのは本当に久しぶりだと思う。最近やる暇もなかったし。……それに、こんな状況じゃないときと出来ないと思う。だって、

「……ちょ、ちよつと、李緒！ そんな……！」

光は、照れ屋さんだからだ。

少しの間じっとしていたけど、時間がたったらあたふたして、顔を真っ赤にしている。あたしが女だって分かってるのにね。いやー、面白い。

「いいじゃんいいじゃん。減るもんじゃないしさー」

あたしが背中に顔を擦り付けると、

「減るの！」

思いつきり逃げられた。ベッドを降りて、壁のはしっこまで行っている。そんな光がまた可愛いと思うあたしはもしかしてサドなのだろうか。

「まあまあ、そんな怯えてないでこっちきなって」

そう言ってちょいちょいと手を振る。気分は悪代官様だ。

ええではないか、ええではないか。

「も、しない？」

「しないしない」

けど、さすがに光で遊ぶのはこれくらいにしておこうと思う。なぜならあたしにはケーキが待っているのだ。甘い物は主食、食べなければいけないもの。

「むー……」

恐る恐るといった足取りで近づいてくる光に苦笑しながら、あたしはベッドから降りてテーブルの前に座った。

「さて、例のブツでもだしてもらいましょーか」

悪代官は続く。

「ぶ、ぶつ？ ……あ、ケーキ？」

光は、もうつと言いながらもカバンから袋を取り出して、2つの包みをあけてくれた。

「ふむふむ……これはいい一品……っていうか、美味しそ」

2つとも飾りは違う。たぶん、作った人が違うのだろう。だけど、両方とっても美味しそう。片方は綺麗に出来ているし、もう片方は少し崩れているけど、頑張っているのがありありと見て取れた。

「とっていい？」

「うん、いいよー。……あ」

何か光が言う前に、あたしは片方、頑張っている、と言ったほうをついさっき台所から取ってきたフォークで切っている。そして、ぱくりと食べた。

「おいしー！」

味はもちろん最高。

美味しい、とっても美味しい。やっぱり手作りはいいね。

だけど、何故か光はケーキに手をつけないで私の顔を見ていた。

「ん？ どっかしたの？」

光は急に嬉しそうな声で、

「ううん、何でもない、よ。……うん、ケーキ、美味しいね」

そう言ってなんだかいつもより2割増しな笑顔をあたしに送った。

光の口にマツチしたのかな？ ケーキ。

あたしは引き続き、とても美味しいケーキを食べながら、嬉しそうに微笑む光を見つめる。

それからの会話は、もっぱら明後日から始まる、修学旅行の話。

……北海道、どんな美味しいものがあるのかなあ？

やっぱり今日も今日とて、花より団子なあたしだった。

(8) 北海道はでっかいどう！

——ブォォーン。

見渡す限り、雲、雲、雲！

あたしの視界の周りには晴天と色々な形の雲がまだらに陳列している。

今日は待ちに待った修学旅行なわけで。今はすごいおっきい飛行機に乗ってるわけで。

……あの雲、食べられないかな。案外綿菓子みたいでいけるかも。でも、掴めるのかなあ。美味しそうんだけどなあ。

そんな馬鹿な考えについて一人談義しつつ、手に持っているポツキーを齧る。

「食べる？」

「お前、飯食ったあとでよく食えんな……」

げんなりした顔でそういうのは隣の席に座る茶髪で中世的な顔立ちをした少年。

女の子にはお菓子は別腹って言う素晴らしい能力があるから大丈夫って力説したいところだけど、今あたしは男の身体。でも、あたしがさっきお腹いっぱい昼食食べたのに入るってことは男の身体でも別腹機能は適用するらしい。

「ケンちゃん飛行機怖いだけでしょー」

「うっせ、怖いんじゃないくて苦手なんだ！」

「じゃあ俺の席譲ろうか？ 風景綺麗だよー、好きでしょ？ 窓際」意地悪に笑うと、ケンちゃんが無言であたしの頭を軽く叩いた。そして重くため息をつくと、

「……寝ててもいいか？」

どうやら本気で駄目らしい。しんどそうな顔をしているので頭を撫でてあげると、気持ち悪いといって振り払われたけど。

ケンちゃんが目をつぶって、あたしの周りにだけ静寂が訪れる。

まあ、先ほどもいったけど、そんなこんなで修学旅行。今は北海道まで飛行機で移動中、というわけだ。けど、今の近況を言うと……とっても暇。携帯も使えないし、あいにく小説なんてあたしが持つてゐるわけもないわけで。それで今、隣のケンちゃんが寝ている状態なあたしといえば、何度も言うがとっても暇なわけ。

「俺の親父が飛行機に乗ること多いから乗り慣れてるんだよ」

「え、じゃあ相良クンのお父さんは飛行機の運転手さん？」

「いや、違う違う。貿易業らしい。詳しいことは知らないけどさ。よく小さい頃に同乗させられた」

「くすくす。何それ」

前から相良が光に話しかけて、相槌している声が聞こえる。

——せっかくの修学旅行、しかも今は特に楽しい移動中。

けど、後ろの席は他人だし、前の席は光と相良。話しかけたい。でも、それはダメなんだよね。やっぱり邪魔は出来ない。

……ああ、どうしてあたし光の隣じゃないんだろ。

なんだか、嫌な気分。あたしが窓の外に視線をうつすと、先ほどと変わらない地平線の見えない空。初めははしゃいでいたけれど、今は変わらない風景に見飽きてきた。

光と相良が隣同士な理由はこうだ。

まず初めに先生が班同士で集まって乗りなさいって言われて……

まあ、あとはいつも通り、言葉巧みに、ってそれじゃああたし悪者みたいじゃん。適当な誘導で光と相良を組ませようとしたわけ。

で、組ませたのはいいんだけど……。

「相良クンってどこのポジションなの？」

「俺？ フォワード」

「私サッカーって分からないんだけど、攻める人、だよな？」

「んー……まあ大雑把にいうとそんな感じだな。本条ってサッカーに興味あるのか？」

「えと……見てるだけなら好き、かも」

もう一度前の席に意識をうつすと楽しそうに談笑する声が聞こえ

た。その時、ふいに感じる虚無感。

もしかしたら、今頃相良の席にあたしがいたかもしれないんだよね、とあたしと光とのポジションが奪われた気がして、少しだけ気落ちする。今まであたしの隣にはいつつも光がいたからなあ。そんなふうに考えているとあたしの中の光は大きいと思っていたそれ以上に、大きいんだなと実感。

だって、去年の校外学習のときも、中学校の修学旅行のときも遠足でさえも、いつもあたしの隣の席には光がいて可愛らしい微笑みを見せていたから。だから、なんだか急に素直に光と相良がくっついて欲しいとは思えなくなってしまうていた。それでもやっぱり邪魔できないと思ってしまうのは、偽善だろうな。

もう一度ため息を心中でつく。

なんだかあたしすっごい嫌なやつかも。やだなあ、友達なら気になる子と睦まじくしているのを喜ぶべきでしょ。そう、喜ぶべき。

「くすくす」

思った途端、前から光の押さえた笑い声が聞こえた。

……やっぱ、やだ。なんだろう、このわだかまり。まったく、もう。もう一度ため息をついて、ぐるぐると変な思いのうずまく頭を振り払いつつ、あたしは腰の辺りに設置されているイヤホンに手をかけた。

その時。

「ん、んー……姉ちゃん」

耳にかけた瞬間、音楽と一緒にそんな声が隣からうわごとのように聞こえた。

ね、姉ちゃん？ ケンちゃんってシスコンだったんだー。

ぷつと吹きだしそうになる。今度起きたらからかってやろうか、そんなことを思いつつ、あたしは目を瞑った。

耳元ではあたしでも知っているほどの有名ソングライターが早口の英語を歌っている。ケンちゃんの寝顔は思っていた以上に、可愛らしかった。

送迎バスが旅館へとついて、外にでた瞬間――急に冷気が身体に降り注いだ。

「さっぶう……」

あたし達の住んでる町じゃアンサンブルくらいがぴったりだったんだけどね。飛行機から降りたときも思ったけど、やっぱり北の国は温度が低いらしい。

「ばっかだなー、半そでなんて」

「もうるさいなー。そういう自分だって半そでじゃん！」

「あ、ばれた？」

トモダチのおふざけたに笑い声をあげつつ、腕をさすりながら見定めするようにあたしは旅館を見上げる。

……でかつ。

予想以上。嬉しい誤算。

北海道はでっかいどう！ 旅館もついでにでっかいどう！

あたしの目の前にあったのは思っていた以上に大きなテレビに出てきそうな旅館だった。よくこんなことれたなあ、なんて感心してしまう。風情があって豪華、これなら十二分に楽しめそうだ。

あたし達がバスから降りた途端、すぐに若くて綺麗な女中さんが門から駆け寄ってくる。彼女は上品な仕草でこんにちは、ようこそおいでになりましたと頭を下げてきた。

き、きれー。

日本美女だけでなく、なんというかそこには玄人の顔も見えて、凛としてるなあ、なんて思いながら眺めてしまう。

その時、急に誰かにわき腹を小突かれる。

「何、見惚れてるのよ」

「え？」

いきなりの悪態。隣を向くと綺麗な顔のショートヘアが不機嫌そうにあたしをにらんでいた。

「な、何？ 千代」

「何、千代じゃないわよ、もう！」

あたし、また何かしたのかな……。こういうときの千代は怖い。別に暴力的になるとかそーいうのではないんだけど、大抵あたしが悪いから何言われるかが不安だ。

「ど、どしたの」

「私が用もなく話しかけちゃダメなの？」

「いや、そんなこと全然……」

そう言う千代は、じゃあいいじゃない、と世間話をしはじめた。あたし、情けない。ところで一体何を怒ってるの……？

千代はあたしのこと嫌ってはいないらしい。それはなんとなく、分かる。普通本当に嫌いなら話しかけてもこないだろうし。……まあ千代はそういう例えに当てはまらないお姉さんの性格だから関係ないかもだけど。

まだ口調の刺々しい千代と話しながら、先生の指導の元ロビーへと移動する。そこで出席番号順に並ばされて、全員いるか点呼。そして、確認事項、と言って今日の事柄について話し始めた。

右隣には光、右斜め後ろには千代。

あたしの苗字は平西だから『ひ』。光の苗字が本条の『ほ』。そして千代の苗字が岬の『み』。

だから、主席番号で並ぶとなると、比較的近くなる。

「李緒、もう大丈夫なの？」

ゆっくりと先生から視線を外して心配そうにそう小声で聞いている光。

「……え？ な」

何が？ と、聞こうとして、詰まる。そういえばさっきの飛行機の席順のとき、わざわざ仮病使ってまでケンちゃんと座ったんだっ。ケンちゃんも具合わるそーだししんどい同士仲良く座るからーって。あの時本気で心配されて良心が痛みまくったのを今でもこの胸が覚えてる。

「あ、あーうん。もう大丈夫、治ったよ」

そう？　と光はまだ心配そうな目で見つめる。2日前のときも然り。ホント、過保護なんだから、なんて思いながらもちょっと嬉しい。けど反面、良心もずたずただった。

「そういえばそっち部屋割りどうなってるの？」

そういえば聞いていなかった気がする。あたしは後ろを向いた。まあ大体分かってはいるけど、念のため。

「私と光とみいちゃんだけ……」

千代は先ほどの刺々しい表情を見せず、そう言った。千代が尾を引く性格じゃなくて感謝。だけど、あたしがそっかー、と相づちをうった瞬間、先ほどとはまだ違ったスゴく怪訝な目付きを送られる。「い、言っとくけど、夜中忍びこんできたら承知しないから！」

い、……いや、しないから。

何やら顔を赤く染めていう千代に突っ込みをいれつつ頭を掻く。あたしって千代の中じゃそーいうキャラなんだろうか。……覚えているのだけでも1つ。2つ。3つ。こ、心当たりがありすぎて妙に悲しい。うん、考えるのはよそう。

あたしは適当に流そうとする――が、光は無言で千代を横目で見つつ、突拍子もないことをいいたした。

「……ね、李緒。もし夜中暇だったら私遊びに行ってもいい？」

「ええ？」

何をいうんだこの子は。

「あ、あーた何いってんのよっ。ダメに決まってるでしょっ、李緒くんなんてね、狼なんだから！」

それまで小声だったのに普通に喋るから、周りの人達が振り向く。

「あ、ははは……？」

先生までこっちを見てたので、あたしは苦笑いを振りまいて、千代は顔を赤くしてうつむいた。先生が一度せきをして、また話し始める。

狼なんだから、か。本気で、千代のあたしへの印象に疑問をもつてしまった。

……それにしても、光、本気で言ったの？　そう思って見つめると、子悪魔みたいに意地悪く微笑まれる。どうやらうまく遊ばれたみたいだ。

バスがこの旅館についたとき、もうほとんど夕方だったから、先生から説明を受けた後、すぐに荷物を部屋に運びに行って、食べる場所へ案内された。

「わお」

夜ご飯はいきなりジンギスカン食べ放題。匂いはきついけど、すごく美味しそうな香りが部屋中を満たしている。こういうのを見ると、北海道に来たんだなあってすごく実感。

「肉、もっと入れるか？」

「うんっ」

正面に盛られる肉と少量の野菜を炒めてくれている相良に感謝しつつ、おねーさんもう一皿追加ー！　と、あたしは手を上げて叫んだ。

「おいしーっ。俺ジンギスカン食べたの初めてなんだー」

羊さんごめんなさい。そしてありがとう。

ぱくぱくとあたしの口から羊肉が胃に放り込まれていく。

「お前そんな食いすぎたら太るぞ？」

「うっ」

ケンちゃんの何気ない言葉があたしの胸に突き刺さる。今思うと休日のランニングくらいしか自主的に運動してないな、なんてことに気付く。食べたいけど太りたくない。これは男女変わらず究極の葛藤である。

「李緒、やっぱりサッカー部入ったほうがいいんじゃないか？　運動してたらいくら食っても太らないぞ」

冗談交じりに勧誘してくる相良。以前あの後ちゃんと断ったから諦めたかと思っていたのに、そうでもないみたいだ。

「そーいや李緒って部活入ってないんだっけ？」

「ソフト入るつもりだったらしいぞ」

それを聞いて、ケンちゃんが笑い出す。

「ソフトって……ばっかでーッ」

ば、馬鹿じゃないやいっ。前は入ってたんだからっ。……まあ、男子ソフトがないことに全く気付いていなかったあたしもあたしだけどね。

からかわれてむっと来たあたし隣のケンちゃんのお肉まで口に入れる。

「むしゃむしゃ、おいしー」

わざわざ擬音まで出してケンちゃんをからかう。

「おい、李緒ッ」

「へーんだ、また焼けばいいでしょー」

「くッそ……おらッ」

つんと横を向くと、ケンちゃんがふざけ半分で身体を羽交い絞めにしようと手を伸ばしてきた。

「セ、セクハラっ」

こ、これってセクハラだよ。だってあたし、心は女なんだから！いくら身体は男でも――て、……あ！？

ケンちゃんの魔の手から逃げながら、この後やってくるだろう、ある一つの問題に今あたしは愕然としてしまっていた。

女の子たちは李緒クンと蓬クンの絡み合いを見て楽しそうに笑っている。

「ホント男子って、馬鹿ばかりだよねー」

「けどあの2人だと変な想像が駆り立てられるわけで」

確かに、あの上級生に好かれそうな容姿をもつ蓬クンと、言わずもがな最近急激に女の子からの株急上昇中な李緒クンだ。そんな風に考えてしまうのもおかしくはない。

「何しろあの面子だもんねー。私このクラスで良かったー」

「ぷっ、まあそういうことはお近づきになってからいいなさい」

「なんだとーっ」

あはは、と黄色い声をあげて笑うトモダチ達。本当に楽しそう。

「っ……」

そんな中、私、岬千代子は下腹部への鈍痛に悩まされていた。

最悪。

その一言に尽きた。

確かに2日前から生理は始まっていてもうすぐだな、と思っていたけれど、まさか今日に来るとは……。大抵私が生理痛で悩むのは3日目。たぶん、今日にきたのは急激な気温の変化によるものだと思う。

「大丈夫？ 千代ちゃん。はい、カイロ」

「……痛くない？」

みいちゃんは大腿骨のすぐ内側にある血海という場所を押してくれている。本当に急にきたからすごく痛かったけれど、マッサージをしてくれているみいちゃんのおかげでマシになってきた。

「ごめん、ありがと……」

甲斐甲斐しく世話を2人に対してお礼をいいつつ、やっぱり持つべきものは友達ね、と思う。

「千代ちゃん、お風呂どうする？」

「今入れないようなら……私たちも、あとで入るけど……」

そう聞いてくれる2人に嬉しさを感じながらも首を2度振った。この鈍痛が続くのも結構長くなりそうだし、後でお風呂に入ろうとするすごく遅い時間帯になるのは目に見えている。それに、なんだか生理痛があった日に誰かと一緒に入るのは妙に気恥ずかしかったりするのだ。

だから私は、後で一人で入るから、と言って痛みをこらえながらぎこちなく笑った。

「わぁ……広い」

私は感嘆の声をあげる。

痛みも収まってきたし、お風呂行ってくるわね、そう2人に告げてあたしは部屋を抜け出してきた。

誰も、いない。

ほとんど最終の時刻に入ってきたせいか、やはり人は1人もいなかった。

身体をさっと洗い終わると、ちゃぽんと音をたてて湯船につかる。温かい。

すすいと子供みたいに泳ぎたくなるけど、子供じゃないんだから、と自分に叱責。

完全に貸切風呂。

こんな経験初めてでなんだか得した気分。

私は頬を緩めて、いくつかのお風呂を回ってみる。ジャグジー。サウナ。流れるお風呂。さすがに生理にはお腹が冷えるのは禁物だから水風呂には入らなかったけれど。

「あれ？ あれは……」

露天風呂とかかれた看板を発見する。そしてここからは混浴なため水着に着替えてください、とのお達しも。ゆつくりと近づいて入ると、そこは脱衣所になっていて、そこで水着に着替えられるらしい。私はゆつくりばれないように体をタオルで覆いながらこっそりと中を見る。

誰もいない……。

やはりこの時間帯は誰も入りにこないようだった。それを好機だと思い、あたしは入り込んだ。

男湯のほうの脱衣所のドアをみる。これだけ静かなら、男湯と脱衣所の間にもドアがあるから、もし誰か入ってきてても、きっとその物音で分かるだろう。そう、私は安心した。ようするに私は露天風呂に入りたかったのだ。

小さく音をたててお風呂に浸かる。

お湯が肌にぴりぴりして気持ちがいい。昔から露天風呂というも

のが私は好きだった。家族で温泉旅行によく行くからそういう趣味が出来たのだと思う。

ずっと浸かっていたいかも……。

そんなことを思い始めたときだった。

——カチャツ。ボタン。

小さく、物音が聞こえる。男のほうの脱衣所からだ。

ど、どうしよう……!？ 早く、早くあがらなきゃっ。

「……っ」

そう思ったとき——また先ほどのような鈍痛が下半身に響く。ざぶざぶと手だけは動かすが湯をかくだけで起き上がれる気配はない。すぐにガララ、と音をたてて横開きのドアが開き、男の人だと思われる体格の人がこちらに近づいてくる。

どうしようどうしようどうしよう。

「……いっ」

また鈍痛。私は泣きそうになりながら周りを見渡す。何も今の状況を打破出来るようなものはない。叫べば良かったのかもしれない。けど、羞恥と恐怖がそれを邪魔していた。

その時。

「……あれ、千代」

聞きなれた男の人の声が広い露天風呂一帯に響き渡った。それは若干驚いたような声。

「り、……お、クン？」

私が目にしたのは、腰にタオルを1枚だけ巻きつけた李緒クンだった。

(9) 着替え 着替え 生着替え……!?

修学旅行の食事中。

ケンちゃんに軽く柔道の技をかけられながら初めに感じたことは『セクハラ』だった。例えば端からみたら男同士でも、中身は男生活1ヵ月半ちよつとの、まだまだ男になりきれていない思春期真っ只中の女の子。男の子が密着している状態なんて男女の境が出来てからこれが初めてで、やっぱり少しだけ羞恥心を感じたのは言うまでもない。

幼稚園くらいときまではそんなこと全く気にしなかったけど、男と女ってのは異性なわけで。当然肌を見せるのは将来の相手だけにしたいわけで。

(お風呂、どうしよう)

部屋はぱっとだけ見たが、確かWCと書かれたところが一つだけあっただけ。

……ここの旅館のトイレって、ユニットバスだったっけ？

「やっぱない、かあ……」

現実を知らされてあたしはドアの開いたトイレの前で深く肩を落とす。

備えつけのお饅頭を食べながらこの旅館の見所などが書かれたパンフレットを見てみると、ここは温泉が有名な旅館、らしい。泡風呂、流れるお風呂、サウナはもちろん、ジェット風呂、薬風呂などもある。そして大人気なのが北海道の自然が作る絶景を楽しむ露天風呂。だからかホテルによくある小さなお風呂はなかった。

……入りたいけど、どうすればいいんだろ。

「何かいいのあったか？」

こくのあるお茶、要するにあたしからしたら結構苦めのお茶を平然と飲みほしながら相良が左上から問いかけてくる。

「へ!?! ……あ、うん、お風呂楽しそうだなって」

不安要素のほうが限りなく高いんだけどね。

あたしは湯のみ片手に中腰の相良に向かって答えた。

「ふうん、流れる風呂まであんなのか。風呂ってよりプールみてえ」
右隣から同じく中腰になったケンちゃんが食べかけのお饅頭片手にそう言った。

「おッし、競争しようぜッ」

ケンちゃんがぐっと拳を握る。

「お前な子供じゃないんだから」

相良が呆れたように頭を抱えた。

「負けんの怖いのか?」

ふふんと鼻を鳴らし手を横にやるお決まりのポーズ。その様子を見て相良はかちんと来たようで、

「……上等。ほえ面かいてもしらねえから」

パチパチとあたしを挟んで睨み合う2人。ケンちゃんが負けたらジュースおごりな、と言った。

……楽しそー。

中学のときにあった水泳の授業、結構好きだったからやりたいなー、なんて思ったけど。

でも、全裸でやるなんて絶対無理、だよなー。恥ずかしさで悶え死ぬ。

「じゃあ、そろそろ行くか?」

そう言っただけで相良が机に手をつけて立ち上がる。そうだな、とケンちゃんもつられて立ち上がった。

どうしよっかな、どうやって断ろうか、そんな思いを抱えつつあたしは心中で思いつき頭を抱える。

（おまえらと一緒に入りたくない? それ、失礼でしょ。いや、でも、うんと……）

少し時間がたった後パンフレットから視線を上げると――あたしの思考は止まった。

(……………はい?)

目が点になる。目線の先にはあらかじめ用意してあった替えの洋服を取り出して、今着ている服を脱いでいく相良とケンちゃんの姿。……………。

……………?

……………!!

「ちょ、ちょっ! 馬鹿っ。おまえら2人ともいきなり何やってんの!!」

あたしは自分の顔が真っ赤になっているのを自覚しながらパンフレットを目の前にかざした。

(着替え着替え生着替え……………!?)

パンフレットの奥から2人の声がする。

「は? ここで着替えといったら後で楽じゃん。着替えもっていく必要ないしさー」

何言ってんだこいつは、とケンちゃんが困ったようにいう。

「風呂出た後に洗い物持って歩くってのもやな感じじゃないか?

ま、結局タオルとかは持って帰らないといけないんだけど。持ち物減らせるし」

だよなーと2人で頷きあう声が聞こえる。

ここでも、…………男女の差がでたかぁ、と思う。豪気というか大雑把というか…………。

そういえば、中学のとき男子の服がお風呂に入る前なのが変わっていたのって、着替えてからお風呂入りにいったってことだったんだ…………。

(それなら、合わせなきゃ、だったり…………?)

つい視線を下げて胸元を見る。

どうせ、まったいらだし、見られても、そんな…………。

あたしは心中で盛大にため息をつきつつ、パンフレットを胸元に下げていく。そしてちらりとパンフレットの端から見たのは、相良の締りのいい上半身。生身の。

(って!?)

思わず手に持っていたパンフレットを落とす。自身の頬が赤くなっていた以上に真っ赤に染まるのを確認できた。

どうやら過去を振り返っている間にも2人はズボンを脱ぎ去っていったらしい。

(な、なななななな?)

そして、腰に手を当ていわゆるガラパンと呼ばれるものを一気に腰から――。

(――って!?)

「う、あ……!?!」

「ン?」

ケンちゃんが手を腰に当てながら疑問の表情を見せる。それと同時に、あたしの身体は自然と動き出していった。

返事も待たずにあたしは回れ後ろすると、早足でトイレに駆け込む。そして、ドアを閉めて扉に鍵をかける。ぜえぜえと息を吐きつつ、胸に手を当てた。

(入る前からこれとか、……む、むむむ無理に決まってるじゃんっ) あたしは胸に手を当てながら必死に鼓動を押さえつつ、へろへろと蓋の閉まった洋式便所に座りこんだ。

「どうした? 急に気分でも悪くなったのか?」

扉の奥からそう相良の声が聞こえる。

(悪くなったというか! 悪くされたんです!)

そう叫びたいのをこらえる。

「そっ、んなどころっ。えっと、何ていうか」

無理無理無理、絶対無理。いくら男の裸なんて不本意にも自分の身体で見慣れたと言っても、それが他人に通用するとはとても思えない。というか16年も女で暮らしてきたあたしにとって通用するはずもないわけで。

(……ぜえええったい、無理っ!!)

「相良、ケンちゃん……っ」

うん？　なんだ？　と奥から声がするのが聞こえたから、あたしは言う。

「悪いけど、2人で行ってくれる？　俺、ちょっとお腹壊したみたいで」

「うん？　じゃあ待っとくけど」

「そー、そー、別に急いでるわけじゃないンだしさー」

「だ、だめ！」

出来るだけしんどそうな声で言ったのに、やっぱり待っていてくれる気らしい。持つべきものは友達だね、って話しただけ……違う！

「お、俺ちよっと長引くほうで……その、恥ずかしいし先行ってくれたほうが嬉しいっていうか」

乙女に何を言わすんですか奥さん。っていうか、恥ずかしいのはかなり本場で、今あたしの頬は真っ赤に染まっている。

「ふうん……？　じゃあ、先行ってるから、治ったら来いよ？」

「へ？　待っとかねえの？」

「いや、だってさ、お前だって下痢してる時なんて一緒にいてほしくないだろ？」

「あ、そーか。ンじゃ、先行っとくな」

「う、うううんっ」

恥ずかしい単語を直に言ってくる相良にまた悶絶。

いや、もう、こういう言動にも慣れたつもりだったんだけど、ね……。

重くため息をつきつつ頭を抱えていると、2人の足音とともにがちやりと玄関の閉まる音がして、静寂が訪れた。

（まあ、これでお風呂の問題は解決、かなあ……？　後でこっそり入りに行けばいいし）

旅館のお風呂が閉まるくらいの時間帯ならたぶん、人も少ないだろうし、少なくとも同年代の人には会わないと、思う。おじいさんとかならまだ見ても見られても大丈夫……だし。

改めて考えると、咄嗟にトイレに逃げこんだだけだったのに恐れていた事態だけは避けられたみたいだ。

「さてと……2人が帰ってくるまで何しようかな」

あたしはそう呟くと、赤くなった頬を叩いてこっそりとトイレのドアに手をかけた。

（うっわ、たっかそー。あたしが一生かかっても返せないくらい価値あるんだろなー、こんなの）

あたしは今、アイヌのコシヤマインって人（正直あたしも説明ボード見なきゃ誰、って感じなんだけど、六百年くらい昔、和人、いわゆる昔の日本人と戦ったときの首長やってた人らしい）が生きてた時代からある振袖みたいなのが飾られているガラスケースと睨めっこしていた。

（……なんだろう、威厳みたいなのが）

ぐっと目を凝すと、なんだか威厳が漂ってきている気がする。やっぱ年季が入ってる物は違うね、うん。……なんて、全然知識もないくせに思ってみる。

あの後、他の男の子達の部屋も回ったけどもうお風呂でドアに鍵がかかっている部屋がほとんどだった。それは先生が、入浴時間はこれくらい、と指導していたからだろうと思う。入浴時間が決められているのは、人数が多いから同時にしなきゃからかな？ まあ、そうは言っても団体で入るのは駄目なだけで個人的に入りたい人は入ってもいいらしいけど。

相良達が帰ってくるまで暇なあたしは、もぬけの殻だったフロアを抜けて女の子達がいるフロアに来ている。

誰かいるかな、話せるかなあ？

そんな思いを持ってきたのに、あたしは何故かエレベーターの前にある自動販売機の横にあるガラスケースの前で立ち尽くしていたわけだ。

（……うーん、こんなとこで立ち止まってもしょうがないし、他、

行こうかな)

そして、そんな風に頭を切り替えてガラスケースから目を離して誰でもいいから話しに行こう、なんて思ったとき、一人の少女が目の前に現れた。光と同じくらい小柄な背丈で綺麗な腰までの長い黒髪を持つ同じ世代くらいの少女。

「あれ、みいちゃん」

「李緒、クン……？」

呼びかけると、みいちゃんの肩が揺れて、下を向いていた顔をすぐ上に向けてあたしを見つめた。すると艶っぽい髪が目に入り、鼻腔をシャンプーかリンスのいい香りがあたしのほうまで流れてくる。「もうお風呂入ってきたんだ？ いい香りするね」

「あ……うんっ」

みいちゃんは小さく頷くと、嬉しそうにはにかんだ。

いやはや喜ばしきことかな。男の姿であるあたしにこんな友達感覚な笑顔を向けてくれるとは。みいちゃんも男に慣れてきたということかな？ それとも、男女ペア組んだりするとき誘ったのが効いたのかも？

「李緒クン……は？」

「や、まだなんだけどさー。今だと混んでるし、人少なくなったら一緒に入ろうってトモダチが言ってたから相良達には悪いけど一人抜け出してきたわけ」

嘘です。逃げ出してきただけ。

これが部屋を出る前に誰かに会ったら言おうと思っていた口実だ。「そうなんだ……。あのね、お風呂……すごかったよ。ジャグジーとかも……あってね。それから……」

そのトモダチはどうしたの、とか聞いてこないみいちゃんに感謝。「へえ、そうなんだ、楽しみ。みいちゃんはどれがお気に入りだった？」

「私は、……えっと、えっと……」

ゆっくりと考えながら話してくれるみいちゃん。

たまにこういうたどたどしい喋り方をしてる子を苦手に思う人がいるけど、あたしは大好き。こうやってみいちゃんと話してると、すっごく癒される。

「おみあげ、……お父さんに、何買って帰ろうかな……って」

「それ、確かに迷う。お母さんとかならキーホルダーとかで喜んでくれそうだけどお父さんはねー。今風のストラップつけたお父さんの携帯とか思いつかない」

そうやって話していると、いつの間にか近くにあった長いすに座って話しこんでいることに気付く。やっぱり女の子同士が話しだすと2、30分なんて一瞬だなあ、なんて実感。

「……あっ」

その時、話しの途中でみいちゃんが急に小さく声をあげて慌てたように立ち上がった。

「え？　どうかしたの？」

「あ、あの、戻らなきゃ」

そういうとみいちゃんは先ほどの自動販売機の所まで行って、焦ったようにお金を入れた。そしてボタンを押してはジュースを取り出す動作を計3回。

「……あれ？」

あたしはふいに疑問に思っって首を傾げる。

なんでみいちゃん一人なんだろう。まさかあたしみたいに逃げ出してきたわけじゃないだろうし。しかもジュース3つ……？　パシリとかはうちのクラスに限って絶対……。

「どっかしたの？　急いでたなら呼び止めてごめんね」

そう謝ると、ジュースを胸に抱えて首を振った。

「ち、違うの。……忘れてて、別に、急いでるわけじゃ……なくて。ただ、同じ部屋の子が……気分悪くなったみたいだから、その子の方と見てくれる子の分買ってこようと思っ……」

「えっ。みいちゃんの部屋って光と千代だよね」

「あっ」

「……見に行ってもいい？」

数時間前あたしと話してたときは2人とも元気だったはずだ。一体どうしたんだろう。そう思って問うとみいちゃんは何やら口ごもって千代ちゃんが体調崩して、とだけ言った。

「部屋は？ 行ってもいいよね」

「それは………だめ」

せかすように言うのとたっぷり時間をかけてからみいちゃんは困ったように、けどしつかりと首をふる。

「でも……」

「たいしたことじゃないの……ただ……」

また口ごもると、意を決したようにごめんね、それじゃあ、とジューズを持ちにくそうに胸にだかえて歩き去ってしまった。

（……気温差のせいで体調でも崩したのかな？ けど、何で部屋入っちゃダメなんだろ。あたしだって心配なのに……）

怪訝に首を捻りつつ、もうそろそろ相良達部屋に戻ったかなー、と考えながらあたしは自分達の部屋に戻った。

おっきなお風呂でシャワーを頭からかぶりながらあたしはぼそりと呟く。

「あー……もう、疲れたあ……」

ケンちゃんがお前が行くンなら俺ももう一回行こうかな、とか言うから本気で焦った。心中ではかなり冷や汗をだらだら流しながら温泉は2回入ると身体に毒なんだよ、なんて誰にでも分かる冗談を言う、そうなのか！？ なんてころっと騙されたから、言っただけがびっくり。相良は何も言わずにいてくれたから良かったんだけど……ねえ。また変なこと思われてないだろうかだけが心配だ。

がしがしともうすっかり短くなってしまった髪に乱雑にリンスをつけながら、こんなでっかいお風呂1人ではいるなんて何だか贅沢だけど勿体ない気がするなー、なんて寂しく思う。

（まあ別にいいんだけど。……裸見られるよりマシだね）

誰もいなかったのは好都合だった。脱衣場に入るとき、おじさん達が出てきたからかなり驚いて額に汗が滲んだけど、中に入ると誰もいなかったのだから最後だったんだ、と安堵のため息。

身体を洗ってお風呂に入ると早速泳ぎ出す。クロールが出来るほどの深さはないのですいすいと平泳ぎで。

（何かカエルみたい……でも背泳ぎはかなり抵抗あるしなあ……誰もいないんだけど。やっぱり、ねえ……？）

ていうか今更ながら泳ぐくらいしかやることないんだよね、ほんとに。中学の修学旅行のときは楽しかったんだけどなあ。あの時は光胸小さかったからからかえたし……そういえばできたの中3頃からか。ほんと、大きくなってお姉さん感激。……いや、まあそんな軽いじえらしいとセクハラ発言は置いところ。

「ぶはっ」

息をいっぱい吸って今度は泡風呂の所に行って座る。けど、すぐに立ち上がって腰に無地のタオルを巻きつけた。

（誰も来ないうちに、もう、出ようかなあ……）

そう思って肩をならす。

その時。

『露天風呂、水着があったら……入れたんだけど。……ちよつと残念』

そんなみいちゃんの言葉を思い出して外に繋がる混浴入り口と書かれる看板を見た。

（そういえばパンフレットにも大人気は北海道の絶景が見れる露天風呂って書いてあったっけ）

立ち上がって回りを確認しつつそこまで向かう。

（まあ、せっかく来たんだし……。寂しいだけのお風呂に潤いを……！　なんて）

あたしは馬鹿な考えを持ちながら露天風呂の前の脱衣所を開け、露天風呂へ続く横開きのドアを開く。

（誰も、いませんよねーつと……）

そこは結構広くて、湯気のせいか奥が曇っていて見えない。

（わお、きれいっ）

その替わり外の風景が光でライトアップされていてとても綺麗。あたしは上機嫌になりながら外を見つつざぶざぶとお湯の中を進んだ。

そんな時だった。

（へえ、なかなか絶景じゃ……え！？）

誰もいないはずの湯船の先には人の姿。

（やっぱ……！ 早く出なきゃ）

そう思ってから後退しようとしたとき、

「……いつ」

何だかくぐもった声が聞こえた。それはまさに苦悶という声で、興味本位、ただそれだけでその人の顔を見た。

「……あれ、千代」

意外にもそれは見知った綺麗なお顔。

「り、……お、クン？」

愛すべき大事な友人、千代の姿だった。あたし達の間に無言の間が流れる。いや、だって、考えてもみてほしい。混浴なのに2人ともほとんど、千代にいたっては濁り湯になってるから分かんないけどたぶん裸で、気まずいというか何というか。まあこちらとしては女の子の裸なんて本当の意味で見慣れてるから気にしないとしても、千代のほうは違うだろうし……。

千代を見ると口を開いたり閉じたりしている。きっと何か言おうとしてけど言葉が出てこなくて、みたいな感じなんだろうと思う。

「えっと……風景、綺麗だね？」

だから、あたしは当たり障りのない、今更どうでもいいことを口に出した。

「……っ」

あたしの目には驚きの顔が羞恥の顔へ一気に変化するのが見て取れた。

き、気まずい。

どうして千代がここに、とか。なんでこの時間帯に、だとかはどうでもいい。一向に待っても返事が返ってこないことが問題だった。あたしは後ろを向いてぼちゃりと音をたてて湯船の中に座り込む。「や、別に覗いたりとか、そんな気は全然なくて。今誰もいないと思ってる。……ごめん、やっぱり気分悪いよね」

言い訳っぽくなったのでざばんとお湯に顔を半分つける。肌がピリピリしてちよつと痛かった。

やっぱり、許してくれないかな……向こうは男に見られたって思ってるんだから。こういうの男に見られてすっごく嫌がる女の子と、あんまり気にしない女の子がいるけど、千代は絶対前者だよな。

どうしたら機嫌治してくれるんだろう……。

そんな風に思いつながら次に言う言葉をさがしていると、

「……別に、いいわよ。これくらい。私も悪かったんだし、おあいこ」

意外にも千代は許してくれたようで、背に声をかけてくれた。

「ほ、ほんとっ!？」

感激のあまり振り返るとばしやりとお湯をかけられる。目に入ってちよつと痛い。千代は呆れた声をして言った。

「もう、振り返らないでよ……。あのね、これで私に非がなかったらこんなもんじゃ済んでないんだからね」

「……だろうね」

きっと千代は今あたしの背をジトメで睨んでいるだろうと思う。

そしてまた無言になる。けど先ほどのように気まずい空気はなかった。だから、一つ疑問に思ったことを口に出してみる。

「千代はさ、どうしてこんな時間帯にお風呂入ってるの? ……あ、そういうえば体調悪いって聞いたけど……」

「誰に聞いたの?」

「みいちゃんに。けどどうしてか教えてくれなくて……。あ、でも偶然会って、誰が体調悪いのか聞きだしたのかは俺だよ?」

何やら秘密にしてそうなのでいちおうみいちゃんは悪くないことを説明しておく。なんだか千代の声、今刺々しかったしね……。

「……秘密。それに李緒クンこそこんな時間帯にどうしたの？」

「何やら重い声で返す千代。」

「俺も、秘密……」

痛い所をつかれたので黙っておく。今さら友達に、なんて言えないしな……。2回目入りたくなったなら一人くらい友達連れてくるだろうし。

ぱちやりぱちやりと指先でお湯を作って波紋を作る。

また気まずい雰囲気。……話題がない。さっきあんなこと聞かなくて良かったな、なんて今更ながら思う。そりゃあ、話題くらい作ろうとすればいくらでも出来るんだろうけど、こんな状況こんな雰囲気で能天気話せるくらいあたしも場馴れしていなかった。

「私、もう出るわね」

やっぱりこういう気まずい雰囲気になると人はそこから離れようとするわけで。

ん、とあたしは返事は返事すると、背後でちやぶ、と静かに音が聞こえた。たぶん、立ち上がったのだろう。

「……振り向かないでよ」

「分かってるって」

苦笑する。

たぶん振り向かないと分かっているんだろう。それと刺々しい言い方になったのを後悔してる。ちやぶちやぶと後ろから聞こえる音を聞きながらあたしも出ようとして立ち上がった。

その時。

「——いっ……きゅっ」

何……!?

苦悶の声と悲鳴、その声で思わず振り返ってしまい、あたしの目に映ったのはバランスを崩して今にも倒れに仰け反った千代の白くそれでいて健康的な肢体。

地面はでこぼこの石畳。

間に合うだろうか。あれは、こけたら怪我しそうだよね。そう思
いながらもお湯を掻き分けながら走る。

地面に倒れていくのが眼前をスローモーションのように流れてい
た。

間に合え、と願いながら手を出すと――。

「つぶな……」

ぎりぎり、あたしの手の中に納まる柔らかい肢体。千代を見ると
ぎゅっと目を瞑っていて迫っていた痛みを今か今かと待ち続けてい
るのが分かる。

「もう、大丈夫だから……」

そう言うと、ゆっくりと千代の瞼が開いていって、あたしの目と
合った。

「……あ」

それだけ口から産声のような声をだすと、急に千代の顔が真っ赤
に染まる。

「ありが、と……。あ」

小さくお礼を言った何やら千代はわなわなと震えて、もしかして
怖かったのかな、なんて思いながら頭を撫でると千代の動きが止ま
った。

「――え？」

千代は体制を立て直すと思いきり――あたしの頬を叩いた。

後で気付いたけれど、あたしは千代を受け止めた拍子に彼女の身体
に巻かれているタオルを取り去っていたわけで、それで偶然、直に
彼女の身体を見てしまったわけで。

――パッチーンッ！

小気味よい、あたしの頬から発せられた音がお風呂中に響き渡っ
た。

「……どうしたんだ？ 李緒。その……頬」

「うわッ、手形くつきりじゃん!？」

部屋に帰ってそうそう、2人にそう言われた。

「……そんな酷い? これ」

そう言うのと洗面台行って鏡でも見てこい、と言われる。あたしはそれを聞き気分をまた沈めて洗面台のドアを開けた。

「うぁ」

そんな声をあげてしまうほど、あたしの頬にはくつきりと綺麗な赤色の花が咲いていた。

結局、あの後早々と去っていった千代を目先に、あたしは頬の痛みに苦しんでいた。

——やっぱりどんな形であれ、同意なく男が女の痴態を見るのはいけないことらしい。あたしはそれを修学旅行1日目です分に味わったのだった。明日千代、機嫌直してくれたらいいなあ……。

(10) 似たような台詞

ちちちちと外から心地よい鳥のさえずりが聞こえる。身体には柔らかな寝心地のいい布団の感触。その温かくて落ち着く布団のおかげで、今日は夢も見ることなくすつきり快眠。

ぱちりと目を開けると、視線の先には行儀よくくずれのない布団に眠る、少女のような少年の姿が見えた。

(んー……ケンちゃん？　そういえば……)

瞼を2・3度開け閉めしつつ、頭を整理しながら考える。

(そういえば、今って修学旅行中なんだっけ……)

整理し終えてのんびりとしたあたしは、起きたまんまの格好でじつくりと彼の寝顔を堪能する。

昨日の飛行機の中でも見たけど、こうしてケンちゃんのだけな中世的で可愛らしい寝顔を楽しんでいると、いいなあ、と思ってしまふ。やっぱり性別が変わっても、昔から使っているこの瞳には美少年の寝顔は心臓にいいらしい。……安らぐ。

(いたずらしちゃおっかなー)

そして、安らいだのと同じくらい意地悪な心がうまれた。しょうがない、こんなに可愛いんだもの。

例えば、頭に可愛らしいリボン付けてみるとか。例えば、寝てる間にこっそり化粧してみよう、とか。うん、例えば。

考えれば考えるほど口元が綻んでくるのが分かる。

けどあたしが、うんやろう、早速やろうと決行を決意したとき――

(――ん？)

ふいに感じる身体の違い感。身体が微塵も動かなかった。

(あれ、あれ？)

身体をあげようとも、ゆすろうとも動かない。しっかり手首は動かせるくせにその腕が上がらない。足なんて先くらいしか動かせな

い。おまけに首もほとんど動かないから回りを確認するすべもなかった。

「……ちよっ……あれえ？」

情けなく小さな声あげてもがくけど、身体はいっこうに動こうとはしない。

まさかこれが金縛りってやつ……？ まさかまさかまさか。

恐怖ですつと背筋を凍らせた、その時。

「うえっ……！？」

急に首元に何か温かい空気のようなものがすうつとよぎって、怯む。ばたばたと身体を動かすことも忘れてぞくぞくと全身を震わせてしまった。

「……あれ、り、お？」

声に合わせて視線をまたケンちゃんに戻すと、女の子と同じくらい睫の多い瞼が開かれていて、彼は眠そうに腕で目元を擦っていた。

「……………あぁ、はよ」

初めぼけつとあたしの顔を呆けたように見ていたケンちゃんだけど、すぐにここが旅館だということに気付いたようでゆっくりと間を開けてから挨拶してくる。

「あ、うんおは」

——きゅっ。

その瞬間、金縛りが強くなった気がした。

「っ！？」 ケ、ケンちゃん助けてっ」

得体の知れない恐怖に挨拶も忘れて、またあたしは身体をじたばたさせ始めケンちゃんに助けを求める。

「はぁ？ ……あれ、お前。うわッ……」

うわって何ですかー！！？

今風に整えられた眉毛を中心に寄せて何故だかあたしを見てすごく嫌そうな顔をするケンちゃん。ケンちゃんが朝っぱらから見たくないもン見ちまった、と言って目を逸らす。

見たくないもの？ 幽霊？ 幽霊なのっ！？ そんな馬鹿な……

っ。

「んー……」

「へ？」

けど、急に後ろから温かな空気と一緒にくぐもった音が。その瞬間体を縛る何かがゆるりと軽くなる。

ちや、チャンス！

それを好機とみたあたしは身体をころりと回転させて――。

「って、おま、相良！？」

「ん……？ んー……」

あたしの目の前にいたのはケンちゃんとはまた一味変わって男らしく整った端麗な容姿をもつ少年。彼は眠気まなこであたしを見つめている。

どうやら相良があたしに全身を絡ませて寝てたいみたいだ。それにしても、美少年の寝顔は心臓に良くても美男子の寝起きは心臓に悪いらしい。例えば恋愛のそれではなくても、胸がばくばくと跳ね上がって痛いほど。

「はなれ――」

――ぎゅうううっ。

はなれて、と言う前に寝ぼけているらしい相良があたしの肩に手をかけて引き寄せてきた。

「っっっっ！？」

何か悲鳴のようなものを叫びかけたけど、顔が相良のちょうど胸の位置にいつてしまっていてむがむがとしか声を発することが出来ない。

こ、こここんな状況……！

相良の男っぽい匂いがあたしの胸いっぱいに広がっていく。

その時、今度は頭の上からうわ言のような声が聞こえた。

「う、……ん……どうし……好き……に……」

え……？

頭に息がかかったのと同時に聞こえた声は、これだけ近づいてい

るあたしにしか聞こえないくらい小さな声。おそらく寝言。

相良って――。

「――わわっ」

その意味を考えるよりも早く、誰かの手によって相良の手が外され、ずずつとあたしの身体が引き出される。

「ツたく。男が抱き合ってる姿なンてみたかねえツつの」

「あ、ありがとー……」

胸に手を当てて動悸を押さえながらお礼を言う。

……さすがケンちゃん。柔道部に所属しているだけあって、ちっちゃくたって力持ち。

ケンちゃんは呆れ顔で相良へと近づくと、

「おい、相良！」

ぺしんとまだ寝ぼけたまなざしで未だ手を伸ばしてあたしを引き寄せようとする相良の頭を叩いた。

「んー？ ……ああ、ケン？ おやすみ……」

一度は起きる。けれど、ケンちゃんの呼び声もむなしく相良は本格的に目を瞑った。

「おいッ！ くそ……！」

その態度に少し苛立ったのかこれでも喰らえとケンちゃんが寝技。

「……………んん」

が、相良はそのまま、うとうととしてついには眠ってしまった。

「くッそーッ」

「はは、は……」

……相良がこんなに寝起き悪いとは知らなかった。そういえば、あたしの布団に転がり込むなんて、寝相も悪いみたいだし……何だか意外。

そう思いながら、もう捕まらないようにと相良から一步引いたあたしだった。

朝食はバイキング。

いろとりどりのお腹もち軽そうな料理の数々が置かれた中心にあ
たし達3人が座る丸テーブルがあった。

そこには頬が蕩けるほどに美味しいフルーツパイをほおぼるあた
しと、不機嫌そうにかぼちゃスープを音をたてて飲むケンちゃん。
そして困ったように笑ってコーヒーを飲む相良の姿が。

「お前寝起き悪すぎッ」

「悪いって……。でもさ……。俺も起きたとき関節結構きてたんだか
らお互い様じゃないか？」

「おきねえお前が悪い！」

怒れるケンちゃんに苦笑しながら相良はブラックのコーヒーを見
惚れるほど優雅な動作で飲み込む。彼の目の前には少量のハムとス
克蘭ブルエッグ、サラダ。そんなブルジョワな朝食を味わってい
る彼は、今朝のあの小さな事件を起こした張本人にはとても見えな
い。

あれからケンちゃんがいくらゆすつても起きず、技をかけても起
きず、数十分たってから、自然に起きたときにはケンちゃんの
柔道部としてのプライドはずたずたにされていた。あんな意外な相
良の一面を見ていると、少しだけケンちゃんに同情するあたしがい
る。

低血圧、恐るべし。

「まあまあ……はいこれ、ケンちゃんの好きそうなウインナ。これ
で機嫌なお」

「好きそうッてなんだよ！」

宥めようとしたつもりが火に油を注いだらしい。けど、なんだい、
とフォークにささったウインナーを口に入れようとする。

「……食べるけど」

「ぷっ……」

思わずその正直な台詞に噴出すあたしと相良。笑うなツと怒りつ
つケンちゃんはフォークからウインナーを口で奪い取った。

「ははっ……にしても、相良ってあんなに寝起き悪かったんだね。」

知らなかった」

「ああ、昔っから寝起き悪くってさ。朝はいつもお袋に起こしてもらってたんだ」

「……どうやって？」

「それはあんまり言いたくないな」

「あんだよそれ」

すごく気になる。

けど、結局相良は口を割ろうとはしなかった。きっと並々ならぬい事情でも？

そんな風にいろんなことを言いあいながら楽しく話していると、ふっとあたしは思い出した。

「そういえば相良、寝言言ってたよ？」

「ふうん？ ……俺、何て言ってた？ ってか俺って寝言まで言うんだな……初耳」

「ママとかなら笑えるんだけどな」

相良の顔が少しだけひきつる。本当にそうならお腹を抱えて笑っただろうな。

「それは……ないない。それで？」

そんな相良の表情にあたしがちよつと笑いながら、

「それがさー」

言おうとして詰まる。……これって言っていることなの？

プライバシーっていうか、だって聞いた内容が内容だったし。それにケンちゃんもいるし……。

「いちおう聞いとくけど言っているの？ プライバシーっぽいよ？」

「……ん？ ああ」

頭にクエスチョンマークを浮かばせながら相良が頷いた。夢、覚えてないんだろうか。まあ覚えてるほうが珍しいかもだけだね。

せかすようにケンちゃんが、勿体ぶらずに早く言えよ、と言う。

「あのさ。『どうして。……こんなに好きなのに』って言ってた、気が……する」

言った瞬間、相良の表情が一瞬凍りついた気がして、あたしの声の勢いもどんどん小さくなっていく。

や、やっぱり何か勘に触ること言っちゃったかな？……。

「ご、ごめん。言っちゃ駄目だった？」

そうあたしが謝ると、相良がいや、と苦笑して首をふった。

「へえ、相良ッて好きなやついたのか。全然気付かなかったけど。誰だよ？　うちの学校のやつか？」

男の子でも他人の恋愛ごとには興味があるらしい。さっきの相良の表情の変化に気付かなかったのか、面白そうにケンちゃんは聞いた。

「まあ、そんなところ」

相良が手元のサラダを口に運びつつ、苦笑いして答える。相良の好きな人……好きな人。

あたしの頭に浮かぶのは一人だけ。

好きな人ってまさか……。

「……もしかして、光じゃないよね……？」

つい、ぼろりと親愛なる友人のことを想って聞いてしまった。

「ん？　違うけど。なんでだ？」

「え、えーと、やっぱりクラスで一番可愛いのは光になって思うからそれにああ、そうか、と相良はあっさり納得。

こ、この鈍感！

一瞬叫びたくなるのをあたしは堪えた。

「もう告ったのか？」

興味津々にケンちゃんが聞く。

「いや、まだだけど……」

「告れば？　お前顔だけはいーんだから、騙されるやつもいるって」冗談交じりにケンちゃんが返した。それにあたし達の顔を一瞬見ると俯いて、相良は答えた。

「……もう、いいんだよ。どうせ叶わないだろうしな」

……あれ？

ちまちまと手元のオレンジジュースをゆつくりのみながら思う。
似たような台詞、少し前に聞いたことがあるような……。

「はぁ？ 告れよ。告らなきゃ分からねーだろー？」

まただ。デジャヴってやつ？ いや、でもそうじゃなくて……。

「いいんだって。それよりさ」

急に別の話題を話し始める相良。

「……へ？ ああ」

やっとその相良の不自然な変化に気付いたのか、ケンちゃんがそれに困惑気味に返している。

……なんだっけ？

あたしはごちゃ混ぜになった頭を整理しつつ、食べかけのフルー
ツパイを口元に運んで、ぐいっとオレンジジュースで飲み干した。

「千代、あのさ」

「ご、ごめんなさい。ちょっと私今からみいちゃんに話しがあるか
ら……」

自由時間になったと同時に千代に話しかけると、彼女はするりと
あたしの横を通りすぎてみいちゃんのところへ行ってしまった。

班行動の火山見学も、賑やかな白老ポロトコタンでの踊りも終わ
り、今は完全な自由時間。

千代に昨日のこと、不本意にも痴態を見てしまったことをもう一
度謝ろうとしたらただけ……現在避けられ中。本当は、光
のことも、話しあいたかったんだけどなあ……。

「李緒、……昨日千代ちゃんに何かしたの？ 昨日の夜からあんな
感じなんだけど。……何だか悩んでると思ったらクッションに顔を
ずめたりぶるぶるってしたりして」

近くにいた光が心配して何ごとか聞いてきてくれる。

「うんー？ いや、それがさあ」

かくかくしかじかうしうしうまうま。

そんな風に言って小さい頃に見た探偵ホームズの幼児向けアニメ

みたいに伝わったら楽なんだけど、なんて思う。そう言えばあれって題名なんだっけ。犬の名探偵が主人公で……結構面白かったんだよねー。祐次がすごい好きだったはず。

閑話休題。

微妙に小さい頃の思い出に浸りながら昨日の出来事を光の小さく形のいい耳元で話した。

「ええ！　じゃあお風呂一緒に」

「ひ、光っ。声大きいっ」

ぱっと光の可愛い唇を手のひらで押さえる。

（千代に伝わったらなんて言われるか……）

遠くでみいちゃんや、女の子たちと話している千代を見ながら小さくため息をついた。

あたしが千代の立場だったら、絶対ばれたくないしね。

「ん……ふっ……」

一つ、息をつきながら考えていると、いつの間にか真っ赤な顔であたしを見上げる光の姿。そんな姿にか、可愛い、とまた心が躍りだすのだけど、それは秘密。

呼吸がしにくいんだろうか、顔を赤くしながらむぐむぐと光はあたしの男っぽくなってしまった大きな手のひらにこそばゆい息をかけながら、あたしの腕を両手で軽く押し返した。

「ご、ごめん」

強く口に押し付けすぎていたみたいだ。反省、反省。

あたしが謝ると、光は2・3度深呼吸して動悸を押さえながら聞いた。

「謝った、の……？」

「うん、今朝会ったときに謝ったんだけどさ、私こそごめんって言われたまでは良かったんだけど……あんな調子」

そう、火山見学の前、何だか気まずかったし、ちょうど班行動で一緒に行くことになっていたから、一度は謝った。でも、以降に態度が変わらないことにあたしは困っていたのだ。

それに光はまだ頬を朱色に染めたまま可愛らしく笑って。

「じゃあ大丈夫だよ」

「え、そうなの？」

聞き返すと、うん、と光は頷く。

「大丈夫。千代ちゃんも謝ったんなら、許したってことだから」

そんなものなんだ……。ほんと、女の子って難しい。

自分がつい2ヶ月ほど前まではその難しい女の子だってことも忘れて、あたしは小さく息をついた。

それを見て光は苦笑いして続ける。

「千代ちゃん、今は恥ずかしがってるだけだと思うの。だってそういうの、慣れてないだろうし。だからすぐに機嫌も直るよ、きっと」

「そう、かな？ うん……。ありがとー、光」

「ううん。それより」

ふるふると雨に濡れた仔猫のように大きな動作で首をふると、

「行こう？」

光はきゅっとあたしの服の端を掴んで、素敵な笑顔で一緒にまわろう、と言った。

「え？ でも光、千代たちと回るんじゃない？」

「……李緒」

言い終えるか言い終わらないかのときに、光はあたしの服のすそを引っ張って、

「修学旅行中。ほとんど話してなかったでしょ？ 今くらい一緒に回ったって、罰はあたらないよ」

「そんなこと言ったって……」

「おねがい」

何故だか縋るようにあたしを上目遣いで見てくる光。そんな風にあたしを大切に思ってくれていることが嬉しくて、けどここは生徒が大勢いるから見られる可能性も十分にあって。

（あたしだって、そりゃ光と一緒に観光したり、お土産選んだりしたいよ。でも——）

でも、一緒に仲良く2人っきりで見学をしているところを見られたら、まさか普通の友人関係には見えないだろうと思う。いくら友達だからって主張してもあたしと光が付き合っているなんて思う人もでてくるかもしれない。

(けど、さつき相良……)

好きな人がいると言った相良。もう、どちらももう大切な友達。常識として友達に差、なんてつけちゃいけない。

なら、と思う。あたしがどちらを応援しようとする……。自分でだって最低だと思うけど、あたしが、相良のよく知らない恋を応援して、光には、すっぱり諦めてもらっても……。

……それに、釣り合わないから、たぶん付き合ってるのか、そんな風に見られないよね。

「——うん、いいよ」

だからあたしは少しだけ罪悪感のつった心中を隠して、光に向かってにっこり笑いながら、頷いた。

みいちゃんを含めたトモダチ数人と談笑をしていると、私の視界の端には偶然こそそと——ただ私の目にはそう見えただけかもしれないけれど——よく見知った生徒が2人、大通りを外れて建物の中に入っていくのが見えた。

「あれ……？ あれ、ひいちゃんと……李緒、クン？……」

どうしてそんなに近いのよ、とか。いくら幼馴染だからって仲良すぎない？ だとか。

仲睦まじく歩いていく2人に向かって言いたいことはいろいろあって、でも面と向かっていうには直球すぎるし、昨日のことがどうしても恥ずかしくてもどかしくて。

話しにまざりながらもどうしていいかやきもきしているとみいちゃんが不審気にぼつりと呟いた。

「あ、ホントだー。2人なんてあやしー。あれかな。修学旅行は燃

え上がるってやつ」「涼子、少女まんがの見すぎ。そんなことあってたまるもんですか。ていうかひいちゃんはまだまだお嫁にはやれませんっ」「そっちが本音?」「もっしろん。相手がいくら李緒クンでもねー」「そっちも本音?」「やだーっ。あれだよ、あれっ。2人ともいつまでも綺麗なまままでいてほしいっていうかー。ほら、2人とも何だかんだいってうちのクラスの看板なんだもん。アイドル観念ってやつ?」「あはは。あっやしー」

口々にトモダチが話して行って、この調子なら誰かのこいばなか、クラスで一番カッコいい子は誰か、とかでも始まるのかな、なんてどうしてか分からないけれど何故か焦燥感にかられながらも予想していたのだけれど。

「ね、ねっ、千代子もみいちゃんもそう思うよねっ」
急に私とみいちゃんに話が振られた。

その問いに対してみいちゃんが曖昧に頷く。だから、私も彼女と同じようにとりあえず頷こうとして首を傾けようとした、その時。

「ばっかねえ。千代は狙い組みに決まってるでしょー? こんな綺麗なんだからー」

「はい?」

いきなりのトモダチからの発言に文字通り目が点になる。

「何気にみいちゃんもだったりして? みいちゃんもちっちゃくて可愛いよね。うん、いけるいける」

うりうりとおしゃれめがねをかけた子がみいちゃんの頭を手のひらで愛でるように撫でた。それをみいちゃんは片目を瞑って両手で遠ざけようといやいやする。

「……子供、じゃ……ないもん」

そんな様子が低身長と童顔、長い髪にあいまって小さな子供のようで可愛い。光がいつも近くにいるからあまり目立たないけど、みいちゃんが隠れてもてていることの理由だ。本人はコンプレックスみたいのに感じているのだろうけどね。

同じように頭を撫でていた子も私と同じように思ったのか、感極

まってみいちゃんをそのまま腕の中に抱きしめた。

きや、とか細い声をだして抱きしめられるみいちゃん。

みいちゃんは、じいっと私に助けを求めるようなうるうるした目で見てくる。ぐっとやってくる彼女への強い庇護心。

私は困った顔で苦笑すると、

「ほらほら、そろそろ見て回りましょうよ。せっかく北海道来たんだから。えっと、ここらへんなら土器とか、あるわよ？」

「えー。千代じじくさーい」

「じじっ……………」

ひくりと頬がひきつる。確かに土器を例にだした私も私だけ……。

「……行きましようね？」

私がつこりと邪気のない笑顔で微笑むと、こわーい、とみんなは笑って思い思いのグループを作り散らばっていった。

私は一度息をつくと、いつものようにみいちゃんと一緒に、展示品を見に行くために近くにあった建物の中に入っていった。

そこで私が2人を見つけたのは偶然だと思う。

みいちゃんと2人でアイヌの文化を見てまわってからちよつと遠くの通りを出て、途中でソフトクリーム屋さんがあったからイカ墨ソフトを買ったときだった。

「案外癖ないー。これって」

この声って……。

近くから聞きなれた声がした気がして、そちらを見てみるとやっぱり見慣れた2人の姿があった。

「……話し、かける？」

どうやらみいちゃんも気付いたようで、私の隣から上目遣いで見つめながらそう聞いてくる。

2人でこっそり出ていったんだからあまり話しかけて欲しくないかもしれない。

だから私は首を振って、

「……つけてみない？」

冗談で、そう言ってみる。もちろんこれはみいちゃんなことだからきつと、だ、だめだよそんなお邪魔みたいな、とかたどたどしくもきつちりと否定してくれると分かっているながら。

けれど、みいちゃんは意外にも小さく頷いて、

「う、……うん。つける……」

こう言われると言い出しっぺの私が今更失礼じゃ、とか言えるはずもなく——結果的に私とみいちゃんは尾行することになったのだった。

「ひかりひかりっ、そっちのも食べていいー？」

「うん、はいどうぞ」

可愛らしく笑って李緒クンの口元にソフトクリームを運ぶ光。李緒クンはありがと、と言いながら自分の分のソフトクリームを光にも同じように分け与えた。

「あ、こっちもおいしいーっ」

「こっちは……うん、あんまり甘くない普通のソフトクリームって感じ。私……好きかも」

間接キス。

それに2人は全く気付いていないんだろうか、と思ってしまうほどに自然とお互いのソフトクリームに口をつける光と李緒クン。

2人は恋人のように寄り添いながら——本当は全然違うのかも知れないけれど——お土産品を見回っている。

……これは、幼馴染だから？

「……千代、ちゃん……あの2人って、付き合ってる……の？」

「ううん、そんなはずは……ないはずだけど」

自信なんてない。

あんなに楽しそうにしている2人だ。特別な関係にしか見えない。例えそこに手を繋いでいたり、腕を組んでいた、ありきたりな恋人がする動作が見られなくてもやっぱり、何か特別な関係にあると

しか思えなかった。

「あ、これ見て、見てっ。李緒っ。可愛いっ」

「マリモのぬいぐるみ？　へえ、中に磁石が入ってるんだー。ってこれマリモ同士の口同士が？」

「ほらほら、ちゅって。可愛いし、面白いでしょ？　一緒に買おうよ」

「そーだね、面白いかも」

にこにこと、親友と呼ばれるであろう私やみいちゃんにもあまり見せないような魅力的な笑顔で、光は李緒クンに心の底から嬉しそうに話しかけている。

……ていうか、普通あんなのただの異性のトモダチ同士が買う？　いくら幼馴染でも。すんなり了承する、李緒クンも、……李緒クンよ。

苛々する。まだ、あれの症状が長引いてでもいるんだろうか。

「あ、李緒、また唇かさかさ。もう、ちゃんとリップつけときゃなきゃダメだよ？」

「えっ？　……んー、こんなの舐めとけば大丈夫。っていうか最近リップなんて持ってきてないよ？　男子で持ってる子なんて珍しいしー」

「ダメダメ、荒れちゃうよ。李緒昔から荒れっばいんだから。はい、これ」

「んー……ありがとっ」

きゅっきゅ、と唇に、なんだかんだ言っただけ嬉しそうに光から借りたリップをひいている李緒クン。そして、あたしも、と同じように李緒クンから返してもらったリップを唇にひく、光。

「何よ、あれ……」

「……」

思わず、口から言葉が漏れて2人に聞こえないかと口を押さえる。みいちゃんは神妙に2人を見つめてから、小さく私にこう呟いた。

「……千代、ちゃん……ソフトクリーム、……溶けかけてる」

「あっ」

溶けてたれてきそうなソフトクリームをぺろりと舐める。すると、甘いけれど、ほんの少し苦い味がした。

(11) これって一種の羞恥プレイ、だよな

雲一つなくいい青空で、日光照らすいい天気。

もう六月初旬。それでこんな天気だと普通じめじめと暑苦しいものだけど、場所が場所なせいかまだまだ全然暑くなく、むしろ流れる風が涼しい。

以前にもこういう日和にこういう風に買い物して回ったことがあったけど、それには千代と相良がいた。それから光とはちよくちよくと買い物に行ったけれど、男手があったほうが何かとあたしにとって選びやすい、ということで祐次についてきて貰ったりしてたから実はこれが男になってから光とする、初めての二人っきりの買い物だったりする。

加えてここは北海道。見たこともないような原産の楽しい物が売っていて、目新しいことばかり。

やっぱり、いいなー、光と一緒にだと。

「李緒。これなんか、ゆうくんにいいんじゃない？ 今時ーって感じでかっこいいよ」

「うん、じゃあそれにするっ。ありがとー。……ん？ けど祐二サイズなんだっけ？」

あたしは光が両手で広げた地元のキャラクターがお洒落に描かれているTシャツを見て頷くと、そういえば、と首を捻った。

ここはアクセサリーやTシャツ、名産品などが売っているお土産専門店。

「XLだよ。前李緒自分で言ってたのに」
「だっけ？」

「うん。ゆうくんも大人になってきたんだねーって。ほら、李緒の家の近くにあるデパートに行ったとき」

あ、そっかとあたしは納得して手をうつ。そんなあたしを見て光は小さく手を口にやってくすりと笑った。それにつられてあたしも

笑みを作る。

あたしと光、そして弟の祐二の3人は、小さい頃からずうっと一緒。だから姉弟——今では兄弟だけれど——なのに反発しあうことなく仲がいいし、光と祐二もやっぱり他人の枠組みを超えて仲がいいみたいだった。というかあたしより光と祐二って姉弟みたいなんだよね、と時々思うほど。

「そうかな。でも、それ言ったらゆうくんなんか李緒にべったりだよ。いつも朝、2人で楽しそうに話してるじゃない」

「まあね」

おかげさまで。人懐っこい弟を持って幸せです。

大げさにそう言って笑うと、思いだしたように光は言った。

「そういえば」

「え？」

光はアクセサリーが並んでいる場所へと移動すると、じとめであたしを見つめてきた。

「……たまにゆうくんと話してるとき、私のこと忘れてるでしょ」

「え？ ……や、そんなことはっ」

まあ確かにスポーツの話題、特にそのスポーツをやっている人物名とかが出てくる時はやっぱり良くも悪くも大人しい系の女の子な光はついていきにくいわけで。でも祐次からそんな話題を提供してくれたとき、つい体育会系のあたしは夢中になって話しこんでしまうというわけ。

「別に忘れてるわけじゃなくてっ。ほ、ほら集中しだすと周りが見えなくなるって言うか、いやでもっ、ごめんなさいっていうか、あーうー……」

あたしが慌てているのが面白いのか光はクスリと笑うと、

「あ、じゃあ私はこのキーホルダーあげようかなあ。ゆうくんには」
そう言って光が指先で摘まむのは先ほど別の装飾品店で買ったマリモ同士がキスしあう可愛い人形、とはまた違う一風かわったマリモのキーホルダー。それは世間から気持ち悪いけれど可愛いと

賞されている北海道のお土産の中では特に人気のあるもので……。

「……買うの？」

「え、ダメ？」

いや、そんな綺麗な笑顔で小首を捻られても。とても光が買うとは思えない品だった。

その時、ちらりと光の時々見せる小悪魔のような笑顔が脳裏に浮かぶ。

……まさか。

「ねえ、それ、もしかして、渡すの俺？」

そうあたしが光に問いかけると、

「うん、よく分かったね李緒。それはね、帰ったら李緒からってそのTシャツと一緒に渡してあげてね。私からって言っちゃダメ」

そうキッパリと光は言い切った。

「いや、でも」

男同士ならそりゃーこんな普通かもしれないけど、……あたしが？ 羞恥で死にそうなんです。

「私からのお土産は別に次の日渡すから。……いいよね、李緒、ゆうくと仲いいんだから」

ね、と念を押しながらにっこりあたしに向かって男なら絶対見惚れるような可愛い笑みをつくる。

……最後につけたされた言葉によって言い返せない。言い返したら、もっと酷いことになりそう。

「……うい」

渋々返事すると、私は何買ってあげようかなあ、と光は小さく、うーっと唸る。それから楽しげに、別のアクセサリーを見つめて可愛いけど男の子が使ってもいけそうな、ダイスがつらなっている北海道限定と料金札に銘うたれたキーホルダーを手にとった。

「それじゃあ、買ってくるね」

光はそれらのお土産を手にとると悠々とレジまで歩いて行く。あたしはそれを見送るしか出来なかった。

……これって一種の羞恥プレイ、だよねー。

「さ、てと」

そんな風に、ほのぼの、なように若干違う会話をしながら色んな店の中を歩き回りながら、家族、親戚、先輩後輩の分を買っていくと、もう結構な量になってしまっていた。

「俺はこれで全部かな。光は他に買いたいもの、ある？」

手にはどっさりと大きなビニール袋。ちょっち重い。これは家まで宅配してもらったほうがいいかな。

「うん、私も」

あたしの問いに対して光は2度ほど首を振ると。

「……李緒。あのね、宅配した後、何かしたいことある？」

「え？　ないよ。光は？」

これからは特に行くあてはない。どうせ北海道に来たんだから名産品の食べ歩きでもしようかな、と軽く思ってたぐらいだ。

「あのね、今から――」

ちまちまちまちな。

人には得意分野がある。例えば文系が得意な人が理系を勉強しようとする、よほど才能がない限り苦労するわけで。あたしの得意な科目は体育。苦手な科目は家庭の料理系以外全て。そして、今やっていることはその苦手分野に当てはまるもので。

（投げ出したい投げ出したい投げ出したい……っ）

あたしが何を言いたいのかというと、とどのつまり、向いてないことをやると根気がいる、ということ。

「絶対こういう作業はあたしには向いてないと思う……」
ぼそりと口の中でのみ呟く。

「あ」

同時に手に持っていた小さな青色のビーズがするりと手のひらから抜け落ちた。

(……もう、ヤだ)

あたしは頭を垂れて手に持っていた風呂糸とビーズをゆっくりと置いて溜息をついた。

「李緒、出来たの? ……あ」

「……見ての通り」

右隣から覗きこんできた光に向かって苦笑交じりにあたしは言う。
ここは高木北海道装飾品工房。その名の通り北海道伝統のアクセサリーを自分達の手で作れるという所。

目の前の大きな木製の机の上には専用の糸といろいろな形のビーズ、そしてそれを完成させるちよつとした機材。周りにはあたしと同じように奮闘する人達がいる。

——「りっちゃん、こうするとやりやすいから、ね?」

あたしは突然の低い声に光が座る反対側の椅子を見ると、ソフトモヒカンで片眉に傷がある、明らかに一般人とは一味違うこわもてのお兄さんがいた。

「えっとね、ここはこうすると、ね?」

外見。

それだけ見れば極道の人っぽいものだけけど、幼少時代のあたしのあだ名である『りっちゃん』とか『ね』とかを使っているのを聞くと違うことが分かる。正直、初めてアクセサリー作りを教えてくれる先生がこの人だって分かったときはちよつと身構えたけど、今は全然平気だ。

「りゅーくんセンセって昔何してた人?」

そうあたしが恐る恐る聞くと。

「俺? 俺はねえ、……秘密。ああ、別にりっちゃん達が考えてるようなことじゃないと思うから安心して。秘密のある男のほうがさあ、カッコいいじゃん?」

そう言ったかぎりゆうじて子供のように屈託なく笑うりゅーくんセンセ、もとい高木龍二先生。彼は顔に似合わず人懐っこい性格の人で、教え上手で、すぐく手先が器用。もっと話していたいと思える魅力的な人だ

った。

……まあ、隣で子羊かチワワのように震えている、すごく庇護心の駆り立てられる西洋人形のように可愛らしい少女があたしの着ているＴシャツの裾を掴んでなければ、だけど。

「りゅーくんセンサー、こっちー」

少しはなれた場所からりゅーくんセンサーを呼ぶ声が聞こえる。それに彼ははーいっ！ と大声で答えると。

「それじゃりっちゃん、また後で見にくるから。後はひいちゃん、ね？」

それに、あたしがはーい、と気軽に言うのに対して、光は緊張した声で、は、はいっ、と答える。

りゅーくんセンサーが別の観光者の所に行ったあと、光がほう、と胸に手を当てて動悸を押さえる。

「やっぱりまだ怖い？」

「ちょっと……」

どうやらまだ慣れていないらしい。光の怖がりには幽霊だけに収まらない。まあ、さすがに今回はあたしが驚くほどだから相手が悪かったみたいだけれど。

見てるぶんには可愛くていいんだけどね。

(……に、してもお)

ちまちまちまちな。

作業に入ると、これ。

男の子から見えて女の子がこういう作業が得意だと思えるのは、慣れの成果。多少は指の細さとかが関係あるかもしれないけど、初めは皆一緒。やりなれてない子は出来ない。だって、あたし、女だった頃からできなかったし。

「……あ、またおんなじの」

間違えて同じビーズを連続で入れてしまいがつくりと頭を垂れてしまう。

(あーもう……光、よく出来るなあ)

昔からこういうことが好きだった光は、やはり長年の差というか、出来る。何かコツはないのか、と隣の光の手元を見るとあたしの倍は進んだほとんど出来上がっているブレスレットが目に入った。そこでまたがつくり。

その時。

(こ、これは……っ)

手元から光の小さく整った顔へと視線を上げたとき、気分が好転した。

光は小さく細い指で手元のビーズをすいすいと器用に胤糸に通していく。そして、その光の表情は真剣さを帯びてるものの綺麗に微笑んでいて、まるで女神様か天使のよう。この様子を見れるあたしは世界で一番幸福だと断言できる。

(写真。例えば携帯で……欲しいっ。待ち受けとか待ち受けとか待ち受けとか待ち受けとか待ち受けとか待ち受けとかっ)

それで、もっといえば、可愛いなあ愛でたいなあ抱き締めたいなあなんて続いているけど、熱心に取り組んでいる光を邪魔しちゃいけないとも思うわけで。

そこで、ちくりと嫌な感覚が訪れた。

(邪魔しちゃ、いけない?)

あたしが今ここにいること自体、邪魔なんじゃないの？
だって――。

――カシャッ。

「わっ」

「きゃっ」

カシャリと、ふいに白い発光とともに小さな音になった。

あたしと光は揃って驚きとともに発光源を見つめると、にやりと笑ったりゆーくんセンセのこわもて顔が目に入る。ううん、極悪人面。

「ナイスショット、俺」

「あのですねえ?……」

せつかくの光の可愛らしい表情がつ。……勿体無い。

非難がましくあたしがりゅーくんセンセを見詰めると、彼は快活に笑って言った。

「はは、サービスサービス。ほら、これ」

年季を感じる真っ黒くて高そうなカメラを裏向けると、ジューツと真っ黒い写真が2枚重ねて排出されていく。りゅーくんセンセはあたし達に一枚ずつそれを渡した。

「どう？ 俺のカメラテクも悪くはないでしょ？」

得意げに笑うりゅーくんセンセに対して、カメラテクってなんだ、と心中で突っ込みながらも色が変わるのを待っていると、

「李緒、これ……」

「わ……」

そこには風糸にビーズを入れる可愛らしい少女と、それを見詰める少年の姿が映っていた。

「カップル限定」

「いや、カップルって……や、でも、アリガトウゴザイマス」

「どういたしまして。んじゃ俺別んどこ撮ってくんね」

カップルじゃない。けど、茶化すような声で笑いながら去っていくりゅーくんセンセが輝いて見える。これこそさっきのあたしが望んでいた写真。あたしの姿が正直邪魔だなあ、なんて思うけどそれはそれでいい思い出。

「どこにかざろっかなあ……勉強机の所とかがいいかな？」

「私はね、ベッドの上にたてるよ。寝る前も、起きたときも見れるように」

光も写真を胸の位置に持っていてって嬉しそうに微笑んでいる。それは自然で、場が一気に明るくなるような笑顔で。

……やっぱり、全然、うん。

一瞬浮かんだ罪悪感は、まるで泡のように消えうせていた。

「でっきたあっ！」

「おめでと、李緒」

「んー、光のおかげだよー」

そう言ってぎゅーっと光に抱きつくあたし。途中まで不恰好なまま作られていったブレスレットだけど、光が何度もアドバイスしてくれたおかげか綺麗に形が出来ていた。

「りっちゃんりっちゃん？ ひいちゃんいろいろ大変そうだよ？」

「へ？」

「り、李緒……っ」

腕の中を見ると顔を赤くしている光。この照れ屋さんめ。

「ふうん、よく出来てるじゃん。これもひいちゃんのおかげ。かな？」

「うんー、ありがとお、光。あとりゅーくんセンセも」

依然として顔を赤くしながらどういたしましてと言う光と、にっこり笑みを作るりゅーくんセンセ。

あたし達一帯に和やかで幸せな雰囲気漂う。

そんな時だった。

——「りゅーくん先生、さん。ヤンキーが一般人を恐喝しているようにしか見えませんよ」

突然の綺麗なソプラノの声。

「睦美！？ どうしてここに。……お前、方向音痴のはずだったろ？」

かつかつとヒールをならしながら、美人さんが現れた。

驚きながらりゅーくんセンセは目を二、三度瞬きする。

「誰かさんに来るなって言われてしまいましたからね、意地でもきてしまいましたよ。全く、あの子達がいなければどうしようかと」

こちらに歩いてきながら怒ったようにいう美人さん。そして甘えるようにりゅーくんセンセの腕に手を差し伸べた。

「ったく、あんまり見せたくなかったのに……」

「いいじゃないですか、減るもんじゃありませんし」

にこりと睦美さんという人は綺麗な笑みを浮かべる。

どうやら、りゅーくんセンセと睦美さんという人はそういう関係らしい。

「（もしかして……）」

すかさず腕の中にいる光と目があって二人でこっそり嘖き出した。

「（……ぷっ、りゅーくんセンセ、尻にしかれちゃってるのかな）」

「（くすくす、そうみたいだね）」

言い合う二人を見つめてから視線を下げて腕の中にいる光とこっそり笑いあう。

「……まあ、来たんならそれならそれでいいけど。じゃあ睦美は誰かと一緒に来たわけ」

りゅーくんセンセは眉間を擦りながら問いかける。

「ええ、途中で可愛いお嬢さん達に出会いまして。この工房の名前は知っていたから」

「そのお嬢さん達は？」

「……あら」

気付いたように睦美さんは声をあげた。そして、工房の入り口辺りに視線をたむける。

もしかして、そのお嬢さん達という人達も一緒に来たんだろうか。

「おかしいですね。さっきまで一緒にいたんだけれど……。二人ともー？」

睦美さんが工房の入り口に向かって呼びかけた。

ことごと足音が鳴る。

誰だろう、と興味深くそこに目を向けると――あたしは一瞬、目を疑ってしまった。

「千代、みいちゃん!？」

「あら、お友達でしたの？」

偶然、とあたしと目が合うとさっきの綺麗な笑顔で笑う睦美さん。そして、そのお友達――千代とみいちゃんは、何やら微妙な顔をして近づいてきた。

「やっほ、二人とも。ここらへん来てたんだ」

「う、うん……」

あたしが気軽に声をかけると、みいちゃんが苦い顔をして答える。
「どしたの？」

どうしてそんな不穏な表情をしているんだろうと思いながら首を捻ると――。

「……ねえ、二人とも。どうして、抱き合ってるの？」

何やら面白くなさそうにあたし達をみて呟く、千代。

「あ」

その時、気付いた。あたしの腕の中にまだ光がいることに。
――もしかして、今、すっごくヤバイのかもしれない。

(12) ご乱心ですかーっ!?

「……ねえ、二人とも。どうして、抱き合ってるの?」

何やら面白くなさそうにあたし達を見て呟く、千代。それにもなってみいちゃんの視線もあたしに注いだ。

——光に感謝しすぎちゃったから、つい抱きしめちゃったんだ。

あまりにも、直球すぎる気がする。

アニメや漫画の世界じゃあるまいし、感謝感激のあまり異性を抱きしめるなんて人間そうそういないと思うから。っていうかいたら世界中セクハラという四文字で埋め尽くされるだろうしね、きっと。かといって、俺たちつき合ってるんだ、みたいな、あたしが男になったくらいに有り得ないことを言ったって信じてもらえるはずがなし。しかも、それだと光に嘘つかないで、って言われて嫌われちゃう可能性もある。そんなの、嫌。

……じゃあどうしろと。あ、あたし、光を襲ってるつもりなんてないんですがー?

「えとー、その」

どう言い訳、もとい誤解を解けばいいのやら。正直、この年で犯罪者にはなりたくなかった。

(や、ヤバイかも……)

あたしは背筋に軽く冷や汗を掻きながら腕の中にいる光に助けを求めるために下を向く。

けど、光も、嘘は苦手なはずで。正直者な光のことだからきつと表情に出るか、それか何も返せないんじゃない。

「別に、二人が思ってるようなことじゃないよ」

——あれ?

そう、思っていたんだけど。なんと驚くことに光はにこりと天使のような微笑みを浮かべていた。

「二人とも、私が怖がりなこと知ってるでしょ? それでちよつと

したことがあって、抱きついちゃっただけ。ごめんね、李緒。ですよ、高木先生？」

光は先ほどとは違い何の怯えもなく、りゅーくんセンセに話をふつた。ふられたりゅーくんセンセは突然のことに驚いたのか、それともさっきまで怯えられていた光にそんな表情をされて、やっぱり驚いたのか、ぽかんとした顔をしてから一度だけ頷いた。

「そうそう。ひいちゃんったら俺の笑った顔見て怖がっちゃったんだよ。酷くない？」

おどけたようにりゅーくんセンセが頭を抱えていかにもショックという表情をする。それを見た睦美さんはくすりと小さく笑うと。

「それは災難でしたね、光さん。この人ほんとヤンキー顔で」

「ヤンキーいうなっ」

それに乗ってくれていた。彼女はそんな様子じゃなかったって、見てて知っていたはずなのに。

誤解が溶けてくれるまであと一押し。

あたしは、内心でほっと息をついてから。

「そういうこと、なんだよ……ね」

内心申し訳ない気分でいっぱいだったけれど、精一杯平静を整えてから、分かってくれた？　そう言うようにあたしも視線をあげる。すると、あたし達を不審そうな目で見詰めていた二人は曖昧な表情で頷いてくれていた。

（ほんと、光のおかげで助かったなあ……）

そう思いながら、あたしは天使のように微笑んでいる光に視線だけで感謝の念を送っていた。

ブレスレットやペンダント、他には大きな勾玉のついたイヤリングなどが壁一面に飾られている部屋の中で、その中心に置かれている木製のテーブルの椅子に座りながら、私たちは談話に耽っていた。先ほどの工房の中ではなく、この展示室のようなところにいるのは私と、みいちゃんと、睦美さん。

李緒クンと、光と、あの厳つい顔をした先生は装飾品作りのちよつとした仕上げらしく、三人で違う部屋へ行っている。ついていても良かったのだけれど、その部屋は非常に狭いらしく、私たち三人は展示室で談話にひたることにしたというわけだ。

「私とりゅーくんは幼馴染でですね、昔からずっと片思いで」

と、言っても睦美さんとあの先生の馴れ初めを聞いているようなものなのだけれど。けれども、私たち思春期真っ盛りな女の子にとつては他人の恋愛話ほど楽しいものはない。

まあ、先ほど二人の尾行中に偶然道を尋ねられて知り合った女性と話していると思うとなんだか可笑しくなるんだけどね。

「……じゃあ、初恋が、実ったって……ことです、か？」

「ええ。親類が少しごねたんですけどね。ほら、あの顔ですから、何かやってるじゃないのとか。でも、そこにりゅーくんが乗り込んで、少しづつ和解していったんですよ」

睦美さんはうっとりとした様子でそう応える。心底彼女はあの先生を惚れ込んでいるらしい。

私も将来はこんな風に自分の恋愛話を友人に話す日が来るんだろうか。その相手はカッコよくて、スポーツも得意で、気さくで、優しく。私の彼氏はお菓子とか作るの得意なのよ、なんて言ったりして。それでそれで。

……あれ？

「あら、どうしました？ 顔なんか赤くして」

「ほん、と……顔、赤いよ？」

「え？」

いつの間にか、彼のことを想像しているように思えてきて、ふと何だか恥ずかしくなった。

おかしい、別に好きなんかじゃ……ないのに。

「あ、いえっ。ちょっと寒くて」

赤くなっていたらしい顔を見られたくなくて咄嗟にそう言うと、肩を竦めるように、服に赤くなった頬を埋めた。

「そういえば都会のほうからいらっしやったんですものね。やっぱり北海道は寒いものなのかしら。私はもうここに慣れてしまっているからよく分からないんですけど」

「え、ええ、少しだけ。向こうではもうカーデガンなしでも寒くないんですよ」

当たり障りもなく、私はそう答える。

——結局あの後も引き続きあの二人をつけてみたのだけれど、付きあっているという確証は得られなかった。さきほど抱き合ってたときも、李緒クンはともかく光は焦ったような表情は見られなくて、やっぱり親友以上恋人未満という表現が正しいのだろうか。……でも、やっぱり異性同士で修学旅行という機会に多人数ではなく、二人っきりでそういう行動をするのは、何となくおかしい、気がする。それはやっぱり私が異性とのそういう経験がないから思うことなんだろうか。

こういうのはきっと恋愛の経験があり、あの二人から全く関係のない大人の女性に問いたただいたほうがいいんだろう。でも、私の知り合いには思いつく限りそんな人はいなくて。

(……大人の、女性?)

そこで、私はぴんとくる。

「睦美さん。あの」

そう呼びかけると、睦美さんは綺麗な笑顔で、何かしら、と小首を傾けた。

「あの。さっきの、光と李緒クンたちのこと、どう思います?」

あのすごく楽しかったアクセサリー作りをした時から時は過ぎて、今は夜中のお喋り会。今、何時くらいかな、と思いながら時計を見るともう夜中の十時。消灯時間はもうすぐ。

「北海道って言ってもやる番組はあんまり変わらないのね」

「あ。でも、日にちは変わっちゃってる」

備わっている新聞の番組欄を見つつ、お目当てのドラマを探して

いる千代ちゃんに私はそう告げた。

「あー、……だから通りでやってないのか。毎週見てたのに」

残念そうに千代ちゃんは顔をしかめた。それを見てみいちゃんは微笑む。

「私……家で、録画してるよ。……今度、皆で家に来る？」

「うん、行く行くっ」

「私も、いいかな？」

「うん、……もちろん」

——本当に、今日は楽しかった。

今までの不安なんてどうでも良くなるくらい、すごく。

手首には私が作っていた物とは違う、色違いの蒼色と桃色の混じったビーズのついたブレスレットがつけられている。

（高木先生、ありがとう）

私は、あの時少し怖がり過ぎただろうか、と高木先生のこわもての顔を想像して少し後悔する。今から思うとあんなにもいい先生だったのに。

『うちで作ったブレスレットはね、作った人同士で交換したら今よりもっと仲良くなれるって効果があるんだ。二人とも、ね？』

そう、私と李子が仕上げだからついてきて、と高木先生に言われてこじんまりとした部屋に行ったとき、一つ、私たちに助言してくれたのだ。その後私に向かってウインクしてきた高木先生の表情をよく覚えている。

おかげで、私の宝物がもう一つ増えてくれた。

（……一生、大事にしよう）

そう思いながら、手首に手を持って行って、触り心地のよいブレスレットに触れた。

「どう、したの？ ……ひいちゃん、にやけてる」

「え？ う、ううん、なんでもないよ」

私は慌てて両手を振る。

気付かなかったけれど、このブレスレットを見つめていたら、い

つの間にか頬が緩んでたみたい。

「片付けて、お布団敷きましょ」

いつの間にか、もう時刻は一時。ずいぶん話していたと思っていたのだけれど、もうこんな時間帯になっていたんだ、と少し驚きながら三人でお金を出し合いながら買ったお菓子の数々を片付ける。今更ながら空になったお菓子袋を見ていると結構食べてしまった、と体重の心配をしてしまう。でも、しょうがないかな、とも思う。だって高校生になって最初で最後の修学旅行なのだから。

（これだけは、李子が男の子になってしまったの、残念だなあ……）
李子がここにいてくれたらもっと楽しかったのかもしれない。うん、かもじゃなく、絶対に。それだけは、少しだけ気落ちする。（会いに、いっちゃおうかな）

ふいに昨日冗談で言った言葉を思い出す。

でも、だめ。きっと李子は困るだろうから。

その時、空だと思っていたお菓子の入った詰め合わせを掴むと、その中から一つの包み紙がぼとりと落ちてきた。

「あれ？ チョコレート、まだ残ってる」

落ちてきたのは、英語で *b o n b o n* と書かれたメーカーのチョコの包み紙。

……最後の一つだし。頂いちゃおうかな。

「私、食べてもいいかな？」

「うん。食べちゃって」

二人にそう問いかけてから、私はチョコレートチョコレートの包み紙を開けて口元に運んだ。

美味しい。

李子じゃないけれど、甘い物は好きだ。それは女の子は甘い物好き、というのもあるし、小さい頃から李子がお菓子を作ってはお裾分けしてくれていたから好きになったのかもしれない。

……それに、このチョコ。なんだろう、すごくクセがあって、美

味しい。

「ごめん、千代ちゃん。これ、その袋に」

食べ終わると包み紙を、ゴミ袋代わりのビニール袋を持っている千代ちゃんに渡してそう言う。

「私、お先に歯磨きに行ってくるね……」

顔を洗うところは、トイレのある場所にある。

片付けも終わったので、そう二人に告げて立ち上がる。その時、少し立ちくらみが起きた。だんだん、ふわふわと、気持ちよくて、眠たくなってきたのだ。このまま、寝てしまいたい気分。

……でも、歯磨きに行ってから寝なくちゃ。虫歯になっちゃう。

「ひいちゃん。ふらふら……してるけど、大丈夫？」

「ちよっと、眠いからかな。大丈夫、だよ」

そう心配してくれたみいちゃんに告げると、私はゆったりとした足取りで部屋の扉の前まで向かうと、扉を開いて、閉めた。洗面台のあるトイレのドアまであと少し。

「あ、このチョコって……」

後ろのドア伝いに、小さく千代ちゃんの声が聞こえたけど、ほわほわする頭にはほとんど聞こえない。

なんだろう。すごく、ふわふわしてる……。でも、歯……磨かなくちや。

その時、あたしだけがその音に気付いたのは偶然と言ったところだろうか。

——こんこん。

そんな小さな音があたしの耳に聞こえて、あたしは誰だろう、と思いつながら目を開けて、擦る。

まだ眠い。全然眠い。眠い眠い眠い。今すぐ寝ちゃいそうなくらいに眠かった。時間を見ると……一時？

あたしは眠気を訴える頭を2度振ると、どうしてこんな時間に？

と考える。

……あー。

その答えはすぐに出た。

「……せんせー……？」

こんな時間帯に来るのなんて先生くらいしか許されていないわけで、就寝確認にでも来たのかな？　なんて思っただけ上がる。

左を見るとケンちゃん。窓際の右を見ると相良。相良は上にかぶっていた布団を大きく足元に蹴って眠っていた。

後でなおしてあげなくちゃなー、なんて相良を見て小さく笑うとすぐにあたしは欠伸。

——こんこん。

もう一度、急かすようなノックの音。

やっぱ眠いー。

そんな風に思いながら二人が起きないように立ち上がると。

「……はいはい」と

もう一度欠伸。忍び足でドアの前に向かう。

「せんせー？」

——かちゃり。

ドアを開けて電灯の明るさに目を瞑りながら、あたしは言った。

「はいー。みんな寝て……って、あれ？　……光じゃんっ」

目を開けると、そこにいたのは世界で一番親愛なる友人。

「なーんだ。先生かと思っちゃったよ。何？　こんな時間帯にー。

まさか夜這い？」

くすりと笑いながら開いたドアを後ろ手に閉める。もう一度、かちやりと小さく音が鳴り、ドアが閉まった。

光はあたしに応じてか、うふっと嬉しそうに笑う。

……うふっ？

「りーおー」

何やらにこにこ顔の光。

光はピンク色のふわふわした材質のデフォルメのうさぎさんが描

かれた、いわゆるパジャマと呼ばれるものを着て、それが似合い過ぎるほど似合っていた。

そんな光を見てみると、やばい、可愛い。やっぱり光と一緒に寝たかったー、なんてふしだらなことを考えてしまうのだけど。

「うん、どしたの？ 何かあった？」

ここまで来たってことは何か理由があるはず。

上目遣いで、あたしの目をじっと見る光。何気にその頬が上気しているのは気のせいか。そして、またそんな様子がすごく可愛くて。

とどのつまり……やばい。押し倒しそう。

「李緒はー。私のこと嫌いじゃないよねー？」

「……はい？ うん。嫌いなわけではないじゃん」

光から突然投げかけられた謎の発言。

いきなり、一体なんなんだ。

誰もそんなこと言った覚えなんてないし、思ったことすらないって神様に誓える。

そう伝えると、そっかー、とまた光は嬉しそうに微笑んだ。

あーくそ、可愛いなあもう。でも、それがこんな時間帯にここまですてきた理由？ 男子と女子の部屋は一つ階が離れているのに、クエスチョンマークで頭がいっぱいになるあたし。何を目的に光はやってきたんだろうか。

「……あの、光？」

「うふふ」

い、いったい何が聞きたいの？ それだけ、じゃないよね……？
こんな遅いんだし。

いや、うんまあ、こんな時間帯に起こされたとしてもこんなに可愛すぎる光を拝めたんだから逆に神様に感謝しちゃうほどなんだけども。

……言葉遣い、おかしくない？ しいて言えば、うふふ、だとか。しかも口調もたどたどしいし、ちょっぴり幼い。

そう思いつつ光を見ると、にっこりと彼女は微笑んだ。

「あのね、あのねっ」

「う、うん？　——わわっ!？」

突然急に声が踊ったかと思うと、光が前かがみになってあたしの胸に倒れてきた。

腰辺りに抱きつこうとするから、あたしはしゃがみながら慌てて受け止める。

「いい気持ちなのー」

そう言って、光はまた微笑む。

そして、ぎゅうつとあたしに抱きついてきた。

「ちょ、おまつっ。光さんっ!？」

一体何事!？」

そう思いながら息を吸い込むと、光が使っているフローラルなリンスのいい香りが鼻腔をくすぐる。そしてそれとは違う、別のかすかな甘ったるい香り。これはお菓子か何かだろうか。

「ど、どしたの？　わっ……!？」

つと背筋を撫でられて背中の中ドアへ尻もちをついてしまう。そんなあたしの膝の上に乗るようにして、光はまた抱きついてきた。

……あ、あたし、押し倒されてる!？」

「ひ、光っ、何を」

「なあに？　李緒は私のこと嫌いななのー？」

ご乱心ですかーっ!？」

とりあえず離れようと小さくて華奢な肩を押し返そうとする。

ところが、頬を膨らませて、時折彼女が見せる子悪魔と呼べるであろう表情で光はあたしに顔を寄せてきた。よくよく近づいて見てみると目がとろんって潤んで、しかも頬が上気していたりなんかするから、その姿は可愛らしいを通り越して、妖絶。そんな雰囲気醸し出していた。

「だから、誰もそんなこと言ってなくてっ」

言った覚えなんてない！　まさか誰かから聞いて怒ってるのか…

…？ それは誤解つてもので。

「私はねえー？ ……好き。李緒、好きだよおー」

「あ、うん、俺も……ってっ」

ぎゅっと小さな身体であたしを引き寄せてくる、光。

だから何しようとしてるんだー！？

好きなのは分かった。うん、あたしも好き。大好き。……けど、どうしてあたしの顔目指して迫ってくるんですかー！？

あたし、例え親友だとしてもそんなことする趣味なんてないわけで。将来添い遂げるであろう人としかしたくないわけで。

っていうかおまつ、仮にも好きな人である相良に悪いって思わないのかー！？

——「好き」

唇にひどく甘ったるい言葉と共に熱のある息がかかった。

その言葉にじたばたしていた身体が固まる。鼓動が不必要なまでにドキドキと高鳴っていた。

あれ？ どうしてここで止まるのあたし。どうして、こんなにドキドキしてるの？ いくら光が可愛くても……？ 光、女の子なのに。親友なのに。しかもどうして光は？ あれ？ あれ？

ぐるぐると頭の中で考え事が回る。そんなことを考えている間にも光は顔を近づけてくる。綺麗な朱色の唇が近づいてくる。

「ん……」

「っ……」

光はふいに目を閉じた。あたしも、ぎゅっと、目を瞑り今からやつてくる何かいけないものに堪える。

——ところが、待ち構えていたものは来なかった。その代わりに。「光、ちよつと！」

目を開けると目の前にはショートカットでボーイッシュな感じの綺麗な少女が。

そして、あたしの首のあたりからは安定した小さな寝息が聞こえてくる。

はい？ ……寝息？ 寝た？

それをやっと理解して、今のこの状況に焦る。

「いや、これは別に変な関係なんかじゃなくて」

帰ってこないかと思ったら……なんて呟いている千代に早口で語りかける。光も何とか言って欲しい。寝てるけど。

何を言われるか待ち構えていると、

「もう、チヨコレートボンボンなんかで酔うなんて！」

「……はい？」

酔ってる？ 確かにこの光の奇怪な行動には頷けるけど、まさか

……！？

光に顔を近づけてくんくんと犬のように嗅ぐ。

「チヨコの匂い？……」

チヨコレートボンボンってあの中にウィスキー入ってるやつ？

あんなので酔う人って……。

「言っとけば良かった……」

溜息をついてあたしから光を引き剥がす千代。

ここに、いたみたいだ。長年付き合ってるけど、そういえば光ってアルコール飲んでるとこ見たことなかったなあ……まあ普段飲んでいるほうが珍しいんだろうけど。でも、そういえばお正月に甘酒も飲んでるところ見なかったし。……あたしの知らない光もいるらしい。

（……とりあえず、変なことにならなくて良かった）

昼間のことみたいになっただけあたし一人じゃ誤解を解く自信なんてない。そんな風に思いながら床に手をついて立ち上がる。

すると、ふいに千代と目があった。千代の表情が疑惑めいたものになる。

「まさかこんな光に何かしたんじゃないでしょうね……？」

千代は軽蔑の視線をあたしに送った。

「ち、ちがっ」

「……」

じいつと見詰め合うあたし達。

……結局、睨めっこは千代の負け。千代は、はあ、と溜息を一つついて呆れ顔になった。

「ま、そんな度胸李緒クンにないか……押し倒されてたみたいだし」

「あのねえ？」

何気に酷い。

まあ、当たってはいるけど、それ男の子に言う台詞じゃないでしょ？ まああたしだから気にしないけど。

「送っていいこうか？ 光、何だか気持ちよく寝てるみたいだから起こしちゃだめだし」

「そー、ね。変なことしたら承知しないから」

少しだけ睨まれながら光を預けられる。

あたしは野獣か！

そう突っ込みたいのを押さえて、あたしは光を。

「よっと……」

自身の首に、光の手を回させて、腰に手をあてて抱かえた。

柔らかい感触。それと女の子特有の甘い香り。軽すぎる光にちゃんとご飯食べてるのかなー、なんて心配しちゃうけど、そこは女の子だから言っても無駄かな、なんて思う。あたしも昔は少しくらい気にしてたから。まあ、気にしてるだけで食べちゃうのがお菓子の甘い罠なんだけどー。

そんな風に、あたしが光に触れて嬉しい余韻に浸っていると、千代から視線を感じた。

「どっかした？」

「……別に」

ふい、と視線を逸らされ前を歩かれる。

……変なの。まだ昨日のこと、気にしてるのかな？

それから、その日はそのまま光たちの部屋へ光を送り届けてやっ
と、あたしは安息を得に、自部屋に戻ったのだった。寢床に戻って、

目を瞑ってから思う。

(に、しても……あの感じ、なんだったんだろう)

あれはあたしが男の子になってから一度も感じなくなってしまったもので。当初、あたしはあれを得て、確立するために普段行かない、混んだ神社まで行っていたわけで。

(……ああもう、なんだろ。寝れない)

完全にあたしが動作を止め、沈黙すると、いつもよりもざあざあ
と雑音のようなものが聞こえる。

それから、寝るまでに時間をかけながら、ゆっくりとあたしは夢
の中の世界へと旅立ったのだった。

(13) 夢の続き

修学旅行の最終日。

それは基本自由行動が主体となり、生徒にとって特に好きずきの場所へ移動できるという楽しい日和。そして、最終日ということではみんなのテンションもうなぎ登り。絶対に楽しい、ということは保障済みな日。

そう、修学旅行の最終日っていうのは、そういうものだ。

しかし。

しかし、だ。

今日も運良く晴れ——気付かなかったけれど、昨日の夜は雨が降っていたそう。だから、ちょうど深夜中にやんでくれたおかげでラッキー。これで懸念なく修学旅行最終日というイベントを楽しくおくれる、と起きぬけだったあたしは喜んでいた——なのに。

残念なことは昨夜とある理由で眠るのが遅くなってしまい、寝不足なこと。

——ピピピッピ。

「三十八度五分ね。結構、高熱だわ……。平西くん、残念だけど今日は部屋で休んでなさい」

思いつき、風邪をひいてしまっていたことだった。

「ま、まじですか……？」

椅子の上から身を乗り出して、人の良さそうな柔らかい顔立ちの女性に問いかける。

すると。

「まじです。おおまじ」

きっぱりと、あたしが入学したのと同時期に転任されてきた保険医のセンセは首を縦に振って肯定する。

「や、でも俺全然元気っていうかっ。ほ、ほらセンセ」

何度かジャンプして自分は元気なんだ、とアピール。修学旅行中、

部屋で寝てなさいとか言われたら、普段能天気なあたしでもさすがに凹む。あたしが必死なのを見てか、センセは小さく息を吐くと。

「……それじゃあ、その場で三周だけ回ってみて。それで大丈夫なら行かせてあげてもいいけど」

「ホントっ、センセ!？」

あたしはそれくらいなら、と思う。だって、熱はあってもそんなにしんどくはないから、回るくらい動作もなくできると考えたのだ。くるくるくる。

回る、回る、その場で三周回る。

ほら、全然なんとも――。

ぬか喜び、そう、ぬか喜び。

「――あ、あれ？」

くらり、と身体が揺らめき、椅子にへたりこんでしまう。そして、頭にくらくらとした酔いがまわってくる。普段なら、全然へっちゃらなのに、だ。

「言わんこっちゃない。今日は自由行動でしょ？　つきっきりで診てるわけにはいかないし、残念だけど、ね？」

センセは優しく諭すようにあたしに言う。

そしてあたしは。

「……はあい」

さすがに駄々っ子のようにやだやだっというのも恥ずかしいので、決まり悪げに頷いたのだった。

(っ、疲れたああ……)

精神的にも、体力的にも。

それはついさっきまでクラスメートに風邪ひいたことを隠しながら一緒に朝ご飯を食べていたことと、その時一緒に回ろって言って誘ってくれるトモダチの誘いを断っていたりしていたりしたこと。

……うん、疲れた。

そして、考える。

(――さて)

さてさてさて。

(どうしたものかなあ……)

やることがない、というのはいいことであり、悪いことでもある。ここは保険のセンスが借りている部屋で、トモダチはもちろん、彼女も今職員会議中で部屋を空けており、ここにはいない。そしてあたしといえば、センスに寝てなさいと言われたため部屋をこっそり抜け出してトモダチに会いに行くわけにもいかず、布団の中にくるまっていたのだった。最後に、現在部屋にはあたしみたいな境遇の生徒はいないようで、この広い部屋の中で一人ぼっち。

とっても、暇だった。

(まあ、悩むことはいくらでもあるんだけど……)

そんな風に考えながら、ちくしょー、と誰も見ていないのに寝たままの格好で腕を目の前にやって泣き真似を試みる。むなしい。

そう、悩むことはいくらでもあるのだ。例えば、まだ食べ残した北海道名産のお菓子があったのにー、だとか。あの気持ち悪いように可愛らしいと評判のマリモ人形、どんな顔で祐二に渡そうか、とか。

そして、他には。

(……昨日の光とのこととか、ねー)

今日の寝不足の原因。

昨日光に、夜中押し倒されて、ちゅーされかけて、ドキがちよつとむねむねした。

ま、まさか、光に胸がときめくとか、……あり得なすぎる。

確かに、光は可愛い。うん、世界一。あの愛らしい容姿、愛くるしい仕草。それで、性格まで可愛すぎるから、抱き締めたくなることなんてしょっちゅうだし、押し倒したくなることもしばしば。でも、そこには親愛はあっても決して情愛はなかったはずで。

(う、あ……)

そこで、くらりと今更ながらにひどい目眩に襲われる。

（なんだか変なこと考えてたら本気でしんどくなってきたし……）
しんどい。

こりゃ自由行動行かなくて正解だったかもしれない。途中で吐き
気とか催したら、みんなの迷惑だしね。

——そう思ったとき、ぴんときた。

（あ、そーいう……ことか）

その時、昨日の疑問は晴れた。

たんに、あたしは、あの時から風邪だったんだ。

思えば簡単なことだ。きっとあの時も風邪をひいていて、正常に
身体が機能していなかったんだと思う。現に、今も胸を抑えると、
いつもよりも速く鼓動していることが確認できる。

（悩んで、損した。……それに、女の頃から男っぽかったあたしで
も、さすがに女の子に恋なんてしないって）

そんな簡単なことに気づかなかったとは。

そう思うと、あたしはぐったりと、今までよりも深く布団の中に
入るときゅうっと目を閉じる。

そして、あたしはそのままゆっくりと、喉に引っかかっていた小
骨がとれた気分と徐々に酷くなってきた倦怠感にとらわれながら意
識を飛ばしていったのだった。

◇

近くには、小さな鞆や野球ボールが転がっている。そしてあたし
が寝ている隣にあるのは、今となっては見つからない昔大事にして
いた熊の縫いぐるみ。

ここは小さい頃のあたしの部屋、だろうか。

ということは……これは、夢？

滅多に引かない風邪なんて引いてしまったから、昔の夢なんて見
ちゃったんだろうか。

「りっちゃん。大丈夫？」

愛らしい、小さな男の子があたしの目の前にいる。

彼は小さな手で、あたしの頭を撫でてくれていた。
気持ちいい……。

「うん。——くんが来てくれたから」

「よかった……。りっちゃん、おタオル替えるね……。？」
ぴたりとひんやりとした感触が頭に伝わる。

「ありが、と——」

知っているけど、知らない。名前が、思い出せない。……。彼は、
誰なんだろう？

もっとよく見せて。もっと。

——しかし、悲しくもそこで夢はぷつりと途切れてしまった。

◇

あたしは、その時おでこのひんやりとした心地よい何かによって
眼を覚ました。

（あ……。れ？）

目を覚ました、と思ったのだけれど、そこには依然として変わら
ない少年が一人。顔は、やはりボヤけていて見えない。

先ほどまで見ていた夢の内容は既に消えようとしていたけど、そ
の時はしっかりと覚えていた。

（まさか……）

ぼやけた目をぱちぱちと瞬いて視界がはつきりとするように促す。
……これは、夢の続き？

じゃあそこにいるのもしかして——！

何か、よく分からない淡い期待を胸に秘めて何度も目を瞬くと。

「あ、あれ、さ……。がら？」

ボヤけていた視界が急に綺麗になる。そこには、目を細めてあた
しを見つめる彫りの深い端正な顔立ちの少年の姿があった。

「と、起きたのか……。？」

あたしはこくりと一度だけ頷く。

あたしの反応を見て、そうか、と相良は微笑んだ。

どうして、相良がここに……？ それにあたし……。

先ほどまで思っていたことが、すっかりと忘れてしまっていた。
どうしてあたしはあんなに……まあ、いっか。

「水あるけど、飲めるか？」

「んー……？ あり、がと」

「ん」

ミネラルウォーターの入ったペットボトルを手渡され、お礼を言
いながらキャップを回す。そして起き上がろうと腰に力を入れた―
けれど、上手く力が入らず、起き上がることができない。どうや
ら、熱のせいで全身の力がぬけているらしい。

「ええっと、あの……」

どうしようかと考えていると、突然相良が首に手を入れてきて―
。

「――え」

あたしの持っていたペットボトルを奪うと、そのままあたしの唇
へとペットボトルの口を近づけていった。

唇にペットボトルの口が触れて、こくり、こくりとゆっくりあた
しの喉を通っていく無香料で無味の液体。

「もう、いいか？」

相良が何でもないように問いかけてくる。一瞬、ぼけっとして相
良を見つめていたあたしは――。

「お、おまつ、なんて恥ずかしいことを……！」

かあつ、と顔に血液が集中し出す。どうやら頭にはミネラルウオ
ーターの冷たさはいかなかったらしい。

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい、悶え死ぬっ！！！？

「ったく……しょうがないだろ？ 李緒、飲めそうになかったし」

「う、うー……」

頬を掻きながら、さらりと悪気もなく言う相良に、あたしは何も
言えない。そして、恥らっているあたしを見てか相良は口元をにや
りと曲げると。

「何なら口で飲ましてやっても良かったんだけど？」

「ばっバカ、相良の変態！ 痴漢！！」

大声で言う、耳が痛そうに相良は顔を歪める。あたしだって喉が痛い。風邪なのに。

「あ、あのなあ……それは言いすぎだろ。どうせ男同士なんだし……」

それを言われて、あたしは黙り込む。

そ、そういえば。あたし、もう男なんだからあれくらい相良にとつたら普通なの……？　へ、変なのあたし？

あたしがさっきの非礼をいちおう謝ろうかと相良を見つめると、彼は片手で濡れタオルを摘まんで、突然もう片方の手のひらをあたしのおでこに当てた。

つ、次は、何っ！？

「でも」

濡れタオルとは違うひんやりとした感触が頭に気持ちよく伝わってくる。相良は。

「ん。もう大丈夫みたいだな」

そう言っつて爽やかに微笑んだ。どうやら熱を測っただけ、らしい。（――っていうか）

は、恥ずかしすぎる！　神様、助けて……！！

あたしは気恥ずかしさにまた、悶えた。

どうしてこの色男はこんなこっぴどかしいことをさわりと言うことができるんだろうか。やっぱり顔が良くなってきたらこんなことも普通に言えるようになるもんなの？　そうなのっ！？

「な、なananなんで相良、こんなどこにいるの？　っていうかセンセは？」

そんな、恥ずかしい思いから離れるべく、とりあえずあたしは差し当たりのなさそうな話題を相良に振る。

かなり、どもりながらもそう言っつと、相良はあたしの額から手を離して。

「ああ、先生はさっきまでいたんだけど、俺が来たら任せたって言
って行っちゃったんだよ。保険医って忙しそうだしな」

「え。俺が風邪とかっ、……どうして分かったの？」

そこで、気づく。

一体どうしてあたしが風邪ってことを知っているんだろう。ちゃ
んと、誰にもばれないように朝食のとき隠していたはずなのに。

そうあたしが言うのと呆れたように相良は言った。

「あんな李緒。お前、分かりやすすぎ」

「え？」

あたしの間拔けな表情が面白かったのか、ぷつ、と相良は吹き出
す。

「自分が一人百面相だって知ってるのか？」

「ひ、一人百面相!？」

何、それっ。

確かにあたし、馬鹿だから顔に出てたかもしれないけど、……そ
んなに!？」

相良はもう口元を抑えて笑ってしまっている。一通り笑い終わる
と、ゆっくり息を吐いて。

「で、お前が具合悪そうにしてたから気になってメール送っても返
って来ないし。来てみたら案の定ってわけ」

その声で枕元にある携帯電話へ視線を移すと、サイドディスプレイ
が点滅していることに気づいた。しかも、色から相良からのもの
だと分かる。

そう言えば、マナーモードにしてたんだっただ……。

「でも、修学旅行なのに。最終日なのに……」

事態に気づいて、急に罪悪感がつる。相良だってあたしと同じ
ように修学旅行最終日を楽しみたかっただろうし。高校生で一番の
思い出作りの機会だ。あたしと違って大人っぽい相良でも、そうい
うのは大事だろうと思うし。

そんなあたしの台詞を聞くと相良は。

「バカ。お前が辛そうだったのに、楽しめるはずないだろ？」

「……………」

齒の浮くような台詞をあたしに向かって言い放った。

ううう。それ、もしあたしがまだ女だったらときめきもんだぞ！

今日の相良は、とっても心臓に悪い。たんにトモダチが辛そうだったら助けてやるのが普通って言う意味なんだろうけど、元女なたしからしたら、とっても心臓に悪い。

今日は悶える日。そう、悶える日。風邪でも悶えたし、相良でも悶えたし。なんというか、悶える日。

「そうだ」

「え？」

そんなふうにあたしが内心悶えに悶えていると、相良は思い出したように言った。

「一つ、聞きたいことがあったんだ」

まだ何か恥ずかしいことでも？　と思ったんだけど、今までと違い相良の表情は驚くほどに真剣で。その口調は、とても真摯だ。

相良がこんな顔をするのも珍しい。思えば、あの相良と仲良くなつた日サッカー部に誘われたのと同じような表情。

「……勘違いかもしれないけど、ずっと思ってたんだ。李緒、お前もしかして——」

ゆっくりと、噛み締めるように言葉を口から捻りだしていく相良。一体、なんだろう。

そう思いつつ、聞き耳を立てただけけれど。

——ガチャン！

その声は突然の騒音によって遮られた。一体誰、とあたしと相良は視線をドアへと移す。

「り、李子っ、風邪引いてたってほんと！？」

すごい剣幕でやってきたのは——意外にも光。髪も乱れていて息も絶え絶えで、急いできたのがすごく分かった。

「ひ、光落ち——」

「李子大丈夫なの！？ 朝しんどそうだったから試しについてさつき先生に聞いてみたら高熱だって――」

マシンガントークのような口調で一氣にまくし立てる光。よっぽど心配してくれているんだろうか。その態度に嬉しさを感じつつ、やっぱり相良の言うとおりあたしって一人百面相なのか、と思いつつ。

「お、落ち着いて光、全然大丈夫だから。それに」

さ・が・ら・が！ と口パクで相良から見えないように伝える。

あつ、と口を抑えて驚く光。

さすがに相良の前で李子って呼ばれたら驚いちゃうってもー……。えっと、まあ……。いいや。それより、相良。さっきの話の続きって」

あ、あ、あ、とパニックを起こし始めた光は時間がたったら戻るとして、とりあえず、さっきの重大そうな話の続きが知りたい。

あたしは視線を移し、相良に問いかけると。

「ん？ ああ、いや、……。また今度でいいかな」

「……そう？」

気になるけど、まあいつか。光が近くにいたら話せないことなのかもしれないし、ね。

「李緒、帰りは隣同士になれて、良かったね」

「ん、そだねー。あ、あれが百万ドルの夜景ってやつだよねっ」

隣では彼の親友と、可憐な少女が小さな声で楽しそうに話している。

「(李……子。まさかとは思ってたけど、やっぱり……)」

人知れず、彼は小さく口の中で呟く。飛行機の窓から見える夜景は、酷く煌びやかに思えた。

時はたつて、今は地元まで飛行機で戻り、真っ暗がりの中、ジュースの自販機の前で光と二人つきり。

それにしても。

「もー、びっくりしたよ、光ってば。相良の前で李子って」

「だって、……心配だったんだもん」

拗ねたような表情で光はそう答える。

「……可愛いなあ。ほんと」

なんといういじらしさ。悶えた。

あたしは軽く二度、光の頭を撫でたのだった。

これで、あたしの北海道二泊三日修学旅行は終わりを告げる。最後に、言っておかなければならないことと言えば、パニックを起こした光はひっじょーに可愛らしかったことと、夜の飛行機から見える夜景は最高だったってこと、……かな。

にしても、相良何が言いたかったんだろ？

やっぱり、最後まで聞いておかなかったことを後悔するあたしだった。

(14) パンプキンシフォン

さんさんと照らす暖かい日光の中。

場所は学内からでた、誰も寄り付かなさそうな木陰の下。

ブレザーも脱いでブラウスだけでもちよいどいい、今はそんな温暖な季節。色んなことがあって騒がしかったり楽しかったり驚いたりした修学旅行も終わり、あたしは日常という平和で何事もない日々に戻っていた。

そろそろ夏服を用意しなきゃいけないかなーなんて考えて。また光と祐二についてきてもらって買い物にでもいこうかなーなんて思い付いて。果然と先のことを気楽に考えながらのんびりと時間を歩んでいた、そんな日のことだ。

「好きです。……付き合ってください」

「――へ？」

まさか、こんな奇妙な展開に遭遇するなんて、少し前のあたしは、これっぽっちも予想していなかったわけで――。

――――

「あったかいー……」

日向ぼっこ。

ブレザーを脱いで、ブラウス姿のままですらーんと窓際の席に座りながらあたしは机の上にだらしない顔をのせ寝そべっていた。

恥？ 知るもんか。この気持ちよさは羞恥を超えるわけです。

「だーかーらー。ヒーローってのは実在するんだよ。ほら、この前の立て籠もり事件とか」

「ああ、あの美女が立て籠もり犯を倒して被害者を救ったってやつか？ ……俺は警察の誇張だと思うんだけどなあ。犯罪防止とかに」

「でもそれが昔からだってんだからおかしいだろ？」

「まあ、それは確かにな」

楽しそうだなー。

隣では、ケンちゃんと相良が昔から騒がれている都市伝説について話し合っている。昔から騒がれているヒーローは実在するかという話で。

あたしは、そのままの格好で2人を見つめながら男の子ってそういうのやっぱり好きなんだな、とのんびんだらりと考えていた。

(……寝ちゃいそ)

今は、ちょうど昼食を食べ終わったところ。みんなが待ち望む、お昼休みってやつだ。

それで、ついさっきお腹がいっぱいになったあたしといえば、こうして満腹による幸せな余韻に浸っていたというわけ。

……ん？

んー……でも、何か引かかる。

何かど忘れしてたことがあるような？

「あっ！」

「ん？」

あたしの突然の奇声に、2人が同時にあたしを見つめた。

「そだ。そーだっ」

「どうしたんだ？ 李緒」

いきなりテンションが上がったあたしに向かって相良が訝しげな声をあげる。

「へっへー」

それを見て、あたしはそんな風におかしな笑みを作ると、座っている自分の席の横に吊るされている紙袋を机の上に置いた。そしてその中の袋を取り出すと、

「じゃじゃじゃーんっ。家でお菓子作ってきたんだー。いっぱいあるから食べて」

中から出てきたのは、小さな袋に入った、昨日暇つぶしに作ったシフォンケーキ。

材料費は安いし、大量に作れるし、味はとっても甘くて美味しいでいいこと尽くしなお菓子だ。まあ、今回はケーキって言っても一口サイズなだけだね。

「お、気が利くじゃん」

「でしょー。相良も、はい」

「ん、サンキュ」

ひよい、とあたしから一つシフォンを奪い取るケンちゃんとお礼を言って受け取る相良。

「それじゃ」

そう言っであたしは立ち上がる。右手には、小さな袋がいっぱい入った紙袋。

「あれ？ お前もここで食わねーの？」

そんなあたしの行動にケンちゃんが首を捻りながら問いかけてきた。

「あ、うん。みんなにもあげようと思って。最近新しいオーブン買ったから調子に乗って焼きすぎちゃってさー。……あ、もしかして俺がいなくなったら寂しい？」

「そうなのか？ 健一」

「ちげえーよッ」

おちゃらけてそう言っていると、横で相良も乗ってくれる。それに対してケンちゃんが怒ったように手に持っていたシフォンを口に入れて噛み砕いていた。

（な、何これっ……！？）

あたしが男の子たちに適当にシフォンをあげに回った後、女の子たちが集まっているところに目を向けると、何やら楽しそうに円形に囲って手先を動かしていた。

……怪しい。何かの宗教活動みたいだ。

ま、まさか。新しい占いの儀式！？ 女の子ってそういうのに敏感だから……！

「や、やつほ」

あたしは、微妙にびくびくとしながら軽い挨拶をする。そうすると、一斉にあたしへと彼女たちの視線が向いた。

「あ、李緒クン」

まず、初めに言葉を発したのはショートヘアで綺麗な顔をした少女――千代だ。彼女も、何やら同じように輪に交じって怪しい事をしている。

（この儀式、一体何してんだろ……）

そう思いながら彼女たちに近づき、中心を見る。
すると、そこには生け贄の正体がいた。

ちっちゃくて、髪の毛長い可愛らしい少女――それは、みいちゃんだった。彼女は微妙にあたふたしながら、このおかしい状態のど真ん中にいる。

そして、もみくちやにされていた。

「……えーと、何してんの？」 「見てのとおり。みいちゃんの髪いじってるの」 「あ、ああ、そっか」 「李緒クン、何だと思ったの？」

「や、やー。別に……？」 「平西クンもやるー？ 楽しいよ？」 「

え、いいの？」 「えっ……り、李緒クン……が？」 「どんな髪型がいいかなー」 「んーと、三つ編にさせてヘアピンで束ねてアップしたりとかみいちゃんに似合いそうだね」 「あ、あの……」 「あ、

それいいねー。よし、早速やつちやおー」 「ん。あ、俺がやってもいい？」 「え、ええ……っ」 「あははー。冗談だつて。俺そういう

の得意じゃないしー」 「できたらしたの？」 「したかも。あ、そうだっ。はい、これみんなにあげる」 「何々？ あ、ケーキ」 「え、

ほんと？ ありがとーっ。これ手作りだよねえ？」 「ほんとだ。おいしそー」 「食べてみてもいい？」 「おいしいーっ」

どうやら、真ん中にみいちゃんがいたらしい。みいちゃんはちっちゃくて可愛いので、周りに人が囲むと時々見えないことがある。で、長くて綺麗な彼女の髪を弄って遊んでいると。みいちゃんには悪いけど、これはしょうがないなあ、と。髪を触られるのは、髪が

長くて可愛い子の宿命です。

そんな風に、理不尽なことを思いつつ、みんなと一緒にお話をして、ふと思う。

——なんだか、物足りない。もう、致命的に何かが物足りないっ！

「……あれ？」

そこで、気づいた。

「ところで、光は？」

そう言えば、いとしの光がいないのだ。見渡した限り、どこにも。そんな問いかけを拾った千代は、あたしに向かって話しかける。

「光なら、何か知らないけど用事があるからってご飯食べた後どこかに行ったわよ」

「ふうん？ そっかー。ちょっと話したい事あったんだけど……まあ、別に帰りでもいいかな」

そうあたしが呟くと、お洒落眼鏡がチャームポイントなトモダチが「あ」と思い出したようにいった。

「私ついさっき窓から見たんだけど、裏の花壇のほうに出て行くの見たよ。一人だったし、どこに行くのかなーなんて思ってたんだけど」

「え、ほんと？」

それは予想外。

「うん。何だか難しい顔してたけどなんだったのかなー」

「ありがとー。探してくる」

あたしは、すぐ見つかるかな、と思い立ち上がる。

難しい顔？ 一人？

もしかして光、お腹痛くなってトイレへーや、や。光はものすごく可愛いから欠伸もしなければいけません。トイレなんてなおさら行きませんっ！

……って、トイレくらいは行くか。去年までは一緒に行くのが習慣だったし。ていうか、それ以前に向かった先が学外だったら腹痛ってこともありえないだろう。どうしたのかなー？

そんな馬鹿な思いを胸に、あたしは最後にとっておいた小さな光用の袋を手に、教室を出たのだった。

「どっこかなー。光……」

ここは学校からちよつと出た、中庭の花壇の前の長椅子。あたしは今、光が見つからないので花壇の近くにある木製の長椅子へと座っていた。隣には光用のシフォンが入った小さな袋。

こちら辺に来たって聞いたから来たんだけど、いない。どこにも見当たらない。もしかしたらすれ違いに中に入っちゃったんだろうか、と思う。

せっかく外まで出てきたのに、残念。

(でも……)

中庭の芝生の部分を見て、気持ちよさそうだなあ、と思う。

外は思ってた以上に暖かくって、気持ちいい。男は外に出すぎたら毒だとはいえ、恥もへったくれもなければ、今すぐにさっきの寝そべりの続きを開催したい気分だ。

(もうちよつとろうついてから探そうかな……それからまたあの日当たりのいい席で)

むふふと気持ち悪く笑うあたし。

そんな風に、呑気に今から行う動作を考えていたとき、小さな風がふわりと流れてくる。

ああ、気持ちいい――。

「――」

――い？

誰か、男か女かもよく分からないけれど、小さな会話のようなものが風に乗って聞こえてきた。

(もしかして、光?)

そう思っすつと立ち上がる。そして、そろり、そろりと声の聞こえたほうへと向かった。聞こえてきた方向はまだ探していない、花壇の裏の校舎の方向だ。

そこは、人があまり寄り付かなく、校舎の窓からは見えない場所。もしこんなところに光がいるんだったら、何してるんだろ、と思っ
って軽く角から覗くと――やはりというか少女の可憐で可愛い
後ろ姿が見えた。

「ひ――」

光、何してんのー？ と、あたしは彼女に遠くから呼びかけよう
とする。

だけど、その時。

「好きです。……付き合ってください」

「――へ？」

突然の、そんな熱っぽい声が聞こえてくる。

それは低い、男性の声で。あたしはさっと校舎の角に隠れると、
こっそりと顔だけだして中を覗いた。

（ま、まさかこれ告白現場ってやつですかー！？）

気づかなかったけれど光の近くには男らしい男性が一人いたら
しい。遠くからだからよく見えないけれど綺麗に鼻筋の通った、中々
の美形だということが分かる。そして、その高い身長と三年生だ
という証の、黒いネクタイから一つ年上の先輩だということが分か
った。

光がモテてるのは誰よりも知っていたけれど、こんな告白現場に
立ち会ったのは、初めてだ。

あたしは、光の反応を待つ。もしあたしが光だったら、一年前
までは心躍るようなイベントである。

光、どうするんだろう。やっぱり、断るのかな、なんて思っ
てい

ると、
「……ごめんなさい。申し訳ないですけど、初対面の人とは付き合
えません」

案の定、光は申し訳なさそうな声で先輩へと断りの返事を告げた。
「そう、か。……じゃあ友達からじゃ」

振られて、なおも食い下がろうとする先輩。

そこまで光のことが好きなんだろうか。確かに分かる、というか、光は歩いているだけで人を虜にしちゃうほどの可愛らしい子だから、当然といえば当然なのかもしれない。同性のあたしからもそう思ってしまうほどだから、よっぼどだと思うし。

「好きな人、いますので」

「そうか……」

光の、きっぱりとした口調。

知っている、あたしは光の好きな人のことを。

「それじゃあ……私なんか好きだなんて言って下さり、嬉しかったです。失礼します」

やばっ……。

光がこちらに向かってきたことに気づき、あたしは急いでそこを立ちさった。

こんなところ見られたら後で何言われるか分かんないよ。普通、こういうシーンって他人に見られたくないもんだよね。

それに、覗いた罪悪感が、今更でてくる。そして、なぜか告白時からずうっと胸を痛ませる、嫌な気持ちも。

後者に対して何故だろう、と首を捻りたくなりながらあたしはもう大丈夫だと思える場所まで、スピードを落とさず早歩きを止める事はなかったのだった。

人通りの少ない校舎の裏側の道を歩きながら、少女は早くその場から立ち去りたいと願った。

私は、小さくため息をつく。

好きでもない人に告白されても、嬉しさ以上に困るのだ。私は、片思いの辛さを知っているから余計に。

私なら彼から想いを断ち切られたくないから、だから告白なんてできない。まだ、勇気なんてでないのだ。今以上の関係になりたいけれど、断られたらもう、終わりだ。諦めるつもりはないけれど、

やはり辛い。そして、今のままではまだ断られるのくらい分かってる。彼は優しい人だから、きっと。

だからこそ、思う。

あの先輩はきっと勇気を振り絞って告白してくたのじゃないだろうか。

それを断るのは正直、胸が痛んだ。

校舎の中に入れば少しでもこの嫌な気持ちが紛れる。彼の顔を見る事ができれば、きっと。

そう思い、中庭まで出たときだ。

彼女は木製の長椅子に乗った小さな袋に気づく。

(あれ、何かな……?)

少しの好奇心もあったけれど、包みが私の愛する友人がいつも使うポップなクマのイラストが小さく入った袋に似ていたからだ。

近づいて、中を開けた。鼻腔を甘く美味しそうな香りがくすぐる。

(……これは)

胸が高鳴る。

(これって私の大好きな――)

その瞬間には、彼女の中で嫌な気持ちはすっきりと消え、そこには幸福感だけが漂っていた。

最悪。

あたしは苛立ち紛れに手を動かす。あたしの両手にはテレビゲームのコントローラーがある。

どうしてこんな気持ちになるのかが理解できないけれど、独占欲からからだろうかと今更ながら思った。

あの後帰り、あたしは光と帰っていたのだけれど、いつもよりもテンション低めに対応してしまったように思える。彼女は何も言わなかったけれど、もしかしたら内心嫌に思っていたかもしれない。それに、今頃気づいたのだけれど長椅子にシフォンケーキを置いた

ままだ。あの時は急いでたからかすつかり、忘れてしまっていた。
(明日行ったら腐っちゃってるだろうなあ……せつかく、アレだけは手間かけて作ったのに)

あたしの目に映るのは、あたしの部屋とは違う薄いパープルの壁紙。壁には有名な男性アイドル歌手のカレンダーが貼っており、テレビラックの中には何が入っているか謎なラベルの張られていないDVDがたくさん置いてある。そして、他にあたしの部屋とは違う特徴を述べるとあんまり物がない。テレビとか、本立てとか、あるものといえば女の子と比べると比較的実用的な、そんな部屋。

そう、ここは私の部屋じゃない。弟の祐二の部屋だ。

「兄ちゃん、告白でもされたのか？」

そんな問いを、弟と一緒に新作のゲームをしているときにされた。ぽかんと、あたしは祐二を見つめる。

「……えーっと、祐二くん。とりあえず聞くけどなんで知ってるのかな？」

丁寧にあたしが問いかける。

まさか……まさかまさかまさかまさかまさか！

そんなおかしいな曲解した噂が、学校に広がっているんだろうか。

「別に。んな難しい顔してゲームしてんだから、何かあると思うのは当然だし——おっし、スターゲットっ」

「お、おまつ、ずるいっ。……や、俺じゃないんだけどさ。告白されたの」

男の子からの告白なんて、生まれて一度とすら経験した事などない。そう、あたしはモテないのだから！

……自分で言ってる何だか悲しくなるけど。

「先輩？」

その言葉に思わず驚く。

「……そ。なんで分かったの？」

「まあ、先輩は昔っからよくモテるし……兄ちゃんもおちおちしてらないんじゃないのー？ 彼氏でしょ」

まあ、それもそうか、と思い、そして祐二の口からでたその発言にため息をついた。

「や、だからね？　俺とあの子はそんな仲じゃないって」

「ふーん？」

全くどうして信じてくれないのだろうか。やっぱり、あれか。入学式のときの、あれなのか。

確かにセクハラはしたけど、いい加減勘違い止めて欲しい。なんていうか、悲しくなるから。

「てか。付き合っていないんだったらさあ、なおさらじゃない？」
「へ？」

どういうことだろう、と思い首を捻る。

「だってさあ、あの先輩だよ？　いつか、とられるかもしれないじゃん。そうになったら、どうすんの？」

「俺は……」

あたしは、一体どうしたいんだろう。

独占欲なんて言葉で、光の恋心を邪魔したいのか。

（それとも……）

あたしが思案していると、祐二が軽くあたしの肩をつついた。

「何？」

「あのさ兄ちゃん」

あたしが首を捻ると、祐二は目の前のテレビ画面を指差した。

「……さっきから逆走してんの気付いてる？」

「えっ！？　あつ。やばーっ！！？」

いつの間にか、画面の端っこには赤いランプが。

思いつきり逆走していたのに気づき、すぐにコントローラーの十字キーボタンを弄る。

そして、結果は最下位と惨敗だった。

「あーっ、もうやだやだっ！」

あたしは、木製の柔らかいベッドにダイブすると、大きい枕に顔

を思い切り押し付けていた。先ほど祐二とレーシングゲームをやっていた、惨敗したことが理由ではない。それはもっと重大な事が理由で。

でも、考えても答えなんてでない。いや、もう答えなんて出てるのかもしれない。

けれど、踏ん切りがつかないのだ。

——ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる。

「わぁっ!？」

突然のポケットからくる震えに驚いてベッドから飛び起きてしまふ。

（なななな、何? ……って、メール?）

震えている原因を取り出すと、それはクマのストラップだけがついた、飾り気のない携帯電話。

サイド画面を見ると着信、本条光とだけが書いてあった。すぐに画面を開くと受話器ボタンを押し、耳に当てる。

「えっと……もしもし」

『もしもし。李緒? 私だけど』

ありきたりな電話時の挨拶。

それを交わしながら、一体なんなんだろうか、と思う。光は普段大抵用事の時きもメールだから、今回のようなことは珍しい。

『……今日、ね。お昼のとき、見てたでしょ』

「あ……うううう、うん」

動揺するあたし。

耳元に聞こえてきた聞き心地のいい綺麗なソプラノの声に頷いた。まさか、そのことで?

罪悪感が押し寄せてくる。

「ごめん。見るつもりはなかったんだけど」

『分かってる。……断ってたよね。私』

どうやら、文句を言われる事はないようだ。

と、いうか光はそういう性格じゃないから、当たり前か。

「うん。にしても、光モテモテだねー。あんなカッコいい先輩にも告られて」

『意味、ないよ。傷つけるだけだし……それに私好きな人いるって言ったでしょう?』

努めて明るく言うのと、申し訳なさそうな声で光は言う。

そして、あたしはその時思った。

聞いてみたい。

光からの誰なのか口から聞いてみたい。だってあたしはまだ、光の口から相良が好きとは聞いていないのだから。

それは、ちょっとした疎外感からくるもの。

「……相手、誰なの?」

『まだ。……秘密』

口ごもるように言う、光。

あたしは少し残念に思いつつ、しょうがないか、と本音でもあり、真逆でもあることを告げた。

「そっか。俺さ、恋ってよく分からないから、下手なアドバイスなんてできないんだけど。頑張っ、ね」

今はまだ頑張っ、としか言えない。協力するなんて、言えないのだ。

『李緒』

「何?」

『恋の意味、教えてあげようか?』

「え?」

意外な光からの言葉に驚く。

(恋の、意味……?)

そして、光はゆっくりと、噛み締めるように語りだした。

『恋っていうのはね、その人のことが好きで好きで堪らなくなることなの。一人でいるときはその人のことばかりが浮かんできて、いつだって頭の片隅から離れない。ずうっと一緒にいたいって思っ。理性なんてなければ今すぐ触れ合いたいとも思っ。ウサギは

寂しくなったら死んじゃうって言葉あるよね？ あれと、一緒だよ。私だって、その人がいなかったらきつと今すぐ、死んじゃう。いつもね、その人はいつまでたっても気づかないけど、隣にいるだけですぐどきどきしてるの。好きで好きで、堪えないのよ？」

まるで告白するように、噛み締めて言う光。若干声が震えていた。もしかして今、光はあたしを相良と見立てて告白している気持ちなのかもしれない。

「それじゃあ、ね。例えば。例えばの話だよ？ その人に、好きな人がいれば……？」

相良には好きな人がいる。それはきちんと分かってる事実で、光にとっては知らない事。

光が諦めるだなんて言ったら、もうその事を告げて諦めてもらおうかとも思っていた。

でも、

「絶対、渡さないよ」

光は力強い声できっぱりと言い切る。

「……愛してるもん」

「そっ、かあ」

光は相良のことが好き。それは、知ってる。でも、今までは独占欲が2人を結び付けて欲しくないと言っていた。

でも、でも。光がこんな真剣な口調で、こんな告白じみたこというなんて。

——もう、こんな身勝手な独占欲は、いらない。

今までの、胸の中のもやもやがすつと消えたように思える。

あたしがそう決心した後、急に楽しそうに光が弾んだ声を出した。

「それとね、私が今日電話したのはね？ 李緒」

「……何？」

そんな変化に、不思議になって問いかける。

「パンプキンシフォン……美味しかったよ。また作ってね」
「へ？」

もう一度、光は言い直した。

「美味しかったよ、今日李緒が作ってくれたやつ。すつごく。ほんのり甘くて、すつごくタイプだったの」

「……ほんとっ!？」

あれ、食べてくれたんだ……。

置いといて、今頃腐り始めているんじゃないかとばかり思っていたけれど、どうやら気づいて食べてくれたみたいだ。

光の大好きな、かぼちゃ入りのシフォンケーキ。

(作って、……正解だったなあ)

あたしは幸せいっぱい新たな決意を胸に、思い切り胸を張って言った。

「今度は、もっと美味しいの作るからねっ」

光の恋が、いつか結ばれますように……。

(15) えろえろ、嫌い

今日は、もうほとんど夏だということで、朝風がなんともすがすがしい夏色日和。天からは身体を目覚めさせる素晴らしき日光が降り注ぐ。今は7月にちょうど入った頃で、あれから――あたしが男性化してから――もう3ヶ月も経つわけだ。それで、完全に順風満帆とは言えないのだけれど、この頃には朝起きたら髭を剃らなくてはならないという男子高校生の日常習慣も意識しなくてもできるようになってきていた。

ほんと、慣れてって怖い。

3ヶ月前のあたしの予定じゃ今頃男なんてやってられるかーつ、て投げ出してる気もしてたんだけどね。

まあ、そんな喜ぶべきなのか悲しむべきなのか分からないことが身についてきていたあたしといえば、現在、物凄くテンションがおかしい。高くも、低くも、されど普通でもなく、言いづらいけど兎に角変な感じ。それにはとある理由があるわけだったりする。

それは。

それは――。

「みんなおっは」

「李緒。お前、目元クマ酷いぞ」

――めちゃくちゃ眠いから。

寝不足。それは微妙にテンションを変にするものである。眠い。

「え、」

開口一番。

極めて元気に努めた挨拶をしようとしたのだけれど、いつも爽やかな相良が珍しく眉根を顰めて言ったのはそんな台詞だった。

「……そんな酷い？」

「酷い」

首を捻って問いかけると、きっぱりと言い切って頷く相良。

分かった。うん、分かってたんだけどね。光にも言われたから。それで、言われて更に感じるこの目元の倦怠感。しかも、またあの子に嘘ついちゃったっていう罪悪感。ああ、特に胸が痛い。今度何かして罪滅ぼししなきゃならないかな。や、でもこの寝不足の原因が罪滅ぼしにあたるんだろうなあ。

「実は、さー」

そしてあたしは光のときと同じ言い訳で、このクマの理由を誤魔化そうとした。ちょっと漫画にハマっちゃって寝るの遅くなったんだー、なんて男子高校生だったらよくある理由。

でも、あたしが言葉を繋げようとしたそんな時。

「夜更かししすぎなんじゃねーの？ えろえろだなー」

「だ、誰がえろえろかっ」

突然、酷く失礼な言葉が投げかけられる。誰からかというと、相良の隣に立っている坊主で体つきのいい男の子から。

（だあかあらーなんで男ってそっち方面に話を繋げようとするかな）

あたしはもちろん、そんな言葉は即座に撤回。

（てゆか、あたし元女なんですけど）

言いたい。言ってやりたい。でも、駄目。この身体で言ったら、ただの変人だ。

心中でため息。

こういう部分にだけは、まだ慣れない。

卑猥なこととか、スケベなこととか、変態なこととか、ねー。

相良とかケンちゃん達はそんな話題にあまり興味がないようで、まずそんな話題は振ってこないんだけど、今近くにいる彼は違ったりする。

なんか、大好きらしい。

根はいい子なんだけど、ちょっと困るなあ、と。別に他の男の子みたいにちょこっとだけ言うのなら話に乗れるのだけでもこの子の場合は違うから。

そんなえろえろな彼は、同じクラスの元気のいい男の子である。

ケンちゃんがいらない朝とかは大抵あたしと相良とこの子で喋っていて、スポーツの話題などで話も盛り上がることも多い。

余談だけど。

ケンちゃんは朝は必ず他のクラスのお友達と話しにいつてるようでここにはいない。どうやら相当ケンちゃんはその子のことを気に入ってるらしく、毎朝ほくほく顔で戻ってくるのがちょっと微笑ましかったりする。仲いいんだなあ、と。まあ、あたしはその相手の子とは一度も会ったことないんだけどね。友達の友達は皆友達。今度ケンちゃんに聞いてみよっかな。

閑話休題。

今はえろえろな話。

トモダチはそんなあたしの否定にニヤリとすると。

「誰がって……お前どうせ夜中に」

嫌な予感がする。物凄く嫌な予感。今すぐこの場から立ち去りたくなるようなくらい、嫌な。

顔を近づけ、トモダチは、トーンを落として言う。

「――なんだろ」

「……っ」

ああ、やっぱりかと。

「――でさ」

「そ、そんなことしてな……っ!!?」

放送禁止用語。

物凄く卑猥なことを、彼は言う。

女だったときには絶対そこまで直に言われなかったような単語が続々と耳に入ってくる。もう、純情な乙女が聞いたら恥ずかしくて卒倒しそうな単語ばかり。

別にさ、あたしだって純情ぶる気はないんだけど、これは……っ。男に慣れてきたあたしでもこんな言葉を耳にすればたちまち耳の裏まで赤くして挙動不審になってしまいそうになるわけで。

てゆか、やば、無理。絶対、無理。

そこでぴかーんと閃く。

(そ、そうだ。素数を数えるんだあたしっ)

とりあえず、耳に入ってくる言葉は全て意識の外に除外せねばならない。右から左へ受け流すのだ。この方法は、こないだどこかのテレビ番組でやっていた気の紛らわせ方。

(一、二、三、五、七っ!)

それは、素数を数えるということだ。

(十一、十三、十七っ……あれ?)

でもでも、順調に数えていったんだけど、そこでふと気付くことが。

それは、とてもお馬鹿で、間抜けなことなわけで。

(……ちよつと待てよ。一って素数だっけ? ……あれ?)

ああ、お馬鹿なところがまたこんなところでも出たか、と思う。

あたしの記憶にある素数ってものは自然数以上正の約数に入らないもので。でも、よく考えたら、一って何か違ったような気もするわけだ。

どうでもいいといえばいいんだけど、気になるといえば気になる。眠いからか。やっぱりこれは眠いからなのか。それとも単にあたしの頭が悪いのか。

あたしは心中で頭を抱え、ごっちゃの脳をフル回転させる。

(素数素数素数。っていうか、素数って一体。って集中できないから耳に嫌な単語が。い、いやあああっ)

駄目、もう駄目、なんだか色々女に戻れない気がして、駄目。

あたしが絶望の分け目をくぐろうとしているそんな時、ふいに相良と視線があった。

相良は苦笑いすると。

「もしかして、今日のHRでやる文化祭の内容、何しようとか思ってたんじゃないのか? 昨夜は」

相良はあたしのそんなおかしい様子を見抜くと、優しげな口調でそんなことを言ってくれた。

「そ、そうっ」

その通り！ 違うけど、その通り！

相良からの助け船に二度頷くあたし。えろえろ嫌い。

「ああ、そういや今日のHRって文化祭の話すんだっけかー」

そして、トモダチはそちらに興味を表してくれたらしくて、あたしはほっと胸をおろす。あたしは、相良へ敬意のまなざしを送った。
(ああ、やっぱり相良、いい人)

そう改めて感じつつ、やっぱりこういう気配りのできる男がもてるんだなー、と実感する。顔も、かなりいい。堀の深い整った顔立ちに、爽やかであり優しげな甘いマスク。

あたしがもしかた女だったら本気で惚れそうです。優しい相良に乾杯。

……さすが、光が惚れるだけはあるなあ、と。

わいわいと、その後は「そういや、うちのクラス文化祭は何すんのかな」なんて話題に続いていった。クイズ大会とか、演劇とか、踊りとかね。

そんな他愛もないけれど本当に楽しいお話をしつつ、笑いあっているとそれなりの時間がたったようでお馴染みの朝のSHR開始準備のチャイムが鳴った。

「んじゃ」

「あ、うんー」

トモダチは少し離れた自分の席に戻っていき、あたし達も席へと歩きます。

(……と、いちおうお礼言っとなきゃ)

そこでさっき助けて貰ったことを思い出したあたしは、相良に声をかけた。忘れてるかもしれないけれど、いちおうね。

「相良、その、さっきはありがとう」

「え？ 何のことだ？」

首を捻る、相良。

「や、助けてくれたでしょ？ ほら、変な話題になったとき」

「ああ……」

思い出したように声をあげる相良。ちょっと笑って、いいよ、と言った。

あたしは嬉しかったけど、相良はなんでもないことのようにだった。やっぱり、いい人。それに、こんなに爽やかに笑顔を作れる人なんて、相良くらいだろうなあ、なんて思う。

それから相良は小さく微笑むと、

「そういうの、慣れないんだろ？ やっぱり」

「うんー。やっぱり、ああいう話題はねー……」

そう返しつつ、いつもの調子で頬を掻きながら頷くあたし。えろえろ、嫌い。

そこで、気付いた。

……慣れて、ない？ 慣れてないってどういうこと？

「ちょっと待って？ ……それってどーゆー」

どういう意味、と問いかけようとしたその時、運悪く担任の先生が教室へと入ってきて、チャイムが鳴る。

「……と、先生来たし、行くな」

せ、せっかくいいところでっ。先生空気読んでよっ。……読みようがないけどさ。

先生が教室に入ってきたのを見て、後ろのほうの席へと歩いていく相良。

その後ろ姿を眺めつつ、あたしは首を小さく横に捻った。

それにしても、ほんとにどういう意味だったんだろう。

（……でも相良はあたしが元女だって知るはずがないし、深い意味はないかな。考えすぎだね、きつと。……うん）

そんなふうにより簡潔しながら周りと同じようにあたしも、ゆっくりと自席へと腰を降ろしたのだった。

「（やっぱり、思い……つかないなあ）」

ぼそりと、ほんとに誰も聞こえないような小さい声で呟く。

今は授業中で、英語の先生が何かあたしには理解不能のちんぷんかんぷんな言語を喋りながら、黒板に向かってアルファベットを記しているような鬱屈な状態。それをあたしは、眠たい目を擦りながらバインダー型の黄色いノートに記述し、その隣でルーズリーフを開いて、とあることを書き込んでいた。

（千代は無理で、あたしが入ったらちよっとおかしなことになるそう。……あ、何がなんだかよく分からなくなってきた……）

ルーズリーフの真ん中には光と相良のHとSを書かれていて、そのちよっと離れた周りにあたしのR、千代のCが同じように書かれている。

×やら○やらもうぐっちゃぐちゃになっているけれど、それはもちろん、世界で一番大切な親友を考えてのこと。あたしは、これを最近毎夜考えているのだ。睡魔の原因。

題して『光と相良、らぶらぶ大作戦っ！』である。

（絶対！ 絶対成功させなきゃ……っ）
そう。

あの光の相良への告白まがいの電話を聞いた日から改心したあたしは、馬鹿なりにしっかりと念密に計画を立てようとしていたのだ。あたしがどうして他人の恋愛ごとのために寝不足になっただでやるのかは、やっぱり光みたいな心の底から可愛いらしくて大親友の愛しい子には相良みたいな気さくな男前と結ばれて欲しいってのが一番にあるし、今まで邪魔してごめんねってのもある。

（うー……）

あたしはシャーペンシルを動かしながらため息をついた。

（にしても、計画らしい計画が立てられないなあ）

×をまたルーズリーフに書き込むと、ぽきりとシャー芯の切っ先が折れてしまった。それを見て、あたしは無言でカチカチとシャーペンの頭をノックする。

（……せめて、千代が手伝ってくれたらなあ）

そこで、再度ため息。

（ほんと、……なんでなんだろう？ 手伝ってくれないっていうのは）
そう。

どうしてか、千代は手伝ってくれないのだ。この前相談したときも、人の恋路に関係するのはやっぱり良くないとか言われたし。初めは乗り気、というかむしろ彼女の方こそが二人をくつつける気満々だったのに、一体どういう心境の変化なのだろう。まあでも、千代にも千代なりの考えがあるんだろうけどね。あたしと違って賢い子だから。

（ぐ……とにかく、千代は駄目なんだよ。千代は）

あたしはCの記号自体に×印を打ちながら、心中で頭を抱えた。千代が手伝ってくれないとなると、色んな計画が無理になるのだ。

例えば、とRを中心にHとSで囲む。

（前みたく一緒にお買い物に行く……とか）

あたしと、光と、相良。仲良しこよし。

無理。

これは、無理。

一瞬で、駄目だと思った。なんだこの取り合わせ。前みたく千代がいたら男女比が一緒だったので全然いけたのだけれど、このメンバーだとたぶん光は遠慮するだろうし、相良は何やらあたしと光の中を微妙に疑っているようだから、結局彼も遠慮してしまう気がする。

ここで余計二人の間に溝を作ってしまうの、あたし。

（でも……光も、相良が好きならもうちょっと積極的になってくれればいいんだけど、なあ）

相良のことが好きはずなのに、全然アプローチをかけてくれない光。むしろあたしの前ではまるで気のないような素振りですべている。

けど、以前男の子に対して積極的になれてなかったあたしとしては気持ちも分からなくはない。きっと、恥ずかしいんだろうな。特に恋愛事だしね。

むうつとあたしは手の甲を顎元にやりながら考える。

(とにかく、もうすぐ長い休みに入っちゃうんだから、早く何でもいいから二人に接点作らないと……)

長い休みは接点さえあれば楽しみでいっぱい。

そう、楽しみでいっぱいなのだ。色々なところに遊びに行ったりできるしね。でも、作らないと、作らないと考えているうちに、もうすぐ夏休みに入ろうとしているわけで。こう考えている間にも時は一刻一刻と無常にも過ぎていく。

しかも、現状では相良には好きな人がいると言うではないか。そちらも最終的にはきっぱりと片付けないと。

(……あー、てゆか眠)

ふあーと大きな口を開けてから、慌てて口を手のひらで押さえる。元々考えることって嫌いなのだ。どんどん眠たくなってくるから。集中力のない自分が恨めしい。

しかも。

(目、重……)

やはり、連日続いた夜更かしが痛手だったらしい。カリカリという音と、先生の謎な言語が眠気を助長する。

(やば、本気で……)

眠い。眠い。眠い。眠い。眠い。

くらりと眠気が頭にくる。

(授業中は、寝ちゃだめ……寝ちゃ駄目。寝ちゃ……)

そう頭では何度も語りかけるのだけれど、先生の授業は魅惑の安眠効果をもたらすわけで。

かなり、眠い。

抗えるはずもないことに、頑張って抵抗していてもそれは無駄な足掻きというもの。

例のルーズリーフをバインダーの中に写し、ぽとりと黄色のシャープペンシルを筆箱の近くに落とした。

(も、だめ……。ノート、あとで誰かに見せて貰おう……)

そして、限界を知ったあたしは、自分からゆつくりと眠りの国へ旅立っていったのだった。

意識が、ジャンボクリームパフェの山盛りとドーナツの山がいつばいある国へと移る。

教室は、わいわいと楽しそうな騒がしさに吞まれている。クラスのみんなの表情は一樣にワクワクとした明るい表情で埋めつくされていた。

「文化祭何したいですかー」

「ミスコンっ!」

「……何したいですかー」

「ちょ、ひでー先生っ」

「真面目に答えることー。はい、他」

演劇、ダンス、漫才。他には異色なもので男装女装コンテストなるものまでが次々とみんなの口から発せられていく。

今は鬱屈な英語の授業が終わり、H Rの時間が始まったところ。二カ月後にある文化祭では一体うちのクラスは何をするか、というのが議題となって話が展開されていていつている真っ最中。

（去年が合唱とかだったから……今年は何になるのかしら）

今度は、みんなで楽しめる劇とかになればいいなあ、と。

私こと岬千代子もそんな例に漏れず、少し浮かれ気分。時々手を上げて意見を言ったりして、有意義に時間が費やされていく。

「投票の結果、演劇に決定しますね」

そして、結局選ばれたのは演劇。私も興味があったから、嬉しい。

「次に、劇は何をするか、意見を出して下さい。それも投票で決めます。……若干一名を除いて全員手をあげるように」

担任の先生のそんな言葉で、クラス中に笑いが起きる。一斉にクラス中の視線が一人の男子生徒に集まった。

注目の彼は、こんな騒がしいクラスなのにまだ夢の中。

私の視線の先の、私の席から見て斜め前のほうの席には、眠り姫——いや、一人熟睡している小奇麗な顔をした少年が机の上に寝そべっていた。彼は小さく腕を組んで、その上に頭を乗せるというスタイルで夢の世界へと旅立っている。

（よく寝てるなあ……）

今はHRっていう立派な授業中。なのにどうして彼がまだ起こさずに寝ているのかというと、よっぽど眠かったのか英語の時間の後も起きずに物凄く心地よさそうな顔で眠っていたために、呆れた担任の先生が、寝かせておいてやりなさいなんて言ったものだから、未だ彼は眠りの中。

（時々むにゃむにゃと口を動かしてるけど、何か夢でも見てるのかしら……？）

ちょっとだけ、口元が緩んだのを慌てて手のひらで隠す。

白雪姫、シンデレラ、桃太郎。

そして、私がそんなことを思っている間にもみんなは意見をどんどん出していく。

「劇の内容は投票の結果ベルサイユのばらに決定します。後は、配役ですが……男女に分かれてまず決めてください」

他にも色々あったけど、その中で結局選ばれたものといえば、昔少女漫画でも連載されていた題材で、とても世間一般的に有名なものになった。やっぱり女の子たち全員が投票したのが強かったのか。結局私達のクラスはベルサイユのばらをやるわけだ。

男女別れて、配役決め。

そういうことで、私の周りにはクラス中の女の子たちが集まっている。その中心には何故か私。色々意見を出していたのが強かったのか、私が流れ的に代表になった。ほんと、こういうのはみいちゃ

んのほうが得意なのね。

私は役者表を見つつ、周りに向かって問いかける。

「ベルばらってヒロイン2人いるみたいだけど、誰かやりたいって子、いる？」

「やだ」

「無理っ」

「絶対やだーっ」

即答。

ちよつと衝撃を受けた。もしや、私って嫌われてるんだろうか、と疑問に思ってしまうほどのスピードでみんなが答えたからだ。

「あーたらねえ」

せめて遠まわしに断りなさいよ、と小さくため息をつく。

そして私は、

「じゃあやってもいいって人？」

もう一度周りを見ながら問いかけた。すると、お下げ頭の子はうーん、と私の言葉を聞いて考え込んでくれた。もしかしてやってくれるんだろうか、と淡い希望に包まれる。

「だって私じゃヒロインとか釣り合わないし」

まあ、結局、杞憂だったのだけれど。

他の子たちもそんな様子で、首を横に振った。しかも全員そんな様子で誰も名乗ろうとしないご様子。

「あーたらねー……じゃあどうしてヒロイン2人もいるベルばらにしたのよ。決め辛いでしょーが。一人は別に誰もやらないなら私がやってもいいけど、もう一人！」

最終的に誰もやらないのなら、私がやる。

それはまあ、話を進行させている子が普通やるからなのだけど、もう一人くらいヒロインやりたいって子がいなくちゃ話が進まないのだ。配役っていうのはまず主役格を決めなきゃいけないし。

「だってだってー、ちよつと前漫画でもやってたじゃない。それにー、ひいちゃんのマリーアントワネット見たいから。天然子悪魔っ

て設定でしょ？ アントワネット」

「え？」

傍観を決め込んで隣のみいちゃんと脇役は何にするか話していた光が驚いたように声を上げた。

「あ、それ思うーっ。ギャップが堪らないのよー。ひいちゃんなら絶対似合う。いいと思うよ。絶対っ！ 『パンがなければお菓子を食べればいいのに』！」

「あーた達ねえ……」

呆れて物も言えないとはこのことか。

確かに、いつも可愛らしく優しく、天使のような光だからこそ見せる小悪魔な表情が見たいというのも分かるかもしれない。人が時折見せるギャップというのは、男女問わず好きなものだから。

光だったら、絶対ヒロインとしてはびったりだと、そんな確信もあるし。

とはいっても、光の意思があるわけで。元々、光は恥ずかしがりやなほうだから、もしかしたらきっぱりと断るかもしれない。私の知る限り今までにそういう経験もないはずだし。

「……えーっと、光。どうする？ やってでもいい？」

「ええっと……」

苦笑いしつつ光は一瞬考える素振りを見せる。ヒロインになると覚えることも多いし、責任だって持たなくちゃならない。

やっぱり断るんだろうか、と思ったときだった。

「うん。みんながそう言うってくれるんなら、いいよ」

にっこりと天使のような可愛らしい笑みを作って光は頷いた。

本当にやりたいのかはその透き通った瞳からは読めないけれど、ここぞというときにはきちんと断る彼女がいいと言うのなら、きつといいのだろうか。本心は分からないのだけれど、ヒロインをやりたいという子が一人もいないのだから、しようがないと言えましょうがない。

「じゃあオスカル役は……と、いないわけか」

うんうん、と頷くみんな。

そして結局、私がオスカル役をやることになってしまったのだった。心中で、どばっとため息を吐きながら、こういうまとめ役って辛いと思う。中学のときもクラスで演劇をやったことがあるから、慣れてるといえば慣れているのだけど、大丈夫なんだろうか。

（特に私が……男装なんて、なあ）

綺麗に変装出来る自信はない。やるからには、やるんだけどね。

「相良クン。そっちはもう決まった？」

「ん？ ああ、いや実はまだなんだよ」

そう言っただけで配役を書いた表をちらりと見せてくれる彼。

女子の配役は大体決め終わって後はちょっとした子役だけだったので後はみいちゃんに中心を任せてあたし一人男子のところまで来たのだけど、まだ全然決まっていなかった。

そこには、一つの人物の名前しか書かれておらず、後は空欄。それもアンドレ役とフェルゼン役の隣に小さく書かれているだけだから、まだどちらとも決まっていなかった。

でも、やっぱり主役格の一人は相良クンなんだ、と思う。なんとなく主役格の片方は彼がやるだろうなあ、なんてことが分かっていただけ。

たぶん、彼も私と同じように自分から選んだのではなく、誰もやりたがらないからいったんだろうなあ、なんて思う。私たち女子と違って男子は演劇とかに興味ないだろうから、尚更。

「じゃあ、アンドレかフェルゼン、もう一人誰がやるかでもめてるんだ？」

「まあ……いや、大体決まってはきているんだけど」

そう言っただけで、ちらりとまだ寝入っている少年を見る相良クン。

李緒クン、未だ爆睡中。

早く李緒クンを起こしてしまえばいいのに、と思うのだけれど、ここまで心地よさそうに寝入られていたら起こしにくいというもの。

無防備で、こんなあどけない姿を見せられたら、男でも母性本能のようなものが出来てしまう気がする。もちろん、私も。

そして、彼が李緒クンを見るところは。

「え？ 指名投票になったらさー、みんな李緒に投票すんじゃないの？ 寝てやがるけど」

「俺もするなら李緒だな。なんだかんだ言っ、なあ？」
「やっぱ、そんな会話になっていた。」

今更ながら、やっぱ李緒クンは女子だけじゃなく男子にも人気があるんだなあ、なんて思う。

「いや、お前らちょっと待て。ほら、李緒が嫌がるかもしれないだろう？」

そこに相良クンが、困ったような顔で突っ込みを入れる。中々に男子をまとめるのは大変そうだった。

「あー、確かに」

そして、女の子のような可愛らしい顔立ちをした少年が頷く。蓬クンだ。

「じゃ、李緒がおつけーしたら李緒にしねえ？」

「あ、それなら賛成」

「俺も」

そんな坊主頭の子の言葉で、みんな賛成していく。

「まあ、それなら……」

それを相良クンは渋々という感じでオーケーした。

結局、アンドレかフェルゼン役かは分からないけれど、主役格に李緒クンに決定。こちらまあ、予想通りというかなんとか。つ
いさっき女の子たちも男子の配役を予想していたのだけれど、李緒クンと相良クンは絶対主役格やらないと言って言ってたし。

そこで、痺れを切らしたように蓬クンが言った。

「つーか、いい加減こいつ起こそうぜ」

蓬クンが、李緒クンに近づいていく。私たちもみんな李緒クンに視線を集中させた。

それにしてもこんな間近で彼の寝顔を拝見するのは二度目である。ほんとに、幸せそうな寝顔。

(起きたら、どんな反応するのかしら)

少しだけ期待がでる。前のときはその一瞬を見逃してしまったから、少しだけ。

そこで、気づく。

——李緒クンはアンドレかフェルゼン役。

(ちょっと待って……？ 確かアンドレって私がやるオスカルと)

もしかしたら、李緒クンはアンドレ役になるかもしれない。

どきどきと、気づいてしまったら胸が高鳴ってきた。

(恋人役？ 役でも、あたしは)

恥ずかしい、恥ずかしい恥ずかしい。

さっきまで期待していたのが嘘のように吹っ飛んでしまっていた。

起きないで欲しい。心の準備が、欲しい。

けれど、無常にも彼の目覚めのときがくる。

「李緒。起きろッ」

そう言って蓬クンが李緒クンの肩を揺さぶる。

「んー……？」

小さく、彼の瞳が開いた。目が合い、可愛いと思いつつ、どきりと大きく胸が不覚にも高鳴ってしまう。

(彼はあたしが……もし李緒クンがアンドレ役をやるのなら。こ、こここ恋人役だってこと、どう思うんだろう?)

高校の文化祭だからキスとかのラブシーンはなくても、手を繋いだり、抱き合ったりはするはず。愛を囁かれたり、するはず。どうでもいい男の子からされても何とも思わないけれど、気になる男の子からだったら、胸中が沸騰する思いになるわけで。

「んあ……」

そんな不安を私がしているとは露知らず、彼は口を小さく動かした。まだ焦点は合っていない様子で、小さくえっとお、と呟くと、「まだクレープう？」

「は？」

物凄く素っ頓狂なことを口にした。

一体、どういう意味なんだろう。寝言？

李緒クン付近が一瞬呆気にとられて呆然と彼を見る。

そして、その瞬間李緒クンはその大きな両手で蓬クンの女の子のような小さな手をぱつと握る。

李緒クンは、口を大きく開けた――。

「は？」

「んーむう」

かぷり、とそんな擬音つきそうなほどの勢いで蓬クンの指を口に含む。

そして、思いっきり。

「――ッ!? ……ッだぁー!!!!?」

噛みついてしまったのだった。

(16) 完璧じゃないですか奥さん!!

今日の夢は最高だった。

『今日は李子のためにね、いーっぱいお菓子作ったの』

語尾にハートがつきそうなくらい愛らしく光はあたしを上目遣いで見つめると、抱きしめたいくらいの可愛らしい笑顔で苦手なお菓子作りをあたしのためだけに頑張ってくれたことを話してくれた。

モンブラン、チョコレートケーキ、バナナシュークリーム。

あたしの目の前には、デザートというデザートが選り取りみどりと並んでいる。

美味しい美味しいすっごい美味しい！

しかもそれが極上のお味で、とっても美味しかったんだ。

『この日のためにね、すっごく練習したんだよ？』

あたしが大絶賛するとすぐにそんな答えが返ってきた。なんて幸せなんだろうあたしは、としみじみ感じつつ何十個とお腹に入れていくあたし。

パクリ、パクリ。

でも、大量のお菓子があたしの胃袋に敷き詰められていくのに、何故かお腹が満足しそうにないことに気付いたわけ。それで、あ、これってもしかして夢？　なんてことを今更ながら理解したあたしといえば、それからは欲望全開に行動し始めたのだった。

現実では絶対逃げられる背後からの抱擁だとか、膝枕してもらったりだとか、頭撫でたり、頬擦りあわせたり。

『も、もう。駄目だよそんな。でも、李子になら……』

うん、ほんと自分で言うのもなんだけどどんだけ光に飢えてるんだと思ってしまいうくらい色々とした。それこそ産まれたばかりの仔猫を可愛がるくらいに。だって、物凄く可愛いんだもん、光。恥じらって逃げる光ももちろん可愛いけど、無防備な光も新鮮ですっごく可愛い。

頬を染めてぱっちりとした瞳であたしを見つめてくる光は、胸が苦しくなるほどに愛おしくて。もしもこれが夢じゃなかったら鼻血でも出しちゃってたかもしれないほど。

『美味しい？ 李子』

それで、最終的に光を膝の上に抱っこしながら俗にいう『あーん』をしあっていたわけだけど。幸せの限りを尽くしていたわけだけど。残念なことに夢でもお菓子はなくなってしまっていたところで、あたしは最後の一つを食べ終わってしまったところだった。分かっていたことだけど、しょぼーんなあたし。でも、ま、まだ光がいるしとあたしは思いながらまた幸せ心地で光の柔らかく雪のように白い頬を撫でていた。

そんなとき、光からやっぱ頬を染めながらニッコリ満面の笑みを見せられて、もう一つあるよ、なんて言ってくれて。

目の前に出てきたが、イチゴとか、バナナとか、果物のたくさん挟まったクレープだった。

『李子、はい。……あーん』

で、こんな可愛らしい光から『あーん』されたら、そりゃあもう思いきり勢いよく噛みついちゃうわけ。

もぐもぐ。もぐもぐ。

でも、何故かそこで、突然のボーイソプラノのような悲鳴が聞こえたんだよね。

それで、残念なことにあたしは最後のクレープを食べ終わる前に運悪く夢が覚めてしまったんだった。まだまだ、味を確かめてなかったのになあ。まあ、あそこまで出来たらもう満足なんだけど。

――で。

今は現実。目の前にはつい先ほどまでの幸せすぎる光景なんて広がっちゃいない。未だ胸はポカポカ暖かいけど、視界には光の姿なんてなかった。

周りには、なんと、何故か人ばかり。

「んーっと」

な、ななな何ナニなに！？

そう、幸せすぎる夢から起きたら、よく分からない状況に陥っていたのだった。

「み、みんな一体」

目の前には顔を歪めて手を抑えるケンちゃんの姿と、あたしとケンちゃんの周りを囲みながら呆けた瞳であたし達を見つめるクラスの皆さん。

当然、あたしは状況なんて飲み込めないわけで。今まで幸せの絶頂期だったわけで。

「えと、んっと……ありゃ」

とりあえず目を擦りながら目の前のケンちゃんに視線を戻すと、代わりにとあることに気が付いてしまった。

「わ！ ケンちゃんどうしたの？ それ。すっごく痛そうだよ……！？」

それはケンちゃんの手の甲に物凄く痛そうな歯形がついていたからなわけで。ギザギザの形に白くなっていて、すごく痛々しい。

「早く手当しないと！」

「ぷ……」

「へ？」

「くくっ、あははははははっ！！」

ええええええ？

でも、あたしがそう問いかけると、何故か周りのみんなは笑い出した。ケンちゃんの身体が、ぷるぷると震えている。

どうしたんだろう？ 痛みでかな。

「大丈夫？ ケンちゃん」

「……う、うるせえッ！」

お、怒ってる！？

突然、親の敵を見るような目であたしを睨んできたケンちゃん。い、一体何で……！？

あたし何もしてないのに。だって今まで寝てたんだもの。

「ちょ、もしかして俺なんかした!？」

あたし、まさか寝ている間にもみんなに迷惑かけちゃったんだろうか。寝相とか寝言とかその他もろもろとか! ……消えたい。

「け、ケンちゃん……?」

あたしは、おそろおそろ問いかける。

てゆか、周りが何故こんな笑ってるのかが気になるんですけど。

相良も口に手を添えて笑ってるし。

「お前ら……」

そして、顔を赤くケンちゃんは可愛らしい顔を歪めると、何やら周りを一睨みして、あたしに視線を戻す。

「……もういい」

「そ、そう?」

ぷいっとそっぽ向くケンちゃん。あたしが問いかけると仏頂面で視線をそらしたままケンちゃんは頷いた。とりあえず、一件落着らしい。よく分からないけど。ほんとよく分からないけど、ごめんね? ケンちゃん。

「ええっと、ところで」

それで、ちよっと周りの謎な笑いに疑問に思いつつ、さらに疑問に思ったことを問いかけた。

「……揃いも揃ってみなさんなんなんでしょうか? なんで、俺の周りに集まってんの?」

まさかよだれついてないよね、と右手で口元を確認しながら。

あたしの周りに集まる理由が分からない。だってあたし寝てたのにさ。

「ああ、実は、さ」

あたしが問いかけると、目が一瞬相良と合う。相良は、これ、と一枚の用紙を差し出した。

——ベルサイユのばら。配役表。

そこには、そう書かれている。

「あ、ベルばらっ」

「え？ 知ってんのか？ 李緒」

「うんー、漫画見てたからさ」

あたしがそう答えるとへえ、と意外そうに隣にいたトモダチが声をあげた。

そんな様子に、男の子は見ないもんなんだろうか、ベルばらとか、と首を捻る。あたしの元中の女の子の中じゃ結構流行ってたんだけどなー。やっぱり少女漫画は男の子には遠い存在らしい。

「で、これ……って！？ てゆか、今まさかHRの時間！！？」

「今更かよッ」

それまであたしから視線を逸らしていたケンちゃんからのナイス突っ込み。

「ぶっ……」

周りで吹き出す声がある。そしてそんなことはお構いなしにあたしは教室内にある掛け時計に目を移した。

なんと、HRはあと十分ほどで終わろうとしていた。

「って俺何分寝てたんだよ……」

英語の授業から換算すれば、軽く一時間近く寝ている計算になる寝てたんだあたし……。どおりで、眠気がもうほとんど吹っ飛んでいるわけだ。

ていうか、寝てたんなら起こしてほしいんですけど。特に先生。そう思って教卓に座っている担任の先生のほうをちらりと見ると、様子をうかがっていた彼は笑って「よく眠れたかー」とあたしに問いかけた。「眠れたけど、微妙に置いてけぼりされた気分ですーっ！」。

そんな風に、あたしと先生がちよっとした談笑を交わし終わると、相良が口を開いた。

「李緒、投票で決まったんだけど、別にベルばらでいいよな？ 今更変えれないだろうけど」

「あ、うん。もちろんっ。俺この話好きだしー」

「そっか。なら良かった。お前寝てたからちょっと心配だったからさ」

「いいよ、そんなのー」

苦笑して問いかける相良に喜んで頷くあたし。

昔ハマったお話なのでとっても懐かしいのも確かだし、去年は合唱だけだったので、みんなで力を合わせてやる劇なんてほんとに楽しそうだったからだった。今なら、男の子たちとも友達関係だから、一緒に楽しめるしね。

「結構前に見たからあんまり覚えてないけど、盛り上がりそうな内容だよな」

男装の麗人に、昼ドラ展開に、熱い決闘！　そして悲しい悲しい別れ。

あたしが見たのは漫画だけだったけど、なんとも言えない面白さだった。

そんな風に、ちょっとうきうきとした気分になりながら手元の配役表を見ると、今更ながらあることに気づいてしまった。

「……あれ」

「どうした？」

あたしがぼつりと疑問を口にするのと、相良がそれを拾う。

「ねね、まだ配役決まってるんだ？」

手元の用紙には、相良の名前が一つだけ。それ以外は空欄なわけ。

「それとももう決まっちゃってたりする？　書いてないだけで。主役とか」

「ああ、女子のほうは」

相良はそう言いかけ、視線をあたしの席の後ろ側に移す。

あたしもそれに釣られて席の後ろ側を振り返ると――。

「あ、千代」

ボーイッシュな短めな髪形の、可愛いというより綺麗という言葉の似合う女の子が立っていた。背後にいたから全然気付かなかった

らしい。

「こっちは、決まってるわよ」

千代は何故だか頬を赤らめながら頷く。千代もしかして笑ってたのかな？

あたしは千代の話に耳を傾ける。

「オスカル役は私で、アントワネット役が光」

「へーっ」

綺麗な子と可愛いらしい子。

感覚的にオスカルは美女でアントワネットは美少女ってイメージがあるから、ちょうどいいんじゃないかな、と思う。しかも光と千代は学園の中でも物凄く人気があるから、これは大成功しそうだった。メンバーだけでもお客が来る気がする。

「それで、男役の主役さんのほうは？」

あたしは気軽に問いかける。こんなにヒロインが目立っているんだから、相良は確定かな、なんて。だって、うちのクラスで一番かっこいいのは断然相良だし。男の子で可愛いのはケンちゃんだけど。すると案の定相良は「俺と……」と言って、あたしを見つめた。

そして、何故かあたしから目を離そうとしない。

「え、何??」

ま、まさか……!?

なんだか嫌な予感が出て、問いかけた。相良は言い淀んでいるように、頬を二度掻くと、

「あのさ、李緒。悪いんだけど」

「李緒、お前だよ。お・ま・え」

相良が申し訳なさそうにいうのに対し、あたしの目の前の席に座るケンちゃんはぶつきらぼうにそう言い切った。

「へっ……!?!」

誰が主役って!?! あたしが!?!?

予想していたけど、的中して欲しくなかった予感。

まさか……冗談だよね? よね?

きよろきよろと周りを見るけれど、うんうんと頷くみんな。相良まで困ったように頷くから手に負えない。

「いや、止めはしたんだけど、さ……」

相良が苦笑を交えつつ、悪いな、止め切れなかったと最後に言った。相良が言うからには、本気の本気みたいだった。

「ま、マジで……」

やっぱり、寝てたからその罰として決定しちゃったんだろうなあ。クラスみんな、先生。よく寝かせてくれてありがとう。感謝します。でも、ちょっと恨みます。

っていうか。

(……これ、い、いぢめですか?)

心中で軽く泣きそうになりながら思う。

せめてさ、やる人がいないなら投票とかあるじゃん！ それで人気のある人が選ばれたりするもんでしょ？ カッコいい人とか、面白い人とか、リーダーシップのある人とかっ！ 全部ないあたしなんかで。……ううつ。

目立つのは嫌いじゃないよ。劇をするのも嫌いじゃない。楽しいしね？

でもでも、正直、ネタならいいけどこの主役陣を見て、うんとはちょっと言いにくい状況だった。

「えーっと、その。もしかして、みんなの総意だったりするのかな」

「あー……うん。まあ、一応、そうだな」

相良がやっぱり困ったように小さく頷く。もしかして、というか絶対優しい相良のことだから、頑張って止めてくれたんだろうなあ。寝てる人間に押し付けちゃ駄目っていう。

でも、やっぱりみんなの総意なら、やるべきなのかな……でもなあ。

けどけど、ここで断って空気を悪くする嫌だなあ、とも思う。性格が悪いとか思われたら、本気で嫌だ。

「んー……」

「李緒、嫌なら別に断ってもいいんだぞ？」

氣遣ったようにあたしに言ってくれる相良。やっぱり相良は優しいなあ。

悩むあたしは、視線を手元の移す。アンドレ、フェルゼン、そこにはそれ以外にも脇役がたくさん載っていて。

(……うー、あたしも脇役がいいなー。脇役ならそんなに目立たない役割だから適材適所だし。それに別に裏方でも——あつ)

その時、とあることに気づく。

相良の名前はアンドレとフェルゼンの欄の隣に書かれているだけ。と、いうことは、まだ相良もこの二つは選んでいないというわけだぶん、今言ったらアンドレかフェルゼンかは選べるのではなからうか。

脳裏に、世界で一番親愛なる友人の姿が浮ぶ。

「あ、あのさ、みんな」

「ん。やっぱり辞めるか？」

相良が苦笑して問いかけるのに対して、あたしは首を横に振った。

「ううん。……あのさ、俺。やってもいい？ アンドレ役」

ごくり、と喉を鳴らす。

おお、と周りのみんなが楽しそうにどよめいた。

「李緒、本当にいいのか？ 嫌だったら抽選にでもしようかと思っ
ていたんだけど」

「そりゃああんまりやりたくはないとは初め思ってたけど」

驚いたように相良が問いかけるのに対して、少し笑って返す。

だってあたしは別に、目立つこと自体は嫌じゃないから。ただ、自分には不釣り合いな気がしているだけで。それがなければ、むしろ
主役なんて本当に楽しそう。

それに、やらなくちゃいけないことも、出来たしね？

「でも。よく考えたら楽しそうだし。みんながいいなら、やりたい、
かな」

「マジ？」

「マジ!!」

ケンちゃんの声に元気よくあたしは返す。いっぱい練習して、絶対みんなで成功させるようにしよう。あたしはそう胸に誓った。やっぱり、やるからには楽しくやらないとね。

……で。

あたしは『光と相良、らぶらぶ大作戦っ!』のことを念頭に置き計画を立てることができた。相良と光が主役格で、これで接点作りは成功。文化祭は夏休み中も学校に出てこなきゃなんないから、遊びの話なんていくらでもできる。

しかも、しかもだよ?

これで、二人は劇中では恋人役! 完璧じゃないですか奥さん!!
そう、これで目標に一気に近づけたのだった。

——あたしは、その時、希望が出てきたことによって気分が高揚していた。

だからこそ、余計に、遠くからあたし達の動向を見守っていた、少女の小さな呟きなんて聞こえるはずもなかったのだろう。耳を澄まして、聞こえないくらい小さな呟きを。

「……どういう、こと?」

今は学校から帰宅中。夕方だというのに周りはまだまだ明るく、昼のよう。本格的に夏に入る手前のような感じだった。

歩道を歩くあたしの隣には天使のように可愛らしい少女、光がいる。

あたし達は歩きながら、昔のことを話していた。

「ほんと昔流行ったよねー、ベルばら。みんなで回し読みしたりして」

「うん、そうだね」

すると光は頷き、あたしに笑みをやった。

「そういえば、あの時――」

あたしは、それに続く会話をしながら、思っていた。

(……っかしいなあ?)

どうも、今日の光が大人しい。なんだか変な感じだ。なんだか、光には失礼だけど、作り物の笑みのような。心からの笑みじゃないというか。

あたしも朝変だったけど、光も寝不足だったりするのだろうか。でも、今朝は普通だったはず。いつものように心からの胸躍る笑みをあたしに見せてくれていたし、今みたいな雰囲気ではなかった。でも、思い返しても原因は分からないし……。

そんな風に思案していると、とある結論に思い至った。

まさか……?

「ねえ、光」

あたしはまさか、と思うと光の手を引き、胸の中に収めた。

胸に収めるのは、彼女の体温も知りたかったから。

「り、李緒……?」

戸惑いの瞳であたしを見つめてくる光。少しいい匂いがして癒されつつ、可愛いと思いつつもながらもぴったりと光の染み一つない綺麗なおでこに手を当てた。

「ん……」

光はきゅっと目を瞑る。

「んー……」

あたしは唸った。

おでこはたぶん、平熱。だんだん熱くなっていている気がするけれど、たぶんあたしの勘違いだろうか。

あたしは光から手を離すと。

「熱は、ないよね……良かった」

そう小さく呟いた。ほんと、ほっとした。

「突然どうしたの? 李緒」

「いや、ちょっと今日は何ていうか……こんなこと言ってもいいの

か分かんないけど、おかしい感じがしたからさ」

光が少しいつもの彼女ではないことなんて鈍感なあたしでもすぐに感づけた。

だって、少し態度がおかしいから。

笑い方もぎこちないし、雰囲気もいつもと違う。

もしかして熱でもあるのかと思ったのだけど、違う様子。

じゃあ、どうして？

ほっと思う反面、もしかして悩み事でもあるのだろうかと思ってしまう。

「ねえ、悩んでることって、ある？」

あたしは光から手を離すと、また歩きつつ問いかけた。

もし悩みでもあるのなら、あたしの家はもう見えるような位置にあるから家で相談に乗ろう。それで、悩みが解決するまで光が嫌って言ってもずっと一緒にいよう。そう決意する。

すると。

「李緒」

あたしを呼ぶ光の声。光は、小さく下を向いていた。

だから、その時、光はどんな表情をしていたのかはよく分からない。

「うん？」

「……ねえ、李緒？ どうして、フェルゼン役、じゃないの？」

光が、何かあたしの真意を探るように問いかけてくる。

「どうしてって、選ばれたらやっぱりやっといたほうがいいかなって。よく考えたら楽しそうだしね。と、家だ」

そこで、あたしは自宅の前についたことに気づいた。後は、あたしの家で話したほうがいいかもしれない。

中に入ろっか、とあたしが誘おうとしたその時、また光が問いかけてきた。今度は、あたしの目を見て。

「……じゃあ、どうしてアンドレ役にしたの？」

「え？ や、アンドレ役のほうが純粹に楽しそうだと思って」

本当は、アンドレよりもフェルゼンのほうがやりたい。でも、フェルゼン役は相良じゃないと、アントワネット役の光と接点を合わせにくいからなんだよね。

でも、そんなことはまだ言えない。だって、あたしは光の好きな人を知らない設定だから。

「ふうん……」

あたしが返事をする、光は感情の见えない透き通った瞳であたしを見つめた。

表情も全く作っておらず、無表情。何とも言えず、ごくりと唾を飲み込んでしまう。

「光……?」

やっと喉から出てきたのは、彼女の名前。小さく、不安になって光の名前を呼んだのだった。光、今何を思っているの?

あたしは、こんな光を一度も見ただ覚えがない。長年付き合っているのに、ただの一度も。

そう。まるで、睨んでるような、そんな見つめ方だった。

——え? 光があたしを。

睨ん、で?

「嘘つき」

「——!？」

はっと思った時には、光は背中を向けて家の門の前で立ち止まるあたしから視線を外し、あたしが想像すらしていなかった言葉を放つと、足早にこの場所から歩き去っていく。

「ひか……り?」

あたしは、その後ろ姿をじっと見つめることしかできなかったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3751b/>

もしもあたしが***だったら

2010年10月12日17時46分発行